女子文壇



第九年
第五號

四月號

1913



十五圓の蓄音器

我社の偉大なる設備と職工の熟練とは一面に生産高を増し他方に製造費は節約し得て茲に在來二十圓の器械を十五圓と云ふ破格の廉價を以て發賣す
坊間元より十五圓の器械なきに非ざるも彼の玩弄物の如きものとは天地霄壤の差ある完全なる器械也

新音譜賣出し

本月の新音譜は左の兩面盤なり

豐竹呂昇義太夫（千本櫻、野崎村）
竹本源太夫同三味線　勝市
（壁仇討三人上戸（上）（下））
京山小圓　浪花節
（倉橋傳助、堀部安兵衛）
吉田奈良丸　同
（淺野内匠頭最後（一）、（二））（同（三）（四））

赤紙印、赤鷲印　正價金貳圓也
詳細は左記に御申越を乞ふ
東京銀座一丁目（長電話京橋二五七、二五八、二八八七番）
株式會社 日本蓄音器商會
全國に四十の支店と三百五十の特約店あり便宜御買求を乞ふ

■新興文藝を談ぜんとする女性の必讀すべき書■

青鞜小説集

新刊

四六判三百五十頁
頗美本
定價金八十錢
送費六錢

青鞜社編

小笠原さだ　裝幀（自畫自刻）

執筆者

野上彌生　岩野清
小笠原貞　岡田八千代
水野仙　神崎恒
小金井きみ　神近市
荒木郁　森しげ
尾島菊　林千歳
加藤籌　茅野雅
人見直　藤岡一枝
加藤綠　木内錠

小説十八編

女流文藝雜誌

青鞜■四月號出來

定價一冊廿五錢
送費二錢
六ヶ月分一圓五十錢

發賣所　東京市京橋區南傳馬町三丁目（振替東京五六一四番）　東雲堂

女子文壇

四月號

第九年第五號

目次

△拳の松……………………………………………………………………鍋島侯爵令妹
△前うしろ……………………………………江木定男氏夫人
△合壁かゞみ……海軍少將加藤氏令孃きみ子、久留島子爵令孃、東郷男爵令孃誠子
△白一木　夢…中村すま子孃、山内男爵令孃、千家男爵令孃秀賀子
△琵琶の轉け、樂器の前…………………………………………
△第十五銀行頭取園田孝吉氏家庭…………………
△庭の植草……ホルトフツク氏庭園に於ける令孃の集合、鐵道院永井亨氏家庭
△新　婚　帖……伊集院清氏と新夫人、中島醫學士と新夫人、馬越恭平氏令嗣と新夫人、上田進一氏と新夫人

○何んな男が女を解するか(つゞき)……………………菊池　幽芳(二)
○歸朝して日本の婦人に望む…日本女子大學校長…成瀬　仁藏(八)
○名　流　婦　人　日　記…………………………………………(三)
△二月一日より十日まで……岩崎惠次郎氏夫人……岩崎雅枝子
△十一日より二十日まで……陸軍士難波邦彦氏夫人……難波里久子
△二十一日より二十八日まで……實業家朝吹常吉氏夫人……朝吹磯子
○新しい『女らしい女』……………………………長谷川天溪([illegible])
○隱れたる精神力(下)………………文學博士…福來　友吉([illegible])
○御即位式の話(中)……………………………………外島瀞之助([illegible])
○誤解されたる貞操……女子高等師範教授文學博士…吉田　熊次([illegible])
○四　つ　街　道……………………………………竹久　夢二([illegible])
○訪　問　み　や　げ……………………………………婦人記者([illegible])

○媒酌の經驗……………………（五六）
△母の考へと娘の心とは違ふ……富永嚴道院參事官夫人……富永國子
△本足を辛抱するのは夏緣なり……岡松工學博士夫人……岡松民子
△見合の寫眞……江木定男氏夫人……江木ま寺子
○婦人年中行事……………………四月（六五）
○皮膚毛髪と乳房及び臀部（つゞき）……澤田順次郎（六九）
○元祿時代の花見……………………男猿女浪（七五）
○西洋音樂の稽古……東京音樂學校敎授……神戸絢子（七八）
○若き女の友情……女子學院講師……三谷民子（八二）
○無名婦人傳（二、三）……初鹿野道子、つゆ女（八四）
○婦人職業案内（四、タイピスト）……山田菊水（九〇）
○吾行く途……………………白木いと子（九七）
○川重次郎の芸談……………………桃川燕玉（一〇三）
○新の流行と髪ざし……………………大西白牡丹（一一四）
○當月の園藝 四月……………………八葉生（一一六）
○化粧問答……………………藤波芙蓉（一一八）
○文藝欄……（小品文、小說、詩、和歌、俳句、群見）（一二三）
○雜報……………………（一四〇）


獨逸に多年研學した藥劑師間中網彦氏の創製で
ふけ、拔け毛をとめ髮のくせを
直す新香水
横口瓶なれば振掛けに最も便
ふけ取香水
レゾール
特製箱入一個一圓卅錢
大瓶　同　九十錢
小瓶　同　五十五錢
全國有名化粧品店藥店洋物店にて販賣す
RESOL
發賣元
東京本町　合資會社　博愛堂
電本二八六、四四八四、振替八八一三番
代理店
日本橋横山町　村田屋　柳下商店
電浪二二〇、一六〇〇、振替四四九八番
關西特約店
大阪市馬喰町二丁目　伊藤仁壽堂
大阪市平野町二丁目　丹平商會分店



春の松原



(長谷川時雨女史庭園に於て　右時雨女史令妹)

(本社寫眞部撮影)

前うしろ



江木定男氏夫人ませ子（江木榮子の令妹）

滋養强壯 グリコナール錠

▼北里博士指導佐伯氏發見の方式に由り製出したる本品は卓越廣汎の用途を有する滋養强壯劑にして特に肺結核慢性胃腸病及一般病後産後等の營養不給に適應す



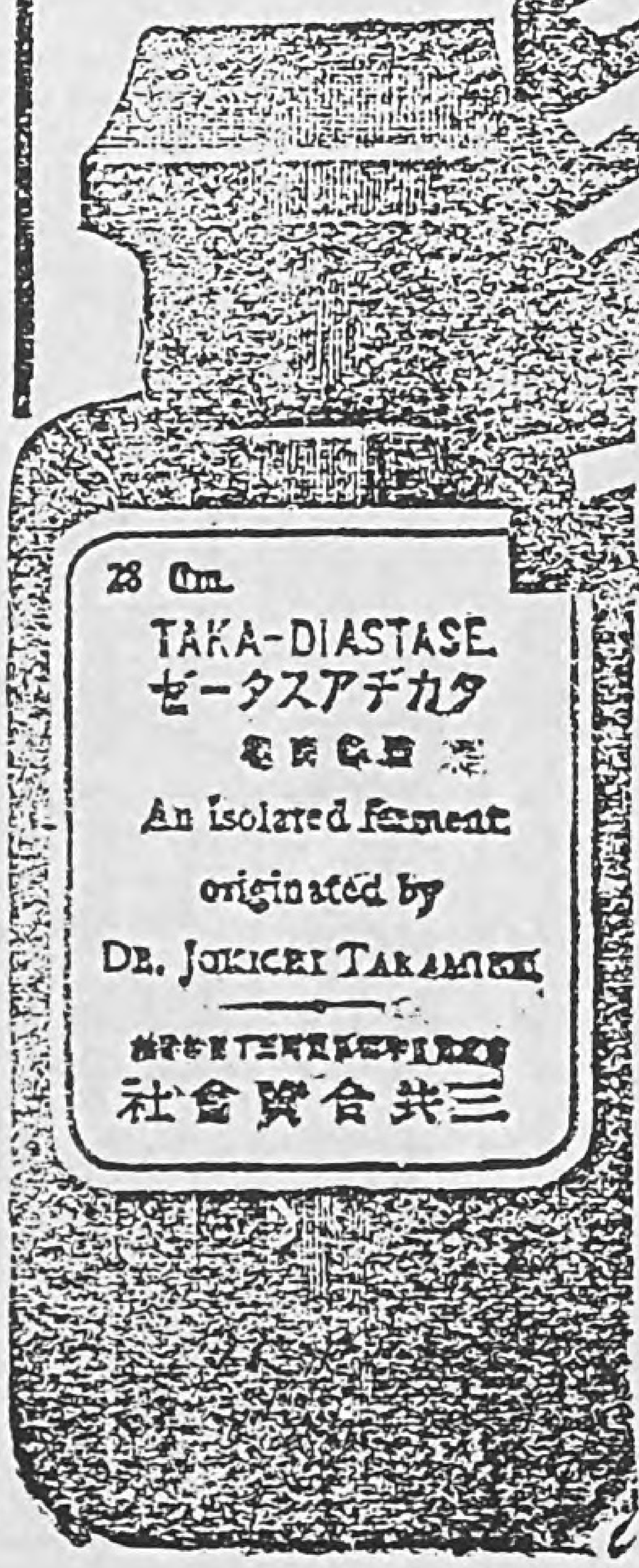
各地有名藥舖にあり
定價百錠入金壹圓
外送料金八錢
說明書御申越次第郵呈す

發賣元 東京市日本橋區室町三丁目 三共合資會社

本劑と同一なる消化効力ありと稱し粗惡品を强賣する向あり信用厚き藥舖より御買上を乞ふ

タカヂアスターゼ

類似品數多あり
高峰博士發明品と
御指定を要す



本劑の試驗報告御申越次第進呈す

發賣元 東京市日本橋區室町三丁目拾番地 三共合資會社

令嬢かゞみ



海軍少将加藤友三郎氏令嬢きみ子

久留島園子嬢

男爵東郷安氏令閨德子

白木蘭



男爵千家尊福氏令嬢多賀子



中村すま子嬢



山ノ内男爵令嬢

衣裳の薫

衣類保存高貴香料

長閑けき春の初櫻、花見の期節となりました。花の下そゞろ歩きに、「衣裳の薫」の移り香床しき晴着をお召し遊ばせ！行交ふ毎にゆらぐ薫は、自ら氣品を高めます。

春着の出し入れに、衣裳を損じ玉はぬやう、高雅な薫を保ち、蟲や濕氣の害を防ぐ、『衣裳の薫』をお忘れ遊ばすな！

衣裳の薫は全國著名の呉服店、小間物化粧品店に販賣致してをります

大阪市北區源藏町
衣裳の薫發賣元
飯田東籬園
電話長東二八七八番
振替口座大阪一〇六一〇番

新文林

四月一日發行（四月號）定價拾錢 送料壹錢

△直覺的問答……長谷川天溪
▽深夜（詩）……Y生
△ファン、ゴオホの手紙（三）……高村光太郎
▽この頃は私は……山田邦子
△蜂と人……岩野泡鳴
▽汚き日（詩）……水野葉舟

懸賞文
小說（水野葉舟選）
詩（今井白楊選）
短歌（窪田空穗選）
短文（前田晁選）
普通文（水野葉舟選）
俳句（內藤鳴雪選）

△小盃（小說）……上司小劍
▽皮肉屋と云ふ事は卑怯者と同じ……高村光太郎
△根の尖端（小品）……水野葉舟
▽三月文壇の消息……△△生
△現在（詩）……今井白楊
▽卓上雜感……捧下生

東京神田今川小路二丁目
忠誠堂發行
振替東京二〇四三一
電話本局四九六六
賣捌所 全國各地書籍店

月やく不順は婦人病を起すもと

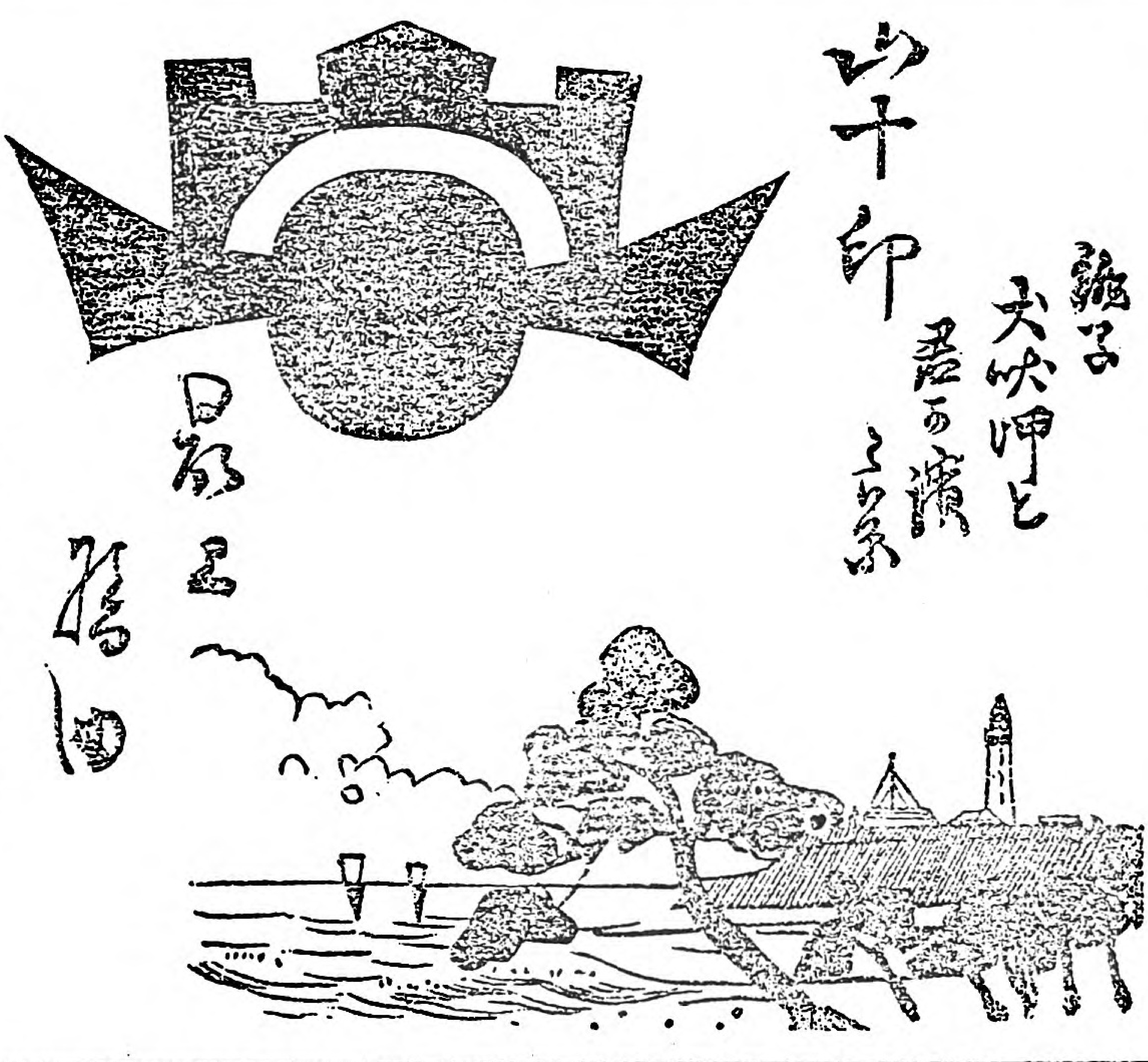
月やく不順は實に厭な病で一旦是れに犯されると大概の婦人は人にも秘し家人にも内々で治さうと思ふて彼此氣を揉んで居る内に治療が困難になり遂には取返しの付かぬ重い子宮病や血の道の病となり一生を悲しい間に日を送らるゝ婦人が少なくありません是等の方は始め病の輕い内に秋元藥院方劑の整血丸を御服用なさいましたら身體には何の障りなく極安らかに月やく滯りを下し厭な子宮病や血の道を患ふ心配がありませんから月やく不順にて御困りの方は、

郵券三錢封入申込みあれば詳細にお知らせ致します

東京市京橋區木挽町二丁目十三番地

申込所 **秋元藥院**

振替口座東京九九八九番



釀造元 千葉縣銚子港 **岩崎重次郎**

（電話銚子三〇番 振替口座五七二番）



燈籠のかげ



樂器のまへ

（本社寫眞部撮影）



第十五銀行頭取園田孝吉氏家庭

秘密でお知らせ申上候

梅毒新薬

ビドクトル

梅毒一切ひえしつかさ横根かんそ等の大妙薬にて實にビツクリするほど妙によくきく
壹週六拾五錢貳週壹圓廿錢參週壹圓六拾錢五週貳圓半

麻病新薬

リンドクトル

りん病せうかち唯一専門の特効薬にして面白いほどヨクなほる不思議の靈藥なり
壹週六拾五錢貳週壹圓廿錢參週壹圓六拾錢五週貳圓半

陰萎新薬

強精丸

神經衰弱◎陰萎◎遺精◎早漏◎過房手淫の障害等總て生殖器能の疾患を治癒する新劑也
小包七拾錢中包貳圓　大包三圓
特別五圓

秘密珍劑

長命丸

昔より名高き四ツ目屋の長命丸にして効能は皆さん能く御存じの男女外用粋薬也未だ知らぬ人は早くお試あれ
小器入廿錢中器卅錢大五拾錢別壹圓

花柳粋薬

春雨（はるさめ）

極柔かき局部外用の珍劑にして花柳病を豫防し毛ぎれたゞれ等を治す妙効用ひて知るべし
ホントに妙な薬
小器入廿錢中器入卅錢大器入五拾錢

月さらゐ

月經丸

月やくの滯りを無害に安全に流下する月さらゐの妙薬
五拾錢、壹圓、貳圓、參圓、五圓
毎月三日分宛飲み置ば月經くるはず

月經中の要品

月經帶

月經の際之を使用せば月經の漏洩する憂なく立居歩行に最も安全便利也何十回も使用し得
並製八拾錢
上　壹圓

避妊袋

子宮サツク

子の出來て困る時に用れば姙娠せずゴム製何十回も使用し得て便利也
並製七拾錢上壹圓
ルーデサツク
四個廿錢八個卅五錢十八個七拾錢

毛はえ薬

毛生劑

頭、口ひげ、まゆげ及陰部等すべて有るべき所に毛なき人用れば美毛發生する妙劑也
卅錢五拾錢壹圓
子宮洗ひ發明器
定價壹圓貳拾錢

美顔料

美白劑

色を白くしキメをこまかくしツヤを美くする高等美顔料なり卅錢五拾錢
懐中香水紙
十二枚壹袋參拾錢

避妊制限器

アトシア

子のほしき人には姙娠せしめ子の要らぬ人には避姙せしむ
則ち懐姙避姙自由自在の新案特許品
説明書附壹組壹圓

和合の礎

いもり黒焼

男女の中の悪き人うばの小兒になつかぬ等總て中を善くする和合の奇薬
並五拾錢特製壹圓
寢小便袋
大人用男壹圓四拾錢大人女用壹圓卅錢小兒用男女各壹圓

大阪　高麗橋壹丁目　振替三三〇番　**長命堂薬房**

此廣告の品御入用の節は振替又は爲替にて御送金次第直に郵送可仕候

現化學界に是以上の品ある哉

フアーノメン

獨逸國新發見（色素を損せず、地質を害せず）

シユミ拔劑

一本送料共金四拾參錢



和洋の衣服其他のシユミ、アカ、油を最も容易に落し去る家庭の必要品現はる!!!

▲墨、インキを除くの外如何なるシユミにても二寸四方の汚れは一本にて百回分は大丈夫取れる事請合

使用説明書を熟覽の上實驗せられよ

日本一手發賣元

大阪市北區老松町一丁目

長南商會

電話東二九六四番

振替大阪一七九八〇番

關東大取次店　横濱市山下町　ノーマル

關西大販賣店　大阪堂島　高橋盛大堂

庭の樹立



ベルトフツハ氏庭園に於ける令孃の集合



鐵道院永井亨氏家庭

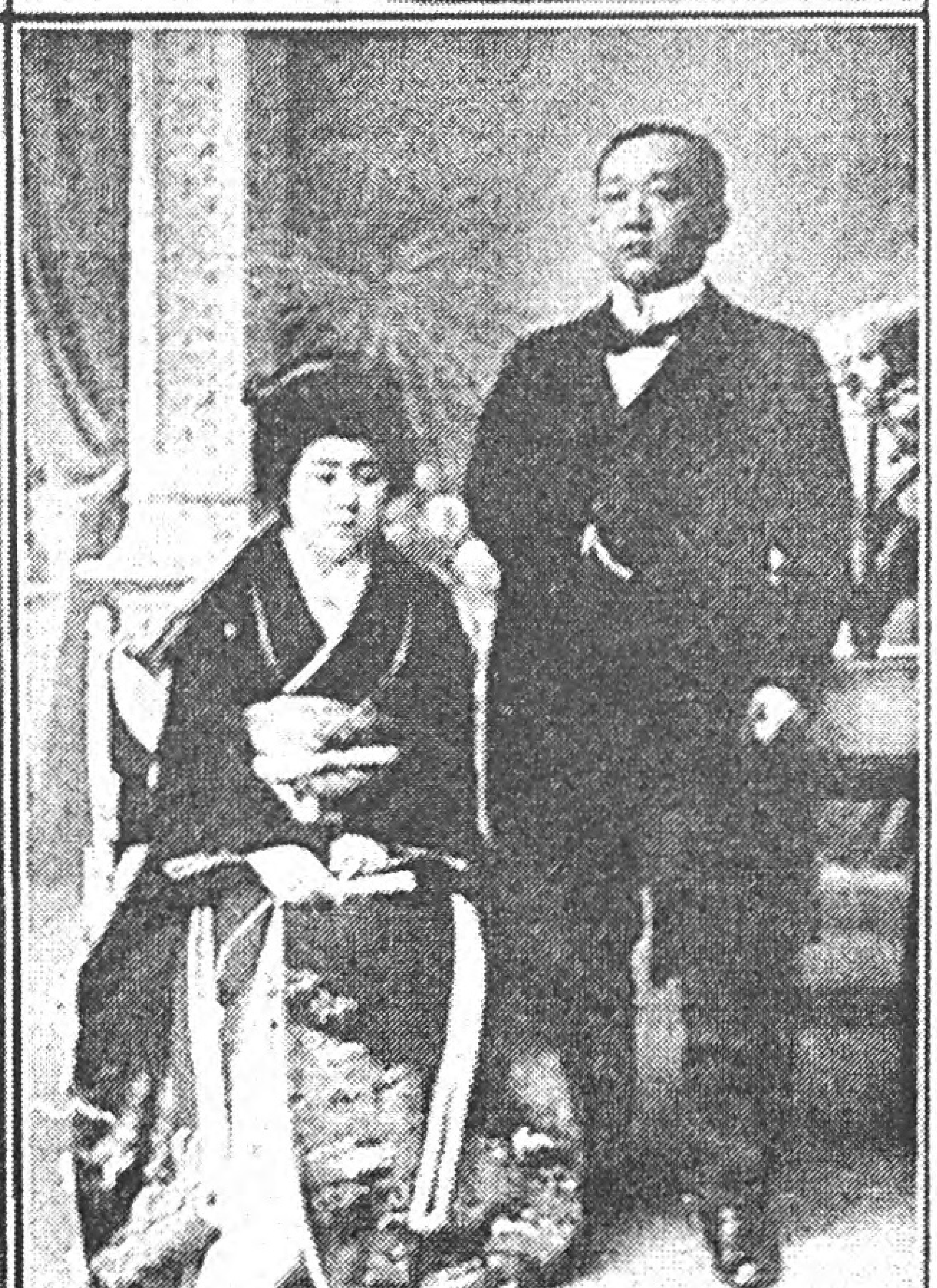
新婚帖



第十六銀行員伊集院清氏と夫人道子



醫學士中島駒次郎氏と夫人藤子



馬越恭平令嗣幸次郎氏と夫人やす子



上田進一氏と夫人



未來の立身を望む者は必ず見よ

催眠術通信教授

說明書無代進呈

不可思議なる幽理と靈怪學の幻術とを應用せるが如き方法にて我が心の儘に人々の身心を統御し得ると云ふことは、如何なる事業に於ても成功の捷徑である。諸子よ冷靜なる頭腦を以て、立身成功家の過去の行程を考へらるゝの時、吾人の斷定の僞で無いことをいなみ難いであらう。催眠術及心力波及術はこれが法則を研究する科學であつて單に人を眠らしむるに止まる術ではない。これを應用して疾病を治療し惡癖を矯正し得るは今や確固なる事實であつて進んでこの原理を應用し處生上大なる利益を得るは實に理の當然である斯術は正則完全なる本會の通信教授法により、僅少の學費と日時とを以て確實に習得する事を得べし斯術の說明及實驗、本會々則等を詳述せる書冊は、葉書にて申込次第送呈すべし

大阪市東區生玉町

帝國神秘會

女子文壇叢書

（第壹編）

小説 町むすめ

水野葉舟先生序
前島優梨子作

大好評 初版將に盡んとす

溫順珠の如き女の心を持ちて女の生活を描寫したる完全無垢の短篇小説集

全一冊寸珍 二百七十頁 作者寫眞入 正價參拾錢 送料金四錢

（第貳編）

姿見日記

河井醉茗先生序
山田邦枝子著

好評如湧 初版將に賣切れんとす

舊い世界から新しい世界へ出やうとして水火の中をも辭せざる新らしい女の血あり涙ある叫びを聞け

全一冊寸珍 三百餘頁 著者寫眞入 正價參拾五錢 送料金四錢

東京市京橋區大鋸町十二番地 女子文壇社出版 （振替口座東京一七二九） 全國書店取次販賣

女子文壇　一月增刊

現代婦人

▲新しき女とは何ぞや……巖谷小波

◎町より村より
全國よりの通信にして地方の文明は女子の手に描かる

▲若き女の人々……水野葉舟

▲二階の朝……澤村胡夷

◎顔の描寫
兄さんの顔あり女優の顔あり凄い顔あり千種萬樣の顔

▲一喝
羅羅裏とは何者ぞ！玄の又玄摩訶不思議！

◎自己に對する愛……長曾我部菊

◎濱ちりめん……山田邦枝

◎無言のあひだ……太田喜志

◎深夜の入浴……粒木つね

◎貧しき生存……白木絲子

現代の婦人に與ふ……なのりそ
▲驚くべき新説にして其實は動かすべからざる眞理なり▼

▲明治の小説に現れたる婦人の顏……外島浪之介

▲歌謠と東海道……前田林外

◎帝劇總見記……あやは

◎街になる村……平塚白百合

◎初奉公日記……龜岡みつゑ

◎職業を求めて……松並紫花

◎有髮の尼……水井とし香

◎南國の福音……石井とし子

◎小學教師……波の香

◎お裁縫の師匠……大橋榮子

◎武藏野の戰ひ……笹本多美子

◎短草怨……日かげ草

◎朝の出がけ……櫻木雪江

◎一日の仕事……加藤萩香

口繪　太田三郎筆（彩色石版）

一冊定價　金拾五錢

女子文壇社發行

女子文壇春期増刊

婦人文藝

女子文壇投稿家の顔觸は一新せり

▲近時盛んになり來れる婦人問題を問題として論ずるは既に遅し、婦人問題は既に實行問題に移れり、口の力か、筆の力か乞ふ之を本誌の紙上に見よ。

◉青春の感想◉貴婦人に與ふる公開狀◉日記◉小説◉和歌◉詩◉樹木の生立其他百般の題材を自由自在に書き現したり

時や春風二十四番の花、一時に開いて柳緑り花紅ゐなる春の天地、思想の春は此處に展け、文藝の幸ひは紙面に溢れたり、一度之を味はゞ其快感や何ものも及ぶべからず。

✿春鳥紀行 之れ近く企てんとする本誌々友數名が近郊散策の紀行文にしてお馴染の讀者が喜ぶ讀物也

文學の新機運は若き女の間にも動けり

四月十五日發行 一部定價 拾八錢 送料一錢五厘 女子文壇社出版

東京南傳馬町

大西白牡丹

振替口座東京九二九三番

四月一日より

春季裝身具陳列會

指環帶留時計附屬品
ヴエールスカーフ半ゑり

（イ）



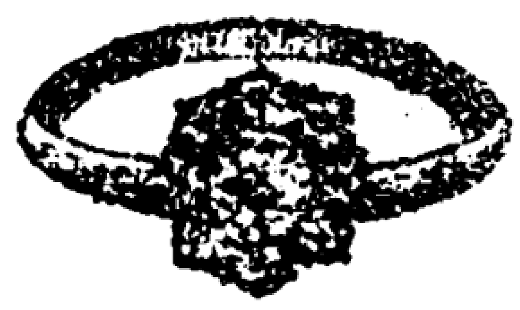
金剛石入
金參百圓

（ロ）



金剛石入
金貳百圓

（ハ）



金剛石九個入
金百四拾圓

（ニ）



金剛石入
金百參拾圓

（ホ）



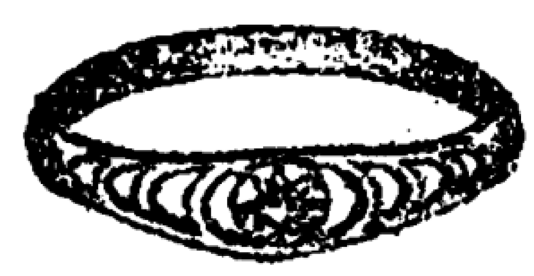
金剛石入
金壹百圓

（ヘ）



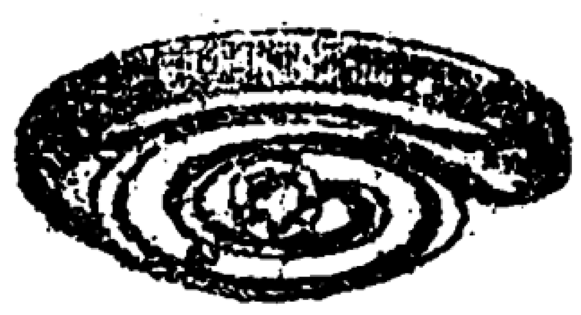
金剛石入
金八拾圓

（ト）



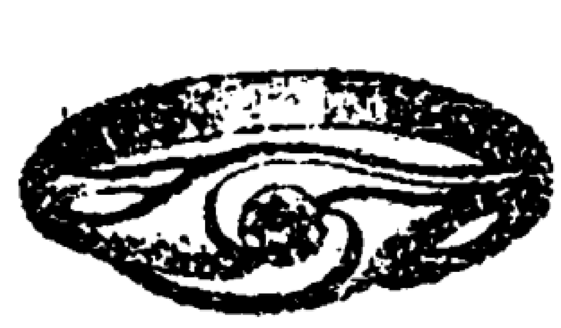
金剛石入
金五拾圓

（チ）



金剛石入
金參拾貳圓

（リ）



金剛石入
金參拾圓

（ヌ）



金剛石入
金貳拾五圓

四月卅日まで

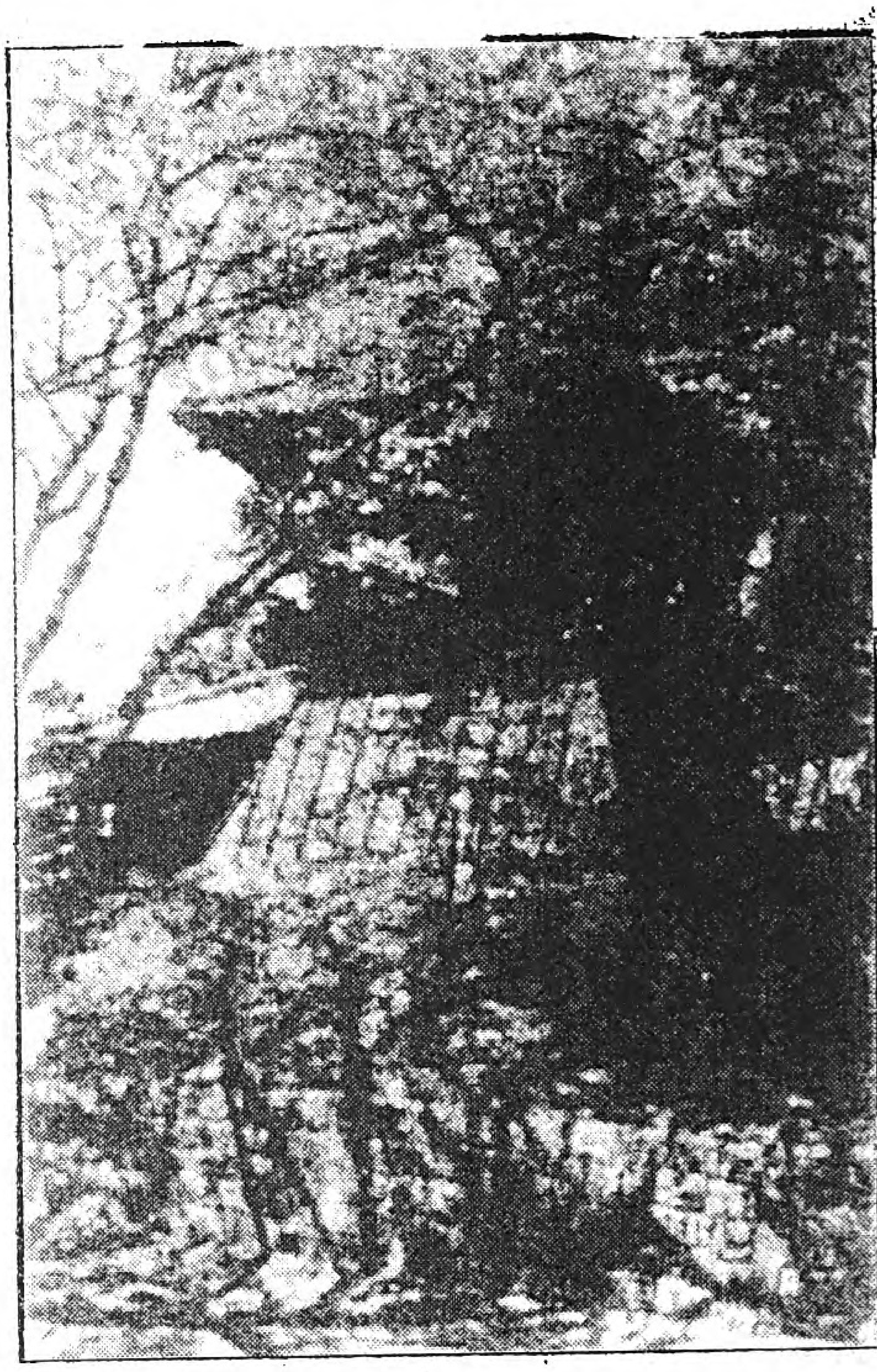
髪のゆひ返り開催

毎日午前九時より
料金一回三十錢

女子文壇

四月號

さいたさくらに
なぜこまつなぐ
こまがいさめば
はながちる





第九年第五號
大正二年四月一日

何んな男が女を解するか（つゞき）

菊池幽芳

女子を了解し得る男子の分類
解すると愛するとは兩立せず

前號の紙上に巴里のマタン新聞が『どんな男が女を解するか』の問を發し、各方面から得た解答を揭げた中から、その十二の例を擧げたが、更にその殘れる例を擧げて記者の結論に及ばう。なほ次の項の例の中に、チユエルリー公園で雀を馴して居る男の事があるからまづ一寸說明をして置くが、同公園には餘程以前から「雀のお爺さん」と呼ばれる有名な爺さんが居る。この爺さんが來るとそこら中に居る雀がみな爺さんの周圍に飛んで來て、手に肩にとまつて餌をねだるのである。殊に多くの雀は名まで持つて居て、その名を呼ばれると飛んで來る。そこで爺さんが來ると、雀ばかりか大勢のものや小供などがその周圍を取り卷いて、そのミラクルを見物するのである。

（十三）女を解する男はチユエルリーで雀を馴して居

る男のやうなものである。雀は通行人をば恐れて、彼爺にはなぜあのやうに懐くだらうか。此秘訣を知るものは、軈て女を解するものである。その秘訣とは、他なし、爺は決して雀を捕へんとせぬからである。彼は單に雀を喜ばせ、満足せしむればよいのだ。決して自分の家に鳥籠の用意をして居ない。その心あつて、始めて女を了解し得るのだ。

（十四）眞に女を解するものは、花園の眞中に腰かけて、立派な花の咲くのを見て喜ぶ園藝家である。彼は美事な花を咲かせて衷心より觀賞するが、決してその花をむざ〳〵摘取つてわが鈕の穴に突挿さうとはしない。

（十五）女を解する男、また女の眞實の友は決して女に戀を要求したり、また貞操を強たりせぬ男である。女はその男をいつも愛するとは云はぬが、併し一生その男の事は忘れずに居る。



四人か二人か

（十六）女を了解するといふ事は察する事である。よく察するには同情が無ければならぬ。同情が根本であるが、同情にはまた愛が必要である。だから愛がなくて女を了解し得ぬ事無論である。それなら愛があれば女を了解し得るかといふと決してさうでない。歸するところはその愛に自我があるか無いかである。その愛が利己的愛でない人ならば、その人には女を了解する資格がある。また實際女を了解し得るであらう。併し若しその愛に幾分でも自個の慾望が加はれば、もうその人には女を



さくら繪日傘　（江木妙子）

解する資格がないと云つてよい。

（十七）長い人情の經驗と、嘗て情の惱みを有した男、そして女が男に與へる滿足は彼女自身が高い價を拂つたものであると知る男、そして女を社會のあらゆる拘束から保護してやる男――こんな男が女を解する。女はその男を荒い浮世の波風の避難所と見る。辛い悲しい、誰にも打明けがたい惱みのある時は、きつとその男の懷に身を投かける。併しこの男は女に對する性慾的要求を絶對に持たぬ男でなければならぬ。こんな男は理論上大抵老人である。

次に皮肉を並べたものも可なりにあつたが左の數例を擧げやう。

（十八）女を了解するには少なくも一ヶ月間女に生れ變らねばならぬ。

（十九）女を解すると云ふそんな奇怪な事は世の中に決してない。それは火の中で水を求めるやうなものだ。

（二十）女を解する男は女の解せぬ男である。

（二十一）若し女をほんとに了解した男があるなら、その男はきつと自殺してるだらう。

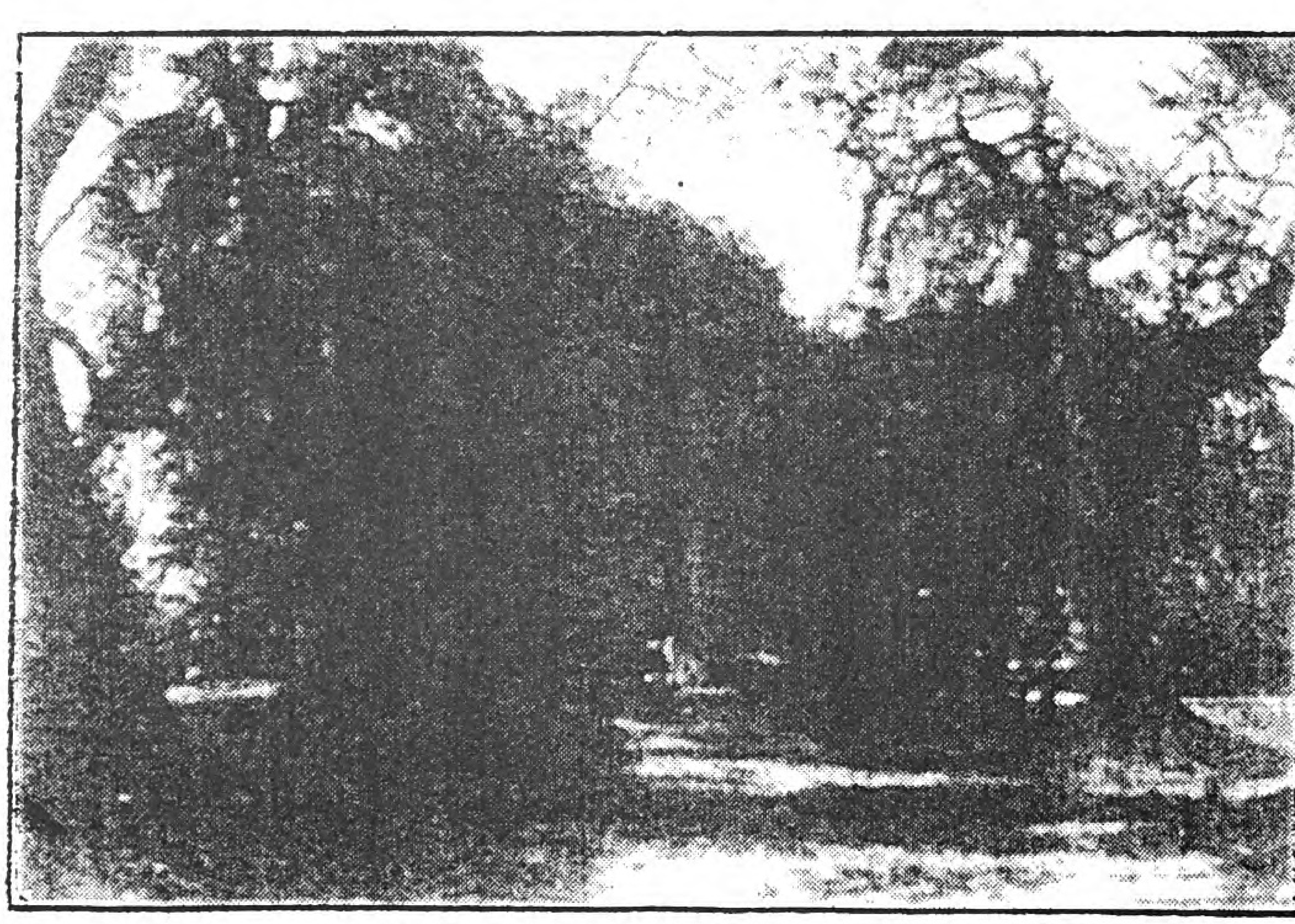
（二十二）女を解する男は、女のためには如何なる苦痛も忍ぶ男でなければならぬ。だから女を解するといふ仕事は、男自身に取つては少しも面白い事ではない。

また紙上に擧げられた解答の中に醫者を擧げたものは可なりにあつたが、文學者や心理學者は多く不人望である。その説によると心理學者は科學として硏究す

る事は上手だが、血の通つてる生きた女は心理學者には分らない。つまりその研究は机上の空論に過ぎぬといふのだ。また文學者も分つた顔はするがその割には分らない。或點までは文學者の空想と一致するけれど、女の心理は時に文學者の切入る事をすら許さぬ。だから將來女のみの文藝の成立つ餘裕がある文學者は、女を解し得ぬ場合よく逃道を拵へる。乃ち多くの文學者の書いたものに、女は謎だと云つて居る。これが女を解し得ぬ證據だと。

また女學校の教師のやうな、形式的な教育に囚はれて居るものにも女は解らない。戀は盲目といふ事はこの場合に最も適する。お互に了解したものが戀に落ち、情交を結ぶといふ事は、決してほんとに了解した結果ではない。

女を解する男として擧げられたもの丶中に可なり多かつたのは僧侶である。その中でも懺悔僧を擧げたものが多いが、それは日本の讀者には註釋を加へる必要がある　佛蘭西で專ら行はれるカトリツク教の寺院内には小さな懺悔室があつて、女の信者はそこへ來て懺悔する事を餘儀なくされる。その懺悔は必ずしも罪惡を犯したから懺悔するのではない。重に閨房の秘事、(夫婦間の事たると否とを問ず、)等を一切こゝでは打明る事になつて居る。また僧侶はさういふ事を重に聞いて忠告を與へる。少女は十一二歳になるとコムミユニオン



仙臺市躑躅ケ丘の櫻花

と云つて白い衣服を着て寺院で或式を受ける。それからは毎年懺悔をするので、女の秘事は一切懺悔僧が知るのであるから、或點迄女を解するとも云へるのである。

いよ／＼マダン記者の結論に移らう。

結論

女の愛する男は決して女を了解せず
解さるゝと愛さるゝとは別問題なり

多數の解答を讀んで最も明らかに得られたところの概念は、女を解する男は、女を愛する男でも、また女に愛さるゝ男でもないといふ事である。

そして若しわれ／＼が『こゝに女を解せる男あり』と呼ばる時に、その男は共通の必要條件としては、必ずその男が毫も肉の上の慾求を女に對して持たぬといふ事を證明せねばならぬ。

さてさういふ條件に適合する男はどんな人間であらうか。多くの答案がそれに解答を與へて居る。卽ち（その一）長く生き、戀を捨てた男、（その二）如何なる人生の劇においても決して主要の俳優ではないが、女が女同志に對するやうな何もかも打開ける事の出來る、そして殆ど男としては取扱かつて居らぬ變性男子（その三）清淨克己の生活をなし居る僧侶（その四）女を科學的研究の目的物として見る醫師（その五）女を同等と見、その意味に於いて生活の新組織を夢想する近代的男子。とかういふものが答案の重なる分類である。

更に以上の答案を打つて、一つの形式を作り上げると、卽ちかうである――女を解する男は、女に對して慾望のない男でなければならぬ。從つて女は此男に向つて、時には親愛を表し、時には路傍の人を以て見る。けれども決して戀を仕懸けぬ。此男は自分の生活と思想とが女の生活と思想とどこまでも併行して居るものと見る。そこで兩性の心理に於ても、幾何學に於て、二つの併行したる線は、どこまで行つても相合する事が出來ぬ通り、兩者は絕對に戀の問題から遠ざかるの

だ。
彼は戀の悲喜劇に出る第三者の無言役である。女はこの男には自分の戀人の事を何もかも打明ける。そして戀人に捨てられゝばまたその男に訴へる。併し自分の戀が滿足されゝばこの男を捨てゝ戀人に行く。

そこで若しわれ〳〵の時代なり、またわれ等の祖先の時代なりの女が、自分を解してくれる男よりも、自分を愛して呉れる男を擇んだか、また擇ぶであらうかを詮索する事は、取りも直さず、女は男に解されて、その代り男に構つて貰へぬ方がいゝか、男に解されないか、その代り愛される方がいゝか、どちらかと問ふのと同じ事になる。

若し女が以上のデリケートな問に對して沈默を守るならば、自然と詩と藝術と、われ等の追憶、われ等の心の聲が、彼等に代つて答へて居るのである。

＊　＊　＊　＊

以上の結論は頗る興味に富んで居ると思はるゝが、これを日本人の場合に應用して見たらばどうであらうか。全體日本人は女を或型に鑄込で仕舞はなければ承知は出來ないのである。或る因習的の型があつて、その型にはまらない女は魔道に落ちたものゝやうに云ふ型にはまつた女を作るといふ事の可否はこゝで論ずべき問題ではない。併し女を型に當てはめやうとするものは女を解するといふ事は出來さうに思はれぬ。女を解するには、すべての社會的拘束から縛られぬ自由な心を持ち、道德の因果から離れて、赤裸々の自然の上に立つて女を見なければならぬ。さういふ見方をする人で、始めて眞に女を解する事が出來ると思ふ。この點から云へば敎育家などは女を解する上には常に障壁を設けて居るのである。女が充分に解せられたなら、決してフエミニストの運動も起らぬ譯である。併しマタン記者の結論の通りとするも女を解する男と云ふものは、その實社會の劣敗者もしくは人生の傍觀者、若しくは變性男子である。果してこんな男でなければ女を解し得ぬであらうか。



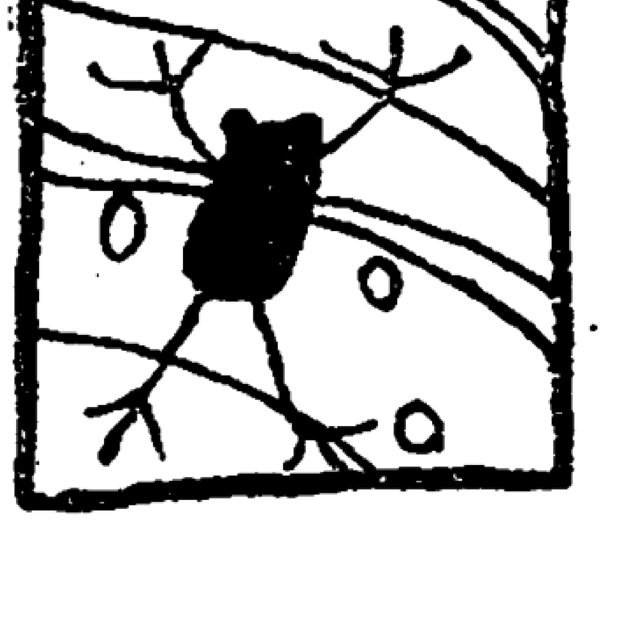
歸朝して日本の婦人に望む

日本女子大學校長　成瀬仁藏

西洋は誰も知る通り、經濟の考がなか〳〵進んで居て、小兒に至るまで、經濟の頭が出來て居る。數の觀念が小兒の頭にも解る位であるから、すべての生活が盡く經濟的に出來て居るのを見ると羨ましい程である。一般のヨーロッパの風は、經濟的の一語で盡す事が出來る位で、それに比較すると日本は少數の人の外は、ヨーロッパの人に劣つて居る。殊に婦人　至つては、その考が一層乏しいと痛切に感じたのである。此の經濟思想の缺乏が、國の困難となり、家庭の苦しい原因となり、婦人の弱點になる事の多いのは疑ひのない事である。

世界の今日の文明は、物質の文明、經濟の文明、機械の文明である。西洋は極端にまでさう云ふ文明に傾いて居る時代である。從つて經濟の考が萬事に大切な部分を占めて居る。其のためにあまりに生活が無味乾燥になつて居ると云ふ事がある位で、經濟思想は充分に發達して居る。

それに比べると日本人の生活は、まだ餘程精神的の方が多いやうである。想像とか、感情とか云ふ方が盛であつて、經濟的方面が遲れて居ると云ふ事が出來る。



△一日も經濟を考へずには暮せない

それから今一つは今日の歐米の制度と云ふものは、益々個人的に傾き、生存競爭が愈々烈しくなつてゆくので、亞米利加の如きは富が一方に偏して、種々の弊害を生ずるやうになつてゐる。富が社會の一方に偏し

て、ツラストと云ふ團體になつて、到底資本の乏しいものは、自分の力で競爭して、自分の運命を發展させる事はむづかしくなつて來た。其の結果一方には生活難の聲が高くなり、暮しを立てる事が益々六かしくなり一方には益々贅澤をする者も出來るといふ狀態になつて來たのである。

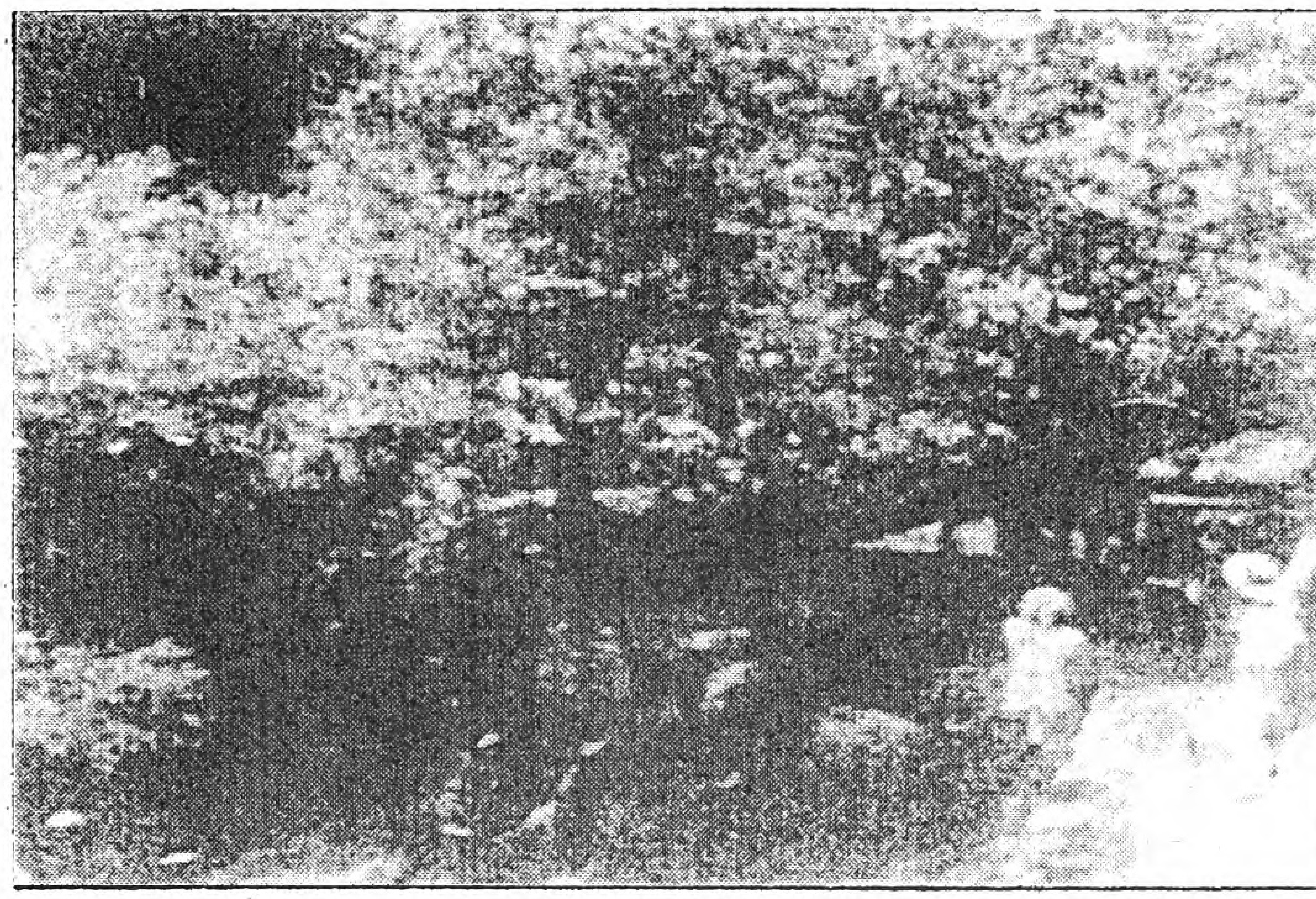
男子でも中々家を立てると云ふ事はむづかしいから、獨身生活をやる人がふえる。從つて女子にも獨身者がふえ、止むを得ず自活しなければならない。自活をするには自分に實力がなければ、到底立つ事が出來ないのであるが、社會がその弱い者を助けるかと云ふと、決してさうではない。弱いものは益々蹈み倒されると云ふ勢で生存の必要からしても、經濟と云ふ事を大事にせざるを得ないのである。



鳥羽總治氏の家庭

ヨーロッパの人々は男も女も皆職業に對する考を充分にもつて居る。それは自分を守る上から止むを得ないばかりでなく、たとへ家を持つても、共稼ぎをしなければならない。或はいついかなる場合にどう云ふ不幸に陷るか知れない。それで男でも女でも、自分で自分の事は始末をする覺悟がなければならないので、經濟を離れて一日も生きて居られぬと云ふ事になつて居る。自ら金を崇拜するやうになつて、何事も金次第と云ふ樣な、弊となる程に極端になつて來たのである。

△却つて自由を失へる物質的文明



長崎はたる茶屋のさくら

弊害をあげるとこのやうな事になるが、經濟を考へて身體の方の都合をはかるのは結構である。いくら精神があつても、身體がもとになるのであるから經濟をまたなければその精神を發揮する事の出來ないのは云ふまでもないことで、家庭に取つても、個人に取つても、經濟は大事である。只極端になれば弊害が伴ふから、その邊の注意はなければならないので、ヨーロッパでは昨今その弊害のために非常に苦しんで居る。ちやうど物質的文明がゆきつまりとなつて、ほんたうの人間の價を傷つけない、もとの生活にかへらうとしてゐるのである。

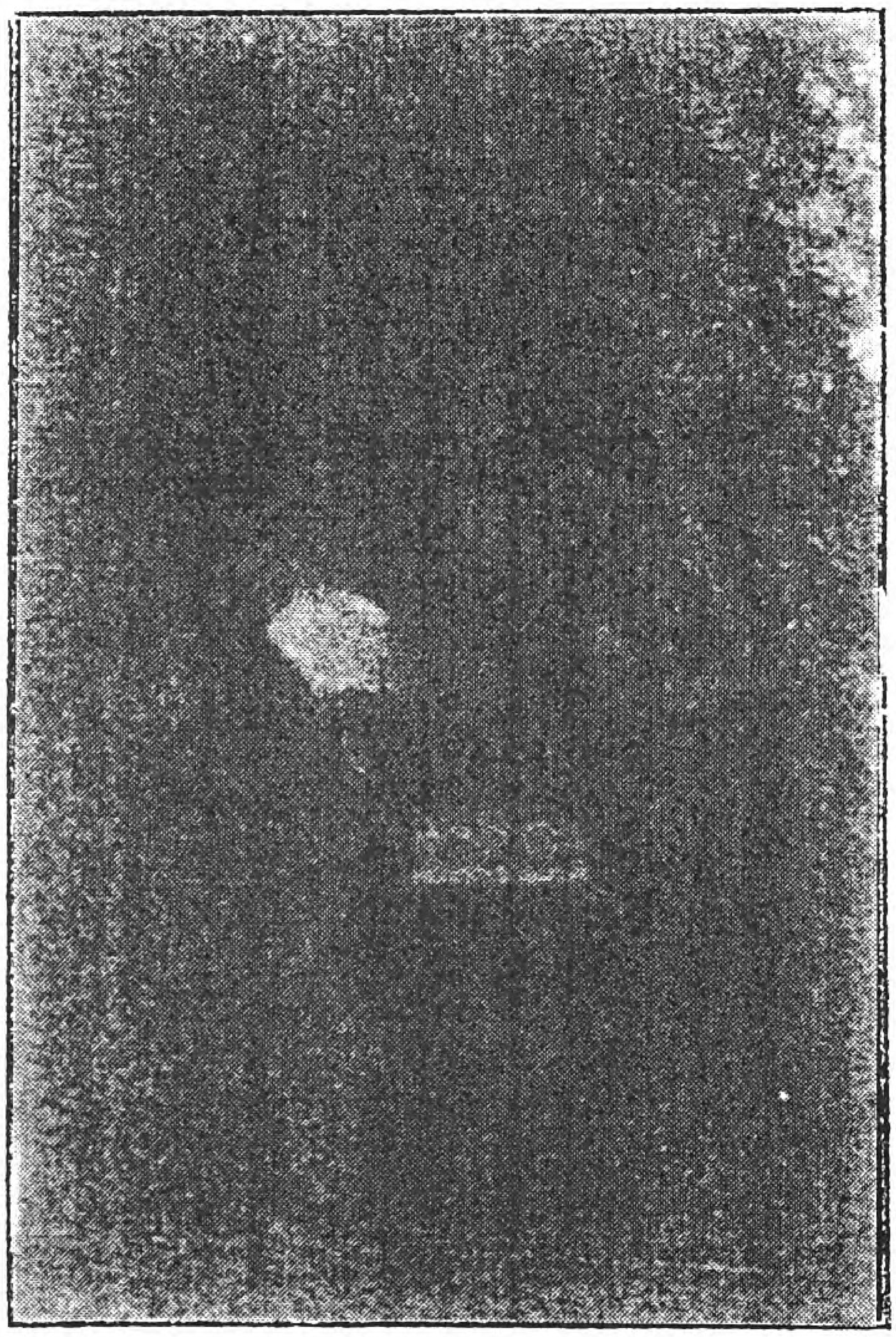
ヨーロッパでは、貴族と富とが結びついて居て、容易に富がいゝ加減に配當が出來ないので、多くの人は生活に苦しむのである。此れ等の苦しんで居る人々は、滿足な生活が出來ないため、酒を飲んだり、煙草を飲んだり、風俗を亂す位にして暮して居る。然しそれでも到底滿足する事が出來ない有樣である。

西洋の文明は極端にゆきすぎ、自由を求めようとして、却つて自由を失つて居る觀がある。自由を得るためにツラストをこしらへたのであるが、こしらへて見ると、本當の自由は得られなかつた。そこで人間の本當の自由はどうしても、内心の自由に求めなければならないので西洋では、此頃内心に自由を求める聲が高くなつて來た。

△完全なる生活を求むる氣運

然し内心の自由を求めるのは、物質の慾を斷たねばならないかと云ふに、それはあまりに極端である。是非兩方が完全しなければならないので、西洋ではその完全したところに戻らうとして居るのである。

日本は西洋に比較すると、物質的文明の方面はおくれて居る。隨つて日本の人の經濟思想はどうも堅實でなく數の觀念を明確に持つて居る人は少いやうである。國民一般に昔の、武士は食はねど高楊枝と云ふ調子で、經濟にはすこぶる實着でないやうである。然し經濟に淡白であるからと云つて、金について慾がないかと云ふとさうではない。隨分慾はあり、所謂吝嗇家の性質の人がある。唯本當に實直なる經濟と云ふ事は日本の人には少ないので殊に婦人に多く缺けて居るやうである。どうしても將來の婦人は、男子とゝもに矢張世間の浪をかぶつてゆかねばならないから、經濟の力がないと自分をうまく支へる事が出來ない。其の上一家を持つても、婦人が經濟に下手であると、日本はいつまでも貧乏でなければならない、世界におくれを取らないやうにするには、共稼ぎでもする程の勇氣がなくてはならない、個人のためにも國家のためにも、是非經濟的の品性が出來、經濟的の頭腦が出來、恒の産をこしらへるやうにしたいものである。特に若い婦人に此事を心掛てもらひたい。



室内のさくら

一年間につゞく

名流婦人日記

二月一日より十日まで

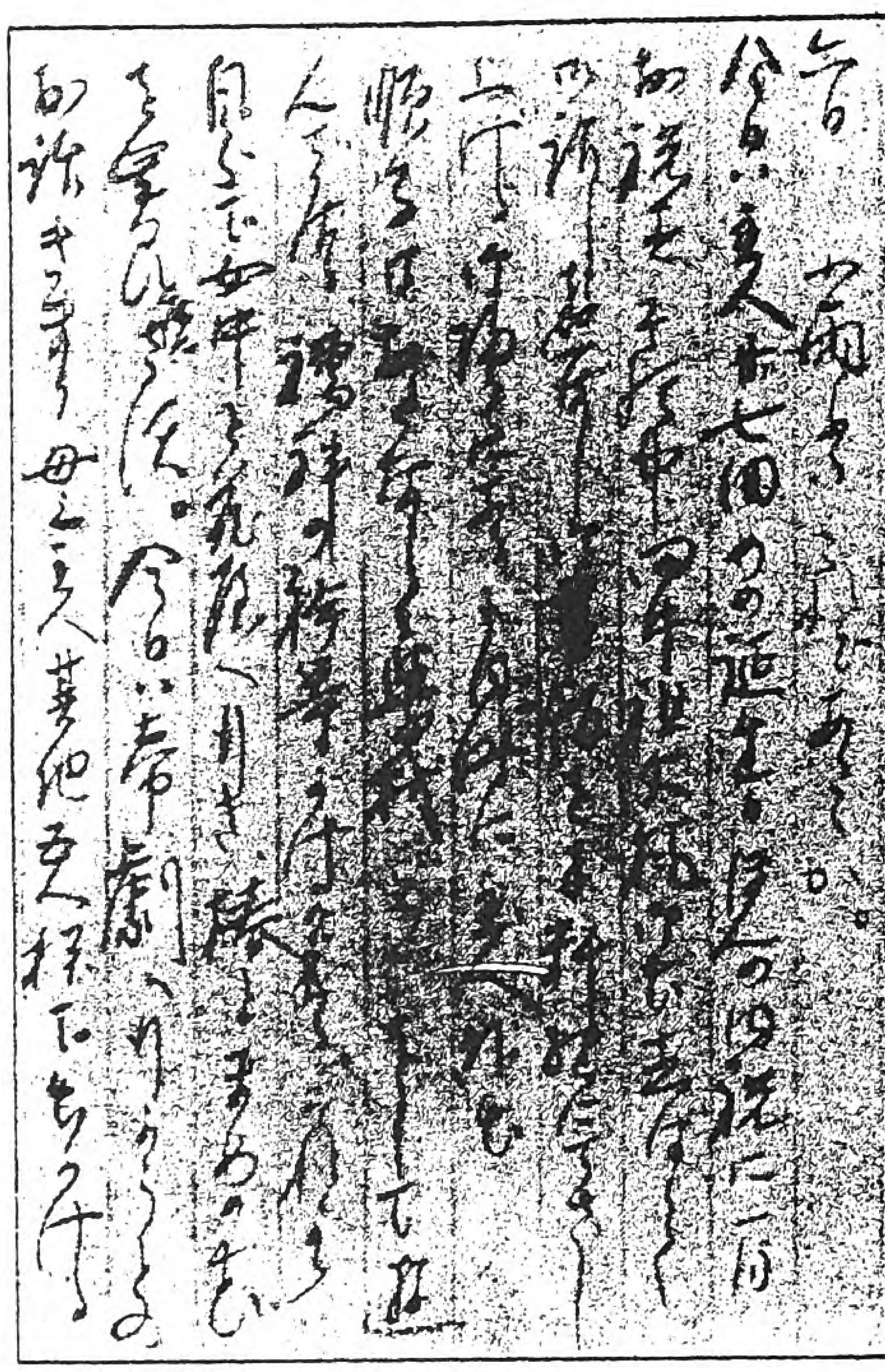
岩崎重次郎氏夫人　岩崎延子

二月一日。晴天なれど風強し。七時に起きてすぐ入浴す、順子が朝からだゝをこねて居る。何だとおもつて聞いたら芝居のお姫様のやうな前ざしがほしいといつてる、一同大わらひ、暮の病氣から無理ばかりいつて困らせる。木下出勤、主人から申しつかつた用事をたのむ、母上は順子、婆やをお連れになり神田へ御出かけ、自分は片づけものなどしお晝の支度をいひつける。程なく御歸り。午後からは元三越に居た番頭で染物屋になつた者が來る。そめかへしものなどたのむ。時間はだいぶおそいけれどもあまり御無沙汰故支度して阪本様へ伺ふ、今年になつて初めてだしお産後矢張はじめだけれども割におやせにならない、相變らずかざりけのない方で嬉しい。赤さんも御丈夫さうでお仕合、御實家の御母上様にも御めにかゝる、四方山のお話で時の移るをわすれ、しひておとめ下すつたけれどお互に昔の身とはちがひおいとました。歸る道すがらも昔の事など思ひ出され、よくお庭のすもゝをたべたり、大山木の花を折つたりしてあばれた事など浮び、お互に今の變りやう、何とはなしにかなしくなる。玄關入れば順子が飛んで出る。今迄の考へ事も何處へやら。寒いのでまた入浴した、あまり入るとあぶらがなくなるとひやかされたけれど。食事後は紅茶など入れお話した、

昨夜おそかつたから今夜は早く九時半におひけにした寝るまで讀書なす。

二月二日。うら丶かに晴れて暖か。今日は麻布の兩親はじめ弟妹總出で御出との電話、母上、順子は大急ぎにて神田へ。一人になつたら銚子から客が二人、麻布の妹二人と建築家の高木様見える。かけ持ちで忙しい事。その中お晝の支度にはなるし、おまけに飛行船が飛んだので出て見る、バタ〳〵して居る中に母上お歸り、漸くヤレ〳〵と安心した。晝飯を出す、順子は妹が來たので大悦び。午後から兩親、弟と見え家中大賑か、品々お土産頂く。晩には父上が一所に御飯を食べに行かうとの仰せ、十一人のどうせいでお供する。まるで園遊會のやうだと大わらひ勝手なお話してさわぐ、銀座でおわかれしてぶら〳〵歩いて歸る。銀座で秋山様におめにかゝる。

二月三日。今日も暖かで體が漸くのんびりしたやう。定めし銚子の梅も見頃だらうと思ふと早く歸りたいやう。すめば都とよくいつたもの、銚子へ行つてから何だか田舎の方が落付いてい丶やうになつた。田舎の方が趣味があつてほんとのたのしみが出來ると思ふ。都では帝劇だとか三越だとか、それは行く處は澤山あるけれども、それはホンの上ペラな樂しみだとおもふ、でも兩國に着いて橋を渡る時などは、あまり賑かさにうれしく、自分ながら田舎者になつたとほ丶ゑまれる、こんな事を考へながら床の花を取りかへる、あまりよいお天氣故お座敷のガラスを



岩崎夫人筆蹟

ふいた、順子は花やとおとなしく縁側でまゝ事をして居る、時々顔を出しておこられる。夕方國元の宮井が來てしばらく話しする、主人は會へ出席、歸宅まで順子も寢たので讀書しながら待つて居る。

二月四日。今日も上天氣で嬉しい朝、謠の先生御出、主人は早く外出故休み、母上と二人習ふ、近頃は若い者はなまけて居るのでなほく下手になるばかり、松風だけれどもちつとも思ふやうに謠へない。母上順子は今日も神田へ。篠田家内來り今日銚子へ歸るとの事、留守宅の事をよくたのみ、別莊へ牛肉さし上る。午後から麻布母上のお供で三越へ行く、相變らず賑かな事、別だん自分の買物もなく小切れ少し求めて歸り順子のエプロンをさがして到頭關口迄行く。それ故おそくなつて歸り、新富座の前を通つたらきれいな事、丁度大阪の道頓堀を見るやう。やがて主人も歸宅、食事後おしやべりして十一時頃におひけにする。

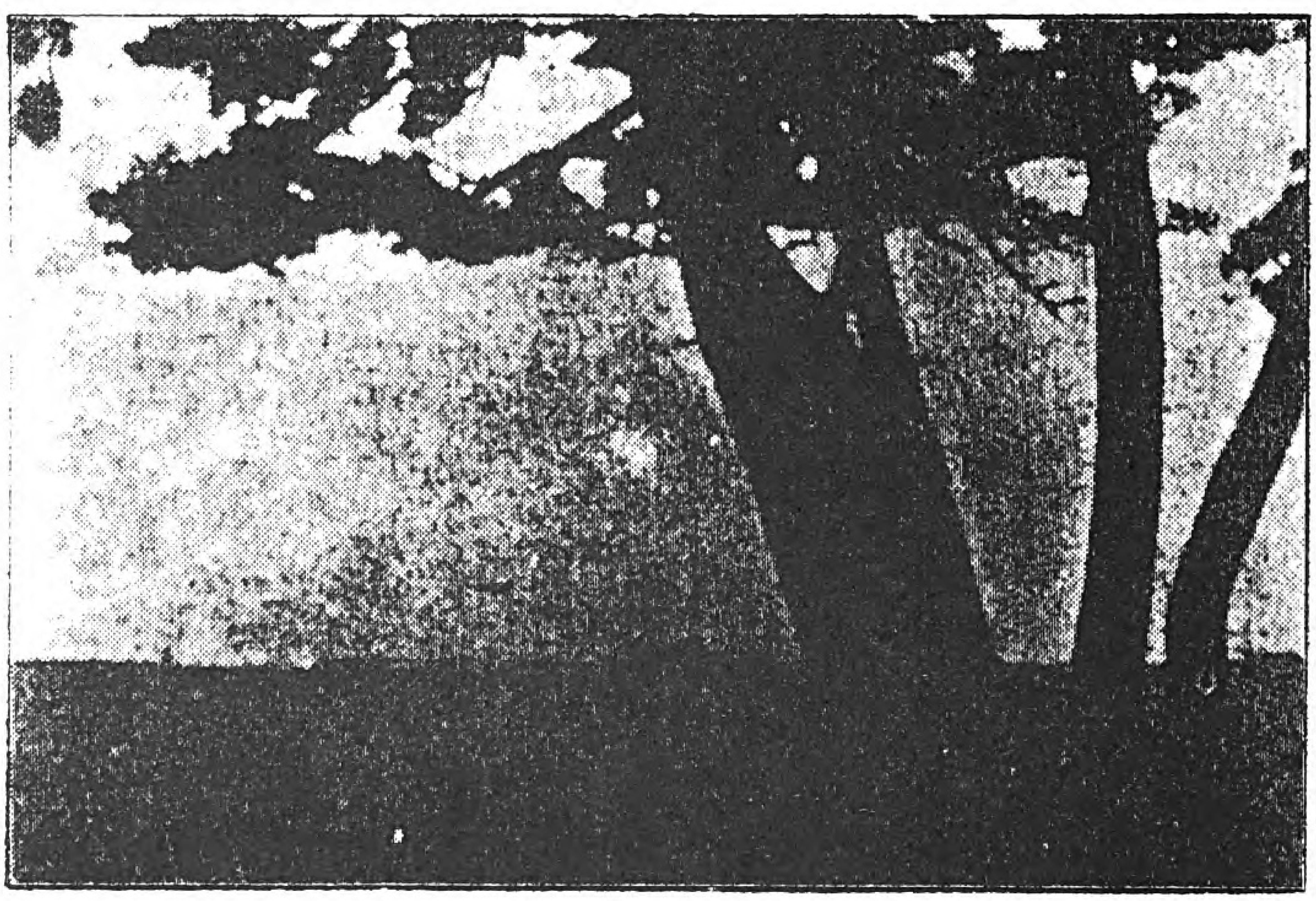
二月五日。はじめの程くもりなりしが後晴れる、今日は朝早くから大工が來て壁をぬつてる、昨日買つた小

切れを出してふだんの襦袢をたつ、女中にたのみ床の花を猫柳と〻りかへる。午後から麻布の井上邸へ御年始かたぐ御無沙汰に伺ふ、從妹も在宅久々にていろいろお話し、御父上樣にも御めにか〻る。夕方おいとまする。庭の隅にある小さな池の水を皆出してしまつた、何でも水を入れては健康に惡いとの事。

二月六日。小雨ふる、されどあた〻か。今日は主人二十七回目の誕生日、ほんの內祝に一同お祝す、その中田中祖父樣御出、しばらく御話し遊ばし、御晝飯を手料理にてさし上る、御歸りになると同時に主人外出。順子はおとなしく學校ごつこをして遊んで居る、襦袢の衿等かけかへる。それから自分で女中と花屋へ行き椿と豆の花を買ひ床にさす。今日は帝劇へ行かうとのお話きまり、母上主人其他五人程で出かける、いつも大入で結構、學校の方もだいぶお見えになる、はじめの狂言は「あきらめ」とかいつてあまり面白くない、次はだいぶ泣かされ、後のはきれい、十時半打出し、歸宅後今日のおはなし〻て果物などたべすぐ寐む。

二月七日。雨も名殘なくはれ好天氣。銚子より手紙來る、舊正月で賑との事。一去年から學校の會の幹事をお受けして田舍にばかり居たのでする間なくあまり皆樣に申譯なければ、岩倉樣へ電話にて御相談する、そしてあした學校へ行く事にきめた、母上順子は神田へ。後で此間お土産に貰つた妹の羽織を裁つてやる、夕方矢田樣御出、主人不在故御要件承つて置く、夜は內輪の御客で御飯も大賑か。牧場から電話で牛の牡が生れたとのしらせ、また兵隊さんかと一同がつかり。

二月八日。すこし寒さがもどつたやう。入浴もそこ／＼に學校へ行き岩倉樣と御相談し、お菓子とお煎餅を受持つ事にし十二日と定める、見れば學校が燒



白　砂　青　松

けてからやがて一週年、洋館の燒跡がところ／＼に殘つてまるで外國の油繪でも見るやうあはれを催しぬ。雨中體操場の前を通れば中では先生が昔に變らぬ御聲で號令をかけて御出になる、いつも元氣のおよろしい事。何だか自分達が急に年をとつたやう岩倉樣とほゝゑんだ正午歸宅、母上、順子は神田より青山へおまはり。會の御案內を書く、主人腸胃がわるしとてパンとかるき洋食にする。

二月九日。よく晴れたれど風出ぬ日曜ゆゑ妹と在宅、朝半日は茶の間でお話して過す午後から母上、鶴子、順子、女中と御出かけ。自分はお留守居する。午後から芝の伯母樣御出遊ばす、順子のよろこびさうなお土産を頂く、ゆる／＼御話し遊ばして夕方御

歸り。後で髪を洗ふ、六疊で調べものして居ると女中達が仕事しながらしやべつて居るのがよく聞える、一人がヒステリーとウヰスキーとをまちがへて大さわぎ一人で吹き出してしまつた。その中皆樣御歸りお茶を入れて居たら田中の祖父樣御出いろ〳〵御話し伺ひ、また手料理で御夕飯さし上げたらおほめにあづかつた今日は順子に女中をつけてやつたら大變おとなしかつたとの事。いつでも婆やだとあまえてだゝをこねるから。‥‥御祖父樣御歸りの後、少し腹痛がしたので一先へ御免蒙る。

二月十日。今日も上天氣。主人も早く外出、母上、順子は神田へ。久々にてお琴を出したら糸が切れて居たのでまたやめる、どうしてもなまけものだとおもふ。その中女中が大さう立派の長芋を八百屋が持つて參りましたとの事。いつて見たらめづらしい故料理の材料にもとゝつて置く、母上御歸りになつて日比谷が大變の人との御話、その中號外が出るし何だか騷々しい、我々にはとてもわからないけれどもまた內閣のでたくとやら。陛下も御心配の御事と御噂申上げる。主人は四谷の方で會があるので五時過に出かける、十一時頃歸宅しての話では大變なさわぎ、日外の燒打のやう日比谷の處で政友會萬歲といつたら漸く通してくれたとの事、すぐそばの交番も燒かれ、まるでときの聲あげるやうによく聞える、寐たのは十二時頃なりき。

十一日より二十日まで

醫學士難波輝秀氏夫人　難波里久子

二月十一日。諒闇中の紀元節を迎へ、君が代を默唱す。朝げの最中「お早う御座います‥‥」と勝手口より訪ふはいつもの八百屋なり、一二品を注文す、千偏一律、毎日の一事件ぞかし。

午後、元子（生後百二日）の沐浴中、藤井母君の來訪子供の成長せるに驚き給ふ。

夜、事なし。

二月十二日。曇。午前は洗濯にて時の移るを知らずして午餐となる

午後例により元子の沐浴中、生憎とまた〳〵呼鈴の客を迎ふれば細川様御子様御一所にて御來訪、御話は子供のことばかりにて夕方御歸館めさる、これと入れかはりに主人歸宅。

夕食後、元子を中心に雑談にふける。

二月十三日。晴天。夜半より元子不機嫌にて明け方まで眠らず、子を持て始めて知るはげに親のなさけぞかし。

午前、小池様より御電話給はる。



難波夫人の筆蹟

午後、事なし。

二月十四日。晴天。午前、大掃除

小池様より御電話給はる。

午後、松本様より雑誌拜借、元子のいつになく安眠しけるを幸ひあちこち漁る。

花屋、枝ぶりよき梅一枝、押賣して行く。

夜、下女相手におしめの始末裁縫などにて十一時ふしどに入る。

二月十五日。晴天。松本氏の生れて百日ばかりなるお子様、昨夜來いたつきとのこと、よそ事とも思はれず、同情の涙さしぐまる。

午後、岡部様、小池様御來訪、久方振の事とて面白く時を移す。

夜、事なし。

二月十六日。晴天。夜は小供に明け日も亦小供に暮る。

西尾樣、佐々木樣來訪。西尾樣は近頃めつきり「マーダム」式にならせ給ふ。

二月十七日。晴天。午後、寺田樣より日記附郵致する樣との御電話給はりしも、終日子供の事におはれ、拙き筆とる暇もなく、泣く切に御斷致せしもおぞかなる御命令、致方もなく御受けせしものゝ單調なる家庭の事とて認む可き出來事更になきぞうれしき。

二月十八日。曇。親子もろとも風邪の氣味にて事なく日暮る。

夕方北澤樣御來訪ありしも、生憎主人不在、玄關より直に歸り給ふ、夜分五島樣より御電話給はる。

二月十九日　晴天。事なし、子供の病稍をとろうぞうれしき。

二月二十日。晴天風強し。

神田大火の報に接し取るものも取敢ず知己親戚へ見舞の使を出す、鷲堂先生の御宅は幸ひにして御無事なりしも、小笠原先生のお館は類燒の厄に罹らせ給ひしと聞き同情の淚に日暮る。

夕方主人歸宅、家具を火災保險に附すとの話にて大笑す。

二十一日より二十八日まで

朝吹常吉氏夫人　朝吹磯子

一月晦日といふに、寺田樣きたられ、是非とも御目に懸りたしとの仰せなれど、妾如きものゝ、御目にかゝりしとて、話材もなく晦日にてはあり、忙しく致し居ればと、御斷り致せども、再三の仰せにて、唯お目に懸ればよろしとの事。殊には、四五年此の方、たび〳〵の御來訪に、御職務とはいへ、あまりに御氣の毒と、御目もじ致せしに日記認めくれとの仰せ、單純に其日を送る妾の日記など、かゝげられしとて興もなければと御斷り致せども、聞入れ給はず、斯る事なりせば、御目には懸らざりしにと、悔みてもせんかたなく。後の思ひ出、笑ひぐさにもと、たゞありのまゝを綴りて。

二月二十一日。曇。金曜日。

正月半より風邪に冒されし子供の爲にとて、紀元

節の日、家族打連れ、憲政擁護の聲やかましく、ソレ燒打だ、新聞社攻撃と、さわがしき都をあとに、國府津なる別莊へ來りてより、はや十日餘り、別莊は國府津町を去る十二三町西北の山の麓なれば、號外の聲も新聞も、赤暦日もなく、のどやかに、たゞ其日其日を子供の守に餘念なく今日も朝食後八月生れの次男を抱き、滿三才の長男を連れ、門前の田圃千坪餘り近頃求めしを、今日より、みかん、其他の手入にとて職人の來り居れば、運動ながら見まはる中、次男のスヤ〳〵と寢入りたれば、家にやすませ東京大火の報を聞しまゝ、新聞取よせ一讀、火災は神田との事、神田には深きみ敎へを受けし師の君も居ませばと、東京へ電話にて御見舞申すやう留守居の者へ



朝吹磯子

賴みしものゝ、御類燒はまぬかれ給ひしや、さてはまた御罹災なされしにや、と案じつゝ午食もたゞ火事の話のみに‥‥

食後は二三年前に縫ひかけし、テーブル掛の斯る時にてそと、持ち來りしまま、遊動圓木に腰打かけて、長男のブランコの相手爲しつゝ、やがて、小雨の降り出せしに、名殘をしげなる長男をせき立てつゝ家に歸り、二人の子供に湯あみさせ夕食。長男の英一もう晩になつたから蓄音器とて、鐵道唱歌樂隊などゝ四十餘りの數多き譜を、如何にして見分るにや、一々此次は箱根八里、今度は勸進帳、今度はカムカロリンなどゝ、一人にて針を取かへねじをまはし遊び居りしも、七時過ぎ、マヽさんねんね、と

いふに、寢巻着かへさせやれば、一人にてはや前後も知らず、如何なる夢や結びたるらん、鐵道唱歌〳〵とかすかなる笑さへ浮べて。

當地へ着せし翌日なりし、蓄音器のめづらしさに、朝より打ならして喜び居りしに、夫君のとがめられて百姓は皆朝未だ來より、畑の仕事に忙しく働き居るを朝から蓄音器などしては、第一運動にもならず、これよりは夜分にのみこそよろしけれど。されば其後は聞分けて夜になるを待ちかねつゝ…。

二月二十二日。晴後雨。土曜日。

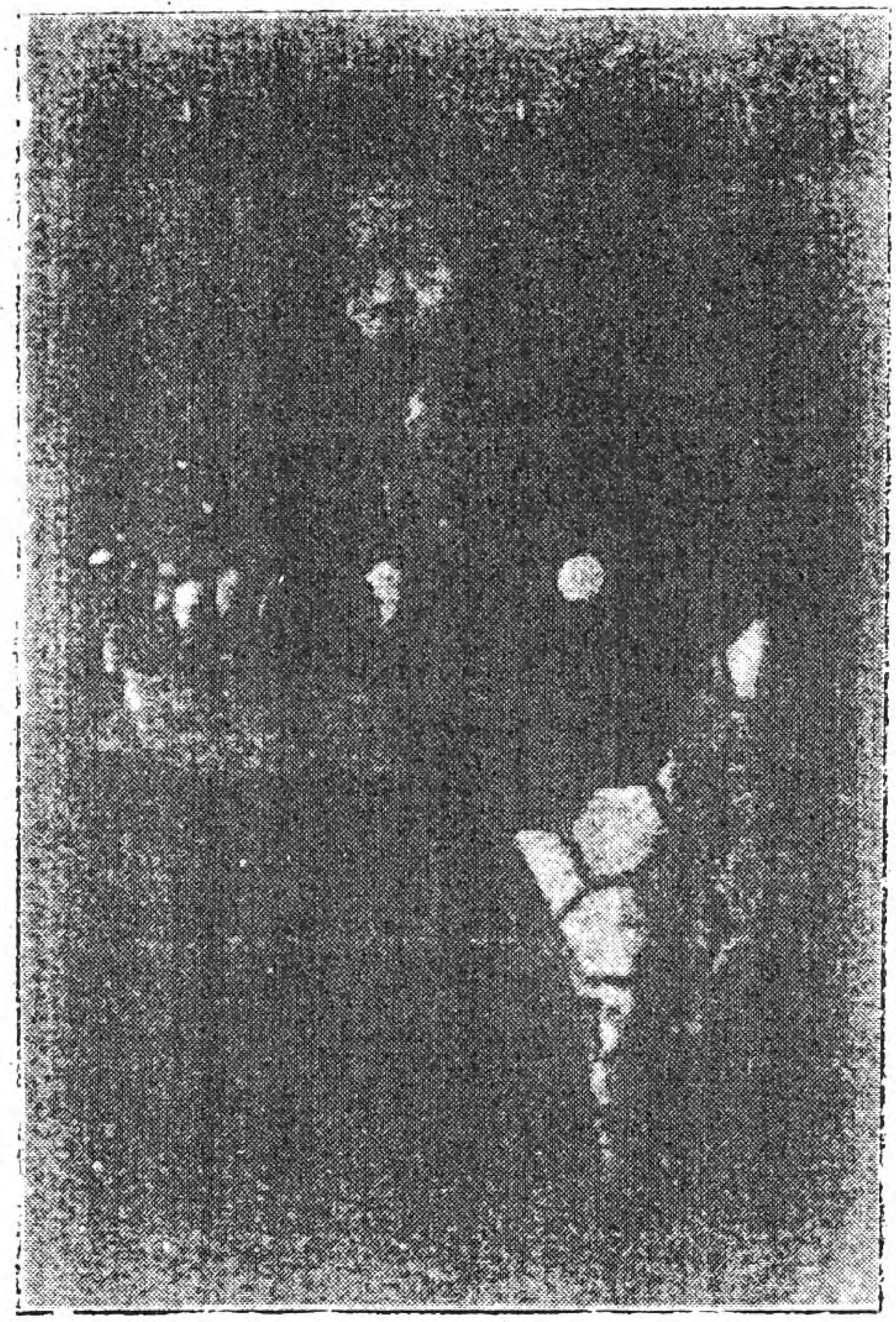
夜來の雨も止みて、低くたれこめし雲も、薄らぎ行き箱根山伊豆の山々迄、殘りなく晴れ渡り、遙かに眞白き富士の嶺、さては遠く相模灘さへ眺めらるゝうつくしさゑもいはれず、今更ながらまはらぬ筆の、かたたれて、口惜しきこそ是非もなき。

乳母の洗濯し居る間、赤坊を抱きつゝ長男連れて、爺が飼ひ居るカナリヤの聲を聞きつゝ、變り行雲、さては職人の仕事など打眺めつゝ、のどやかなる景色に

見とれ、乳母の迎へも知らで…。勝手口の山を六間ばかり奥に堀り行きて、其處より水を引きあれば、田舍住居の不自由なるべき水も、東京の水道と變りなく家中に使はれて、庭と裏にはかけひより絶えず流れ出で洗濯に便利なり。まして、あたゝかき水なれば、妾もよだれかけ、ハンケチなど洗ひて髪をも洗ひすゝぎし心地よさ、げに田舍ならでは味はれぬ事なるべし。午食後二時入湯、二人の子供入れては、さなきだにのぼせ性の顔のみほてりて、いつも自身はソコ〳〵にすませ、運動ながら宿へ夕食の魚買ひに行かんと乳母と仕度し居る折しも、地主なる人のお神さん來り子供へとて、みかん、すしなど手土産に火ともす頃迄話されしまゝ宿へも行かれず、畑の菜、玉子など有合せし物にて夕食。食後は英一、一日待ちわぶる蓄音器初まり、一人にて譜の見分けらるゝをほこり顔して、マヽさん今度は清元ですよ、マヽさん見て頂戴といへど、妾の次男の襦袢縫ふに忙しく、相手にならぬとて機嫌あしく、昨日の一人おとなしく寢ねしに引かへ、今日は

乳母の脊におばれて…妾も十時うつを聞きて臥床。
あまりの暖かさに二時頃寒暖計を見しに六十四度なりき。

二月二十三日。晴。日曜日。寒暖計六十四度。
昨夕より降り出せし雨の、名殘なく晴れ渡りて暖かし。日曜日には近々歸國さるゝコンデイット樣初め、高木、田中樣がたと、大磯なる赤星樣御別邸へ晝食に御招待受けしまゝ、朝立寄るべければと前々より待居りしも、降雨にて止めし故、赤星樣より夕方一人にて行くと東京なる夫君より電話、當地は雨上りの景色うつくしきも他に見るべき處も亦御愛想も出來ざれば、御進め申す事もなりかねて、夕方夫君の御出を待ちつつ、二人の子供と入浴。去年の夏迄宅に居りて、掃除使ひ歩きなどの餘暇、勉強し居たる書生の卒業後、小山富士紡績に勤め居り妾の當地に居るをもれ聞きて、たづねくれしまゝ四方山の話致し居る中十時過ぎ、店の子供三人ばかり來りしまゝ、二人の子供連れて買物ながら海岸へ行く。
雨はれて山近しとかつね〳〵よりもさやかに、足柄箱根より伊豆の連山をたどりて、遠く眞鶴ヶ崎迄色おもしろく薄れ行き、かすかに漁船の見えつかくれつ、荒き浪間にたゞよふさま、いひ知れぬ眺めなり。子供等の角力、腕押しなどに時を過し四時頃女鯛三尾、さと芋、こんにやくなど求め正二と乳母を本道より先へ歸し英一連れて畔道を歸宅。留守中名取の兄上（朝吹の妹の良人）小田原へ參りしとて立寄られ東京に用あればとて入浴後直ぐ歸宅されしとか。
店の人など歸京の折に、姑君の御好物と聞きしふきのと差上げんものと、畑の中を探せしに昨日今日のあたゝかさに過半は開きてあれど、なほこゝかしこにたづね歩き居りしに、オーイ〳〵といふ聲に彼方見やればコンデイット樣高木田中樣がたを初め夫君の來らるゝに驚き、足袋もはかず、まして泥だらけの手にしてはと走り歸り、先づ手を洗ひ、足袋をはきて、御出迎ひ。
山の東屋にウヰスキー、ビールなど運ばせつゝ、はや夕食の仕度は如何はせんかと案じ居りしに、夫君の



動かぬやうに（小川一眞氏令息）

だゞすき燒さへあればよろしとの仰せに、爺を早速宿へ走らす。未だ土地にて牛肉もとめし事はなけれど、一番よき品をと賴みて、茶碗むしはとつ國人の好む處と聞き居りしまゝ茶碗むし誂へ、宅にて先刻もとめし女鯛にてフライ、さと芋、こんにやく、かまぼこにて煮込などこしらへ、たらはぬながら漸く食事差上ぐ。

　西洋人に打交りて日常の話位は差支なきやうにと英語の稽古に忙しかりし、それもいつしか昔語りとなりて、わづらはしき家事にたづさはり子供の守に日を送りてはなか〳〵に英書など繙きては居られず、永年の希望も夢と消え、イエス、ノーさへも答へられぬ悲しさ。唯無言の中に時はたち九時の汽車にて皆樣御歸京、夫君も停車場迄見送られて、九時半御歸宅、あと片づけして臥床。

　丁度八時過ぎなりし京都より電信かゝり、アスアサ、九ジ、タチ、シンバシユク、ヨシ、ケブ、ヨリとあるに、さては去年の冬休みに、越後なる兩親のもとに歸省せし妹の、此の春、父上京都の師團へ御轉任となりし爲御手傳にとて、京都へ從ひし妹を、母君の送り給ふなるべし。されば明日は、皆都へ引上げねば、と思ひしも未だに次男のセキ止らず、殊には長男も著しく肥りしとにもあらねば、今少し當地に置かん、桃咲く頃ともならば、都の寒さもゆるやかにならん、幸ひ乳母は妾の小學に通ひし頃より、さとに居りし人にて、一時は暇とりてありしを、妾の朝吹へ嫁ぎてよりまた馴れぬ新世帶を助けらるゝ事となりて、はや八年

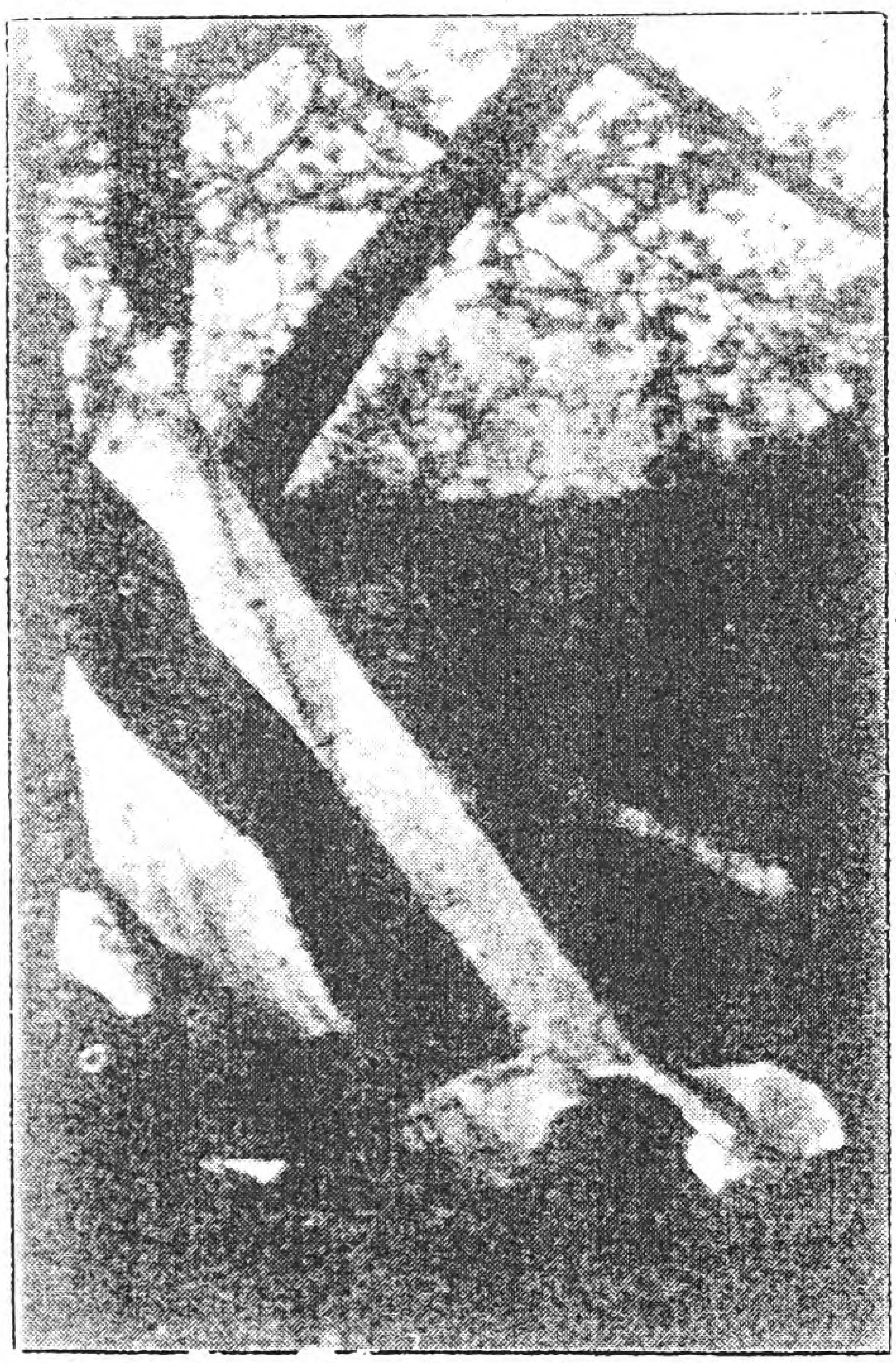
の永の年月、骨身をしまず働きくれ、子供もよくなづき、殊に次男も先月半より牛乳となりたれば、乳母と女中一人に子供を賴みて妾一人歸京の事と定めぬ。

二月廿四日。曇。月曜日。

國府津驛より御供して歸京致さんにと一旦は思ひ定めしも、くさ〴〵の用意もあればと、十時の汽車二等室に乘る。車中乘合の人數多ある中に、乳のみ子連れし女の、子供を己が足の傍にやすませ自身も横になり居りしに、程經て目覺め兩手擴げてア丶……と、のび一度ならず二度迄もなしたる姿の見にくさ。驚き見やれば二十歲を二ッ三ッ越したる年若き女、ひさしがみに銘仙の衣服まとひたる樣中流の婦人とは察せられき。

長途の汽車旅行、まして子供さへありては、なかなかにつかるゝ事ならんも、多くの人中、殊に、女少なき事とて、如何に目立たりし、其婦人の隣に、横にもならで坐りしまゝ、窓に空氣枕あてつゝありし男こそ夫とは後にて思ひ知られたり。まことに彼の人こそ愛妻家とやいふならんなど、つれ〴〵なるまゝに人の品さだめ。やがて新橋に着しも、明石町なる我が家へ歸りしは一時過ぎなりき。

午後弟護一の、二十日頃より風邪に冐され、臥床中と聞きしまゝ見舞に行く。護一は昨年學習院中學を卒へて慶應へ入學、若き中は苦勞せねばとの兩親の仰せに朝吹の親類に當る人と共に、三田に小さき家を借り受け自炊。不自由粗食と戰ひつゝ通學。妾の音づれし時



花見のあと

は丁度、高橋、黒木、中上川の御友達居られ、菊地幽芳の小説讀み聞かせ居られき。一時は四十度迄發熱致せしかど、昨日より下熱、氣分もよろしとて元氣なり。げに心細きいたつきの身には親しき友の訪れこそ、心強き物はなし、くさ〴〵のものなど賜ふさへうれしきに本など讀み聞かせ給ふは我のうさを拂はんとにや、よき友を持ちたる我が身ほど幸はなしとつく〴〵友の情を喜びて妾に物がたりぬ。

夕食後木挽町なる兩親のもとに伺ひしに、華族女學校時代の先生なりし木村貞子樣、母と御同窓なりしとて乃木大將夫人の銅像建設の發起人に勸誘のため來られしとか、久々にて御目もじ御なつかしう時のうつるも知らで御話、八時二十分といふに驚き新橋へ行く。

母君の妹ともなはれ御けしき美はしう御着、高橋、中上川樣なども御迎へ下され九時歸宅。夫君も暫くして歸宅なされ十一時頃臥床。乳のみ子をかゝへては、乳よおしめよと、何度となく夜半に起き出で、安眠の味は子供もちて此方忘られて……

折々は曉迄知らずに眠りたきものよと思ひたりしもあだなりき。今宵の如何に寢ぐるしかりしよ、時々目覺めて今頃は乳ほしとて泣きてやあらん、子供心にも淋しくやあらんなど、思ひは國府津に殘せし子供の上にのみ走せて、安かるべき一人寢の夜半を明しぬ。

二月廿五日。曇。火曜日。

一夜を思ひなやみて明せし爲にや、頭も重く、殊に唾のむさへ咽喉の痛むに驚き、裏の岸病院へ行く、ジフテリヤに類似の物出來居るよしにて含嗽藥頂き歸宅午後中山叔父(長岡母の妹の良人)來られて夕食も四人にてたのしくすませ、蓄音器の義太夫に耳かたむけつつ叔父上歸宅せられて後十時半臥床。

二月廿六日。曇。水曜日。

朝、母上の御ぐし拙手ながらも御取上げ致し、午後母上京子さん、護一のもとへ見舞に行るゝとの仰せ、妾も共に電車にのり二重橋にて母上京子さんに別れ、九段なる河本醫院へ行く。夕食後十時臥床。

(廿七、廿八兩日の分は紙面の都合にて次號に載す)



新しき『女らしい女』

長谷川天溪

❀女と自由

自由と云ふ事は學問の上から説明をすると非常にむづかしい事になるが、さしあたり私たちが日常生活に必要なる自由は社會の公安を害しない限りに、自分の思ふ事を行ひ人に迷惑を掛けない範圍で自分の自由をやる。それが眞正の自由である。

自由は人のもつとも尊ぶものである。自由のない事ほど人に取つて苦しい事はない。男も女も皆自由をこひねがつて生きて居る。男は最初から自由があつたが女には自由がなかつた。然し最近の世界の女は既に自由の世界に眼を明けるやうになつて來た。日本の女も漸く自由を叫ぶ時になつた。此れはまことに女に取つて喜ばしい事である。

然しながら、自由はやゝもすると、人に迷惑をかけない範圍をとびこして了ふ事がある。殊に知識の低い間、常識の不十分な社會にあつては、自由の意味があやまられ易いものである。然らば自由はどこまで許していゝかと云ふと、其の限度は、各個人の目分量に俟つより外爲やうがない。ひとり自由の問題に限らない何事にも目分量と云ふ事が大切であるが、其の目分量は自分が實際に生活をして、様々の實際問題に遭遇して見て、始めてわかつて來る。嚴密な意味で生きて見る人でなくては、何事の目分量も判然と解つて來ないのである。此の目分量が解ると云ふ事は、常識があると云ふ事である。常識があつて自由をやると、あやま



る事はない。

女が自由を得るやうになれば、其の自由は、常識の上から判斷して、正しい目分量から逸しないやうにしなければならない。其の邊の思慮がなくては、自由却つて其の人をあやまるであらう。

❀ 自重心を持たなければならぬ

世界の女の中でもつとも自由を持つてゐるのは英國の女であるが、英國の女は自分の自由を決してあやまらない。行爲にも言語にも自由があるが、英國の女は其の目分量をちやんと心得て居る。英國の女には常識があるから、自由を常識で判斷して、ちやうど適當なところを怜悧に生活をする。佛蘭西あたりの女になると、自由の埒外を飛び越して了ふ。

公德問題などは矢張此の自由の目分量を知る人々が集ると守られる。社會の公安を亂さない範圍で自由を行ふ國民ならば、此れは公德心のゆきわたれる國民である。

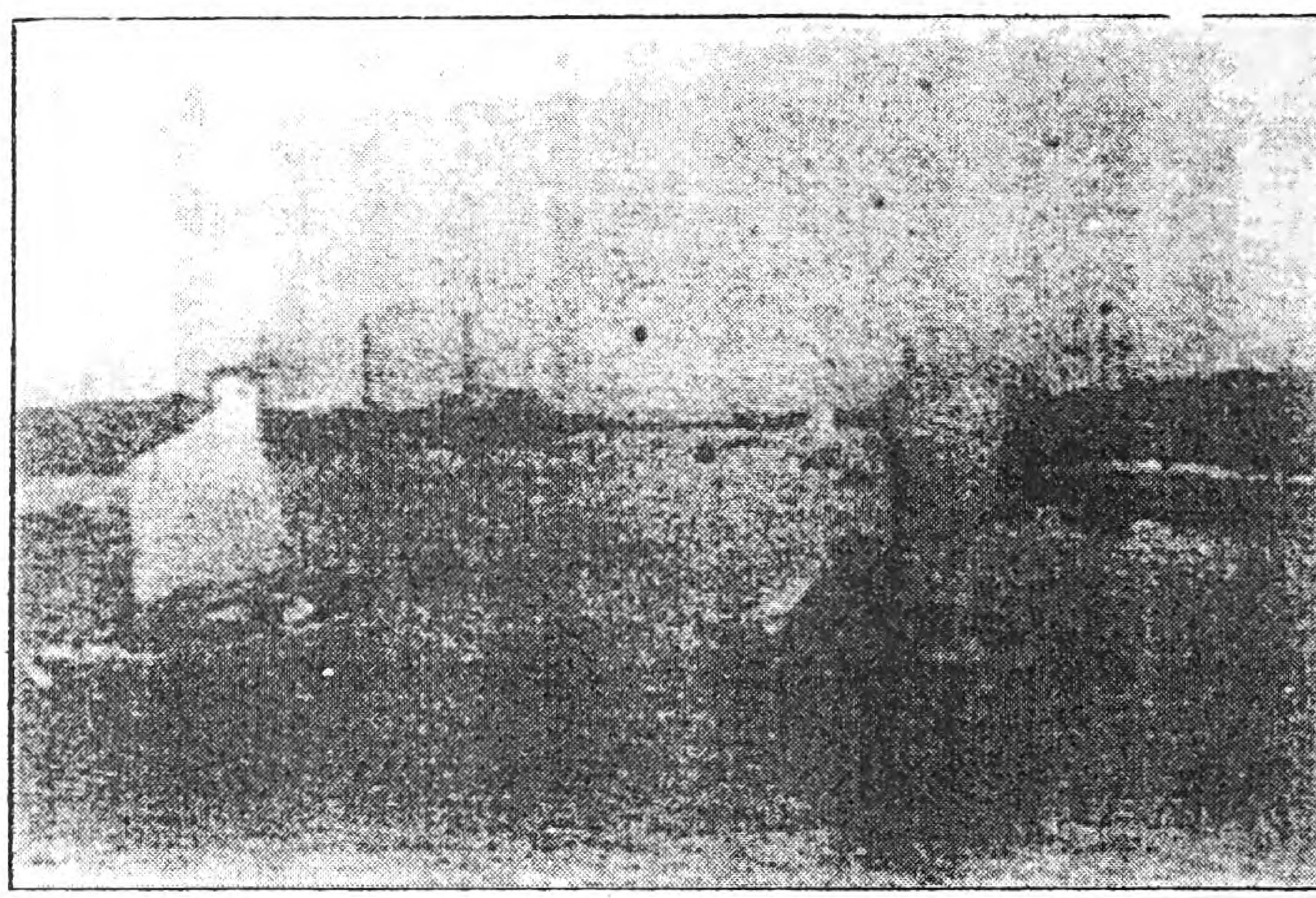
公園などに花が咲いて居ると其れを折つて了ふ。慾しくなつて其を折れば自分一個の慾望は滿足されるがそれを折つたゝめに他の人々は其の花から受ける樂しみを失つた、一つの公園は多數の人々がそれ〴〵稅金を出して、設立してある公共の物で、一つの花と雖、公共物である。花一つでも理由なく其れを折り取つては竊盜罪に相當する。公德心はそこからも起らねばならない。英國の社會では、さういふ考が何人の頭にもあるから、それでうまくゆくのである。

女が自由を行ふ場合も矢張同じ道理である。其の自由を行ふに當つて、よく熟慮して、限度をとびこして了はないやうにしなければならない。自由を得ると人は勝手になり易く、威張り易い。然し日本からいつた人が、英國の女を見て、威張つて居ると云ふのは私の見るところではさうではない。英國の女が威張つてゐるやうに見えるのは、自重心のあるのが、それの如く見えるのである自重心のある女はあるひはゐばつて居るやうに見える事があるが、其の眞相は決してさうで

ない。自重心は現代の女に取つて、缺くべからざるものである。女には女の權利があるそれは男に男としての權利のあると同樣である。然るに其の權利を他人に蹂躙せられる事は、自由を尊ぶものゝ忍ぶところではない然したゞ徒に男を困らせるやうな非常識な事をするものは英國の女にない。

❀娘の生活は監督する

西洋では女が入つて來ると、男は自分の席を女にゆづるのが一種の習慣であると云ふが、私の見たところで電車の中で女に席をゆづる男もなく、男にそれを要求してゐる女を見る事もなかつた。偶々子供などを抱いてゐるかして困難つて居る女があると、それに席をゆづる位であつた。各自、自己の權利を冒されるのを厭ふと共に、他人の權利をもをかすまいと云ふのが英國人の氣質である。日本の女は自分の權利を冒されても何とも氣が付かない。さうかと思ふとつまらない事を厄鬼となつて奮慨したりする。



隅田川の上流

英國の女はもつとも自由を持つて居ると云つたが、その自由は丁年に達してから持つ事が出來るので、娘時代は束縛をうけてゐる。つまり常識が發達しない娘時代には、兩親、保護者の監督なしには何事をする事をゆるされない。外出するのにも兩親の承諾がなければ出來ない。夜會にも保護者がなくては出る事をゆるされない。讀書も兩親が撰擇をしてゆるす事になつて

居る。

娘の生活は日本で考へる程自由でない、却つて日本の若い女が、自由すぎる位である。日本では娘に對する兩親の監督は不行屆の事が仲々に多いのである。一帶に日本の社會は、何事にも不行屆な事の多い、常識のない社會であるが、就中、娘に對する取扱ひは思ひ思ひで、隨分壓制を加へるところがあり、さうかと思へば、手綱をゆるめると、無闇とゆるめて了ふ。此れは畢竟、日本の親が生活の實際に觸れて、苦痛を味はないからである。

世路難は人を怜悧にする

英國の親達は容易ならぬ世路難を經て來て居る。日本の親達も同じく世路難を味はない事はないが、日本の生活はまことに樂である、英國人の社會に生存しようとする苦勞は中々日本の比ではない。個人競爭のはげしい事は、日本人の思ひ及ばぬ處である。

もつとも日本も近來生活が難儀になり、可成個人競爭が行はれるやうになつて來たと云ふが、まだ〳〵生活は樂である。日本人は贅澤さへしなければ食ふに困るといふ事はない、どんな片田舍に居ても生きてゆく事が出來る。歐米人は贅澤どころではない、各自働きがなく、意氣地がなければ、どし〳〵と落伍者となつて了ふ、而し一旦劣敗者となれば、食ふに困つて來る本當に食ふに困つて、餓ゑるか、狂するか二つの一つをとるより外爲やうがない。日本では未だ封建時代の面影が殘つて居て、商賈は親から子に傳へる風習が行はれ、家族制度が壞れないので、働きのない者もその家族の中で兎に角食ふには困らないで居られる。

歐米ではそんな弱い者は、かへりみるものがない。終には狂氣するか、自殺するか、或は餓ゑるより外致し方がない。

此の樣な生活難かあるから、その子供の敎育もいゝ加減の敎育をしては置けない。どの子供にも皆それぞれ自活する事が出來るやうにしつける。從つて、男も女も早くから自活の精神が盛である。何をするにも前

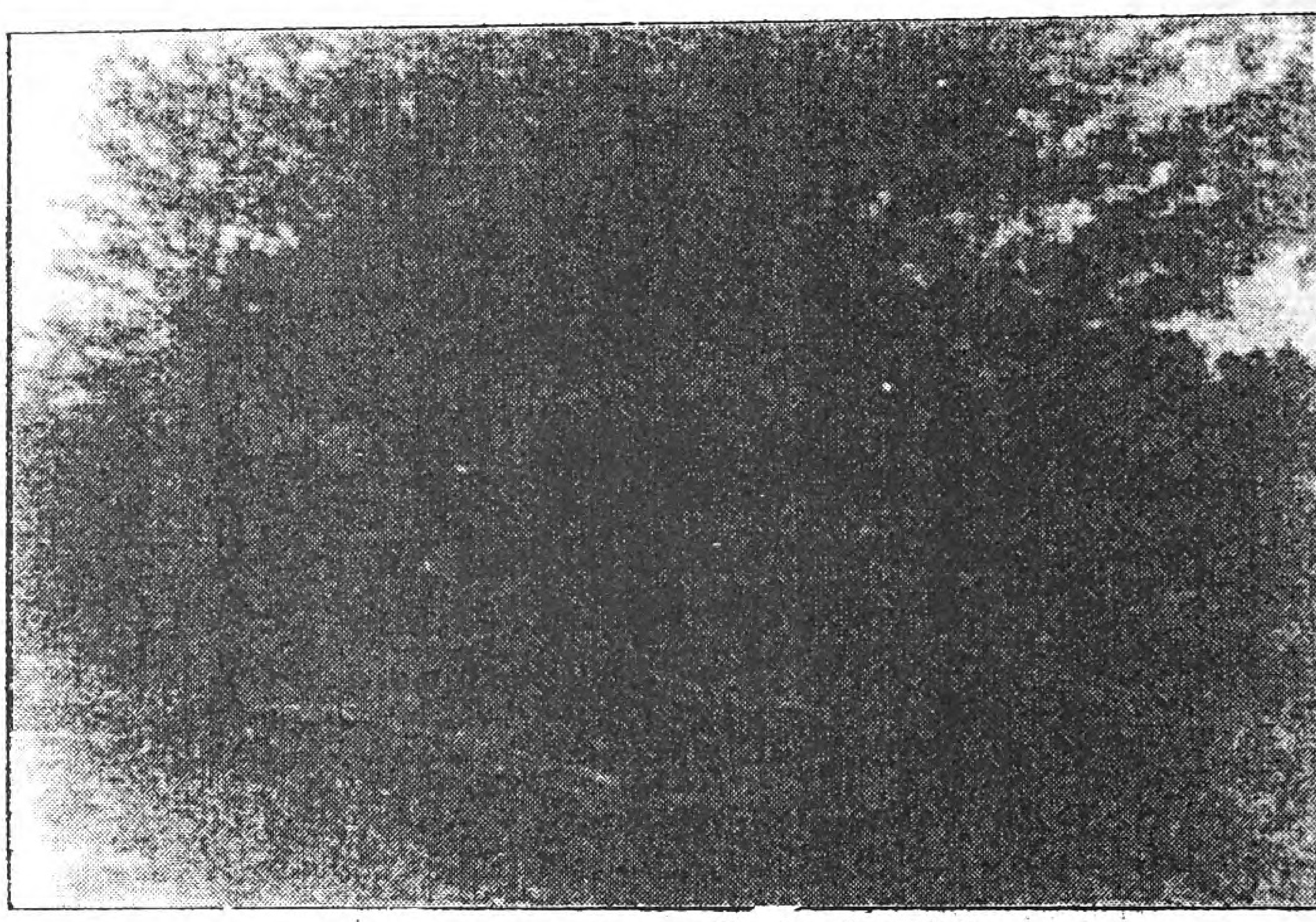
後を熟慮するから突拍子もない事をして損をしてはならないと思ふ考があるから、非常識な事をしない。

自活は精神を練磨する

此のやうに英國などは個人本位であり、日本は家族本位であるが此の二つは何れをいゝと見る可きであらうか、此れは大いなる問題である。然しこの問題をきめていかないと、あらゆる社會問題、婦人問題の解決がつかない。其の他人間生活の諸問題はすべて此のところから起るのであるから、それが解けない間はいつまでも故障ばかり多い。

日本の社會が家族制度である間は、現在のやうな安い給金で使はれて居る日本の女は、家族の扶助があるから食ふのに困らないので、默つて居るであらうが、今後家族を放れて各自獨立しなければならなくなると、直ぐ給料問題が起つて來る。個人競爭がはげしくなればなる程、女も人に依賴して生活をする事は出來ない。世界の女の中で獨逸の女は此の自覺を持つて居ない。佛蘭西の女は日本式であつて親や兄弟によりかゝつて居る。日本で云ふ新しい女は英國の女に一番多い、然し英國の女は心の底に其の事を思つて居ても、利口であるから徒に外にあらはす事をしないが考の進んでゐるのは英國の女が一番である。

日本の女にはどうも感情論が多い。常識が發達して



會津白虎隊碑上のさくら

ゐないから致し方がないが、どうも感情的で、冷靜なところが少いやうである男女に拘はらず凡て知識教育が少く、世路難に觸れない間は感情的から脱する事が出來ない。自分で生活をするやうになるとつまり本當に現實に顔を合して、種々の實際問題に遭遇すると、其の人の思想は冷靜な、堅實な深いものになつて來る感情も思想も強い根柢のたしかなものとなつて來る。もつともその中には、現實生活に負けて、益々感情的になり發狂するものや自殺するものも出來て來るが、是れは致し方のない事である。

ある期間を經てば直ぐ消える淺薄な感情でなく、まことに一生涯ついてまはる樣な強いたしかな感情を把持することは、其の人自ら、自己のライフに打突つて摑まなければならない。生活に觸るれば觸るゝ程人間は深刻なところがまして來る。生活に觸れてはじめて眞面目なものと不眞面目なものとが別れる。弱いもの不眞面目なものは退き、強いもの眞面目なものは益々進んでゆく。而して其の強いもの、眞面目なものゝ中からいゝ文學も生れ、いゝ哲學も生れ、立派な人格も生れて來る。

❀新しき『女らしい女』

日本在來の「女らしい女」は無論女大學あたりの舊來の女訓の樣に男に服從する女をさしていふのである然し「女らしい女」も時勢の變遷とゝもに變化してゆかなければならない。私は自重心を失はない女がこれからの女らしい女であると思ふ。無暗と男と爭ふのは自重心があるのではない。眞に自重心のある女は、女もひとしく人間であると自覺して、その自覺を根柢として、自分を辱しめない女である。

從來男子は自分達の都合のいゝやうに女を取り扱つて來たのであるから、今後女に動き出されると、困るに相違ない。女が自覺をして來れば財産問題が起り、職業問題が起つて來るから、勢ひ女は男と競爭をするやうになるであらう。職業上の男女の競爭は今歐米の一般の形勢となつてゐる、英國の女子參政權運動も起

因を此のところに發してゐる。男がよくそれを防げるか女が遂に壓倒するか、前途はわからないが、世界の大勢はさうなつてゆく日本でも早晩、女と男とは競爭する運命を持つてゐる。

男と女との競爭は一面から見れば悲慘な事もあるであらう。昔あつた如き戀愛もなくなり、小說的な物語もなくなるであらう。男と女との爭ひは此の後昔のやうな甘美なものから離れるであらう、然し此れは致し方のない事として、男女互にあきらめてしまへばいゝ

殊に競爭は進步である。女は男と競爭する事によつて進步し、男は女と競爭する事によつて進步する。競爭があつてあとにしつかりした强いものが殘りすぐれたものがそろへば社會は從つてよくなる。



公園を散步する人々

❀まことの優しさ

將來の「女らしい」女は獨立心のある女である。依賴心のある女はこれからの女らしい女ではない。獨立心があり自重心があつて、はじめて人格のある女が出來る。

日本の女は依賴心があつて不可ない、依賴心のある女は今後の社會に處する事はむづかしい。依賴心を女から取り去ると、女から「優しさ」がなくなると思ふ人があるかも知れないが、それは違つて居る、依賴心は自分に力がなくて、誰れかの保護を仰がうとする力の無いものゝする事である。また女から依賴心を取り去れば服從する女がなくなると思ふかもしれないが、服從は社會の秩序を保つためのもの

であるから、依賴心をなくする事と矛盾しない。依賴心を女からなくしても、女はやはり服從する場合には服從をし優しさもなくなりはしない。

一體優しいと云ふ事が何であるか。日本在來の優しい女は男に媚を呈する女の謂であつた。眞實の女らしい優しさは男に媚びる事でなくして博愛である。貧民をあはれみ、孤兒をあはれみ、博く人を愛する女が優しい女であつて、美しい衣をきて、男に媚びる女はまことに優しい女ではない。

女から依賴心をなくし、獨立心を強からしめるなら女は益々優しさを發揮するに相違ない。殊に自分が現實生活を味へば味ふ程理解力が出來、同情心に富んで人を愛することもまして來るであらう。新時代の女の優しさは博愛的のものでなくてはならない、或は手俥にのり、自働車を飛ばしてゐる優しさうな顏をした女がある。然しその女のやさしさは舊時代のものである。

女が獨立心を把持して、自分の生活をいとなむやうになるに從つて、女獨特の深い本眞の感情が浮いて來る。而して麗しい優しさが、その感情から根ざして來る。將來の日本の女は此の本眞の麗はしい優しさを理想としたい。

誰もさうであらうと思ふが、西洋から歸つて來たものには、日本の都會がいかにも淋しく見える。殊に道路の不潔、家屋の亂雜な事等は不愉快でならないものである。日本人は世界を知らぬ間は已惚ても居るが、一度彼の地を踏んだものには、殘念ながらどうしても日本を賞める事は出來なくなつて了ふ。それと同樣で、歸朝者の眼に映ずる日本の女はまことに賴みにならない狀態に置かれて居る。不經濟な繁雜な家族制度に束縛せられて、何等の修養も出來ずに居るのは同情にたへないのである。

▲●●●●●●前號所載宮樣の御殿勤めの記事に就いて、宮樣の記事に就いては高貴方の事とて迷惑せられし人もある由、誠に氣の毒に堪へず「宮仕への女」としたれど實は宮仕への女にあらず、宮仕への二三の方により聞合せて書しものなることを、筆者より御わびかた〴〵此處に正します。

になるに從つて、女獨特の深い本當の感情が浮いて來

◉面白い浮世の娛樂恐ろしい社會の裏面

浮世（うきよ）

四月號

一日發行

定價
一冊金拾錢　送料壹錢
【半年送共】前金六拾參錢
【壹年送共】前金壹圓廿錢
（郵券代用一割增）

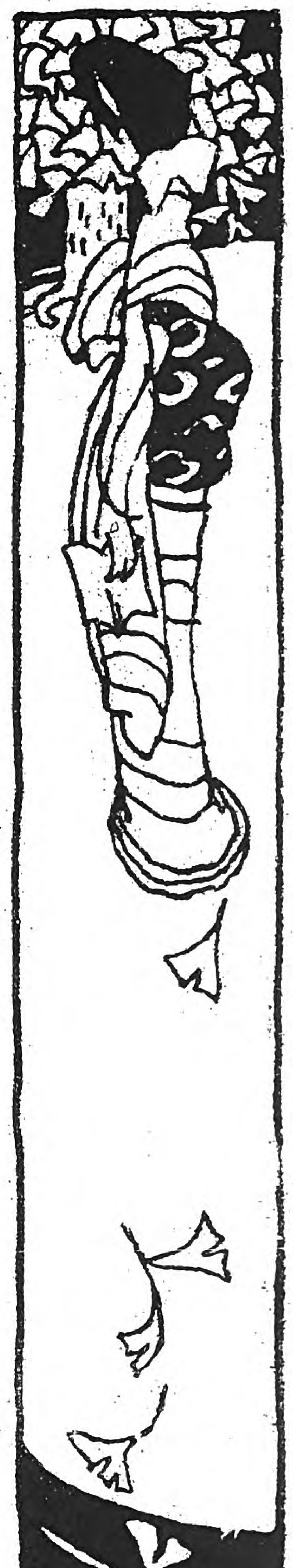
▲女か飛行機か?!……虚榮の女に呪はれた伊賀男爵の戀物語
▲獨唱されたる農學博士……農學博士は誰であらう?
▲救世軍に救はれたる娼妓艶衣……自由廢業の難門を何うして拔けたか?
▲火事！火事！火事！……壯絕極る消防夫の話
▲淺床の落花狼籍……惡魔を淺く淺床の主人狂暴を見よ！
▲怖るべき電車內の色魔……何壓して彼等は處女を誘惑する?
▲芝山內の決鬪……銃聲の謎は此記事に依つて解れた
▲變死の續いた家……場所は二本榎の西町一番地
▲墮落女學生の艶書……彼女は今春女學校を卒業した彼女とは誰か?
▲贋札使ひの惡手段……怖ろしき其の手段に驚く勿れ
▲餓鬼道の萬年町……悲慘な貧民窟の內幕
▲女敎師の髮結……今は大阪の一名物である
▲洲崎遊廓田中樓の內幕……誤親類筋の方々は刮目して讀まねばならぬ
▲第一福寶館活辯の艶鬪……大山も石田も隨分色男である
▲殺人實話 血染の白鞘……懺悔は徐々佳境に入つた
▲文藝協會女優の綽名……鬼が出るか蛇が出るか?
▲上野丸萬樓の化物の正體……化物の正體見たり枯尾花
▲お妾案內……赤阪と洲崎の誰かである
▲悲慘なる六區の白首……淺草の銘酒屋女の眞相を縱橫に描いてある
▲花魁捨場淨閑寺……女郎の魂迷ふ淨閑寺
▲地獄の一丁目なる未決監……過日の騷擾の時入監した男の話
▲賣春婦の奇巧……築島刑事の探偵苦心談
▲久世山の魔風戀風……久世山は男女學生の密會所である
▲評判娘……最初にお目に掛けさするは！
▲盛返せる忍運隊の落武者……斯くの如く彼等は獰惡である
▲新吉原行化日記……此の坊主は仲々色氣ある男
▲毒藥を仰ぎし我告白……失戀の果自殺を企てし記者の告白
▲落語 江戸ッ子……朝寢坊むらくの得意なお笑草
▲東都女髮結總まくり……御存じの事を素破拔いてある
▲女郎の秘密箱よ……作所實名を擧げて政治郎を下調
▲貴族と僧侶と淫婦……無垢な少女に斯くして墮落した
▲變人三人……淺學先生、おくろさん、源助さん
▲二海軍大將夫人の前身……一人は女郎、一人は妾、大將は誰だ！
▲各地方の花柳界……全國花柳界總まくり
▲不如歸以上の悲劇……江木子爵令孃の問題に泣かぬ鬼である

◉其他花柳、演藝、身の上判斷、衞生問答、浮世くらぶ、懸賞披露等奇拔嶄新なる記事を滿載し別に大懸賞募集あり

◉本誌獨特記事悉く現狀寫眞挿入す

▶發行所　東京市京橋區大鋸町十一（振替東京二四三七九）　樂文社（呼出電話京橋六〇七番）

◉全國各地書店繪草紙店にて販賣す



隱れたる精神力（下）

文學博士　福來友吉

僅に一部分の力

人間の記憶力はものにたとへると、大なる金滿家の暮しのやうである。吾々の頭腦の中には多くの記憶の財產がある。然るにいくら大きい財產家でも、よしんば千萬圓ある財產でも、其の人が平常千萬圓を自由に自分の考にまかして使つて居ると云ふ譯でないとほり吾々も、記憶の財產を全部自由自在に使用する事の出來ないやうになつてゐる。いかに千萬圓の財產を持つところの旦那であつてもそれ〴〵制裁をこしらへて一ケ月に大凡幾百金といふ金が自由に使ふ事の出來る金としてある。して見ると、千萬圓の財產家でも、その一ケ月に使ふところの金が其の財產である。法律上の財產はいくらあつても、私の金――自由に出來る丈の金が、其の人現在の財產である。自由に使ふ事の出來ぬ金は、眞正の其の人の金とは云はれないと思ひます

私の知つて居る人が、ある時岩崎の主人の不平をきいたさうであります。私に財產があると云つてうらやむが、うらやむ人の方を、却つて自分からは羨しく思ふ、小さい財產家は、自分の持つてゐる財產を自由自在につかふ事が出來るが自分はそうではない。名義上の財產は多くあつても自分の自由に出來ない金である自由に出來ない財產ではまことに滿足する事が出來ないと云つたさうであります。此んな不平ならば、私も云つて見たいものである。

兎に角そのやうなわけで、記憶も、自分の自由自在にならないものがある。今まで貯めたところの無數の記憶の財產の中から、只僅なる一部分のものが、外にあらはれて、吾々日常の記憶となつて居るのである。

此れはたゞ、記憶力ばかりではなく、凡て吾々の精神力は、自ら認めて精神力としてゐるものは、全體のものではない、わづかに一部分の精神力にすぎないのであります。

❀筋肉の力も偉大である

前の例は記憶力に就いての說明であつたが、吾々に隱れたる精神力のある事は疑ひのない事實であります單に記憶力に限らず、其他の種々な方面にその事實を認める事が出來る。筋肉の力にしてもなか〳〵偉大であつて、決して表面に現れたるだけの力ばかりではない。假りに一人の人があつて、其の人は平生から力の強い人と自分も知らず、人も知らなかつたのに、或る必死の場合に二十貫目位のものを持つ事が出來た。さう云ふ場合に其の人は元來力が無かつたのではない。二十貫目のものを持つ力はすでに有つたのである。然し平生はそれを使ふ事の出來ないと云ふ狀態にあつたのである。斯う云ふ例が往々あります。

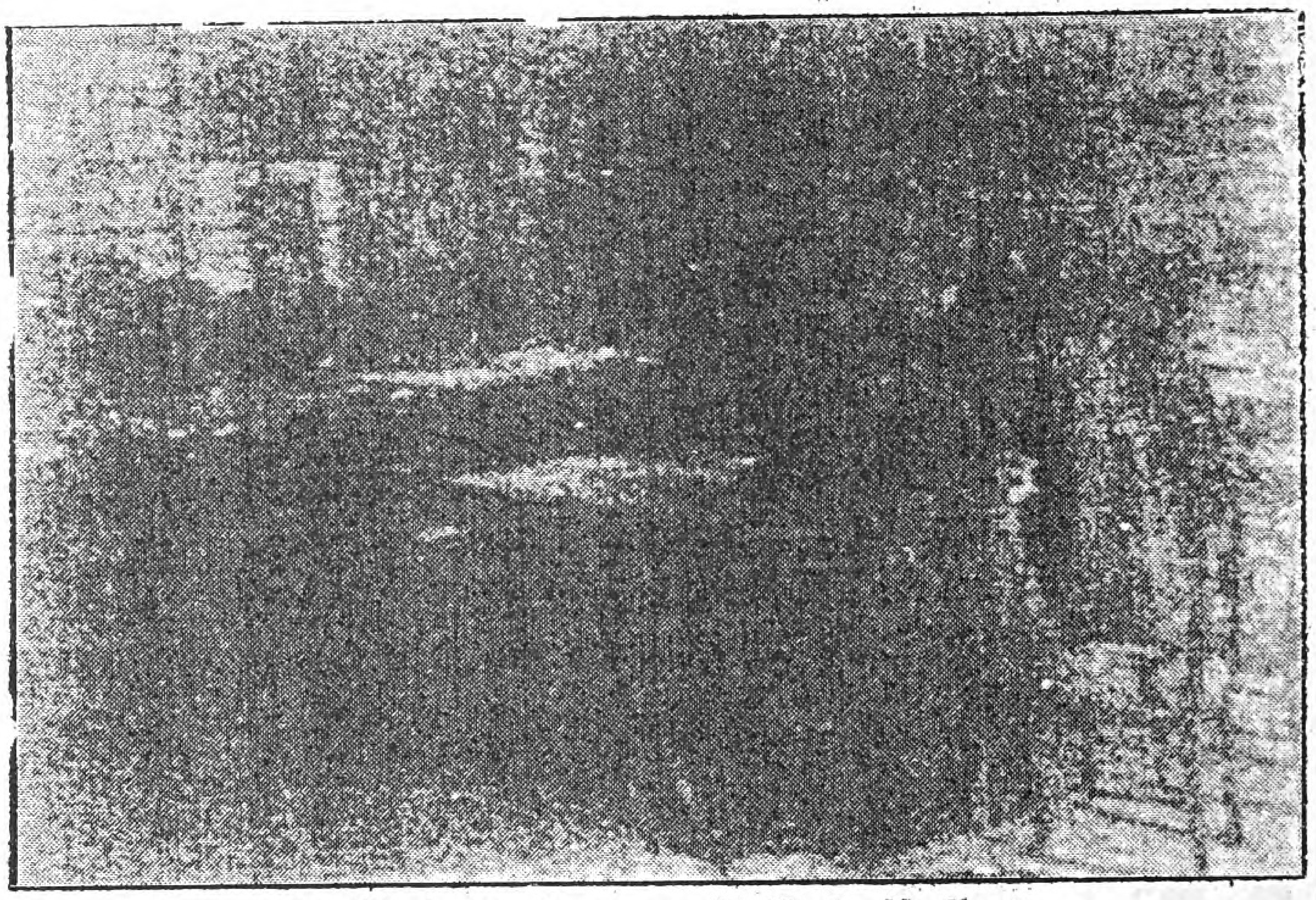
世間に云ふ所の狐つきは、普通の人の及ばない程走る事が早い。それに高い所から自由に飛び下りる。食物を食べると一升位の赤飯をペロ〳〵と平げて了ふ。然るに狐つきは胃の働きが強いのであるか胃腸にもな

らないさうであります。

❀岩見重太郎の人格變換

昔からの傳説に人が天狗につかまれると云ふ事がある。自慢する方の天狗は今の世の中には隨分居るが、眞正の天狗は居らないと、今の人は誰れでも思ふ。此の天狗が人を攫むと云ふ傳説を考へるとどうも一種の睡遊狀態ではないかと思はれます。

最前まで普通の人と同じやうに居たものが忽然として一種の睡遊狀態になるのであると心理學的に考へて見ると面白いのであります山に行つたり川にいつたりしてゐる中忽然として睡遊狀態になつて、高い處も平氣で飛び下り、危險な場所も平氣で走るのを見ると、知識のない昔の人の頭腦では天狗の所業と觀察する外はなかつたであらう。



人物繪を描きつゝある女學生

岩見重太郎は大杉山に入つて、天狗に劍道をならひ無双の英雄になつたと云ふが、是れも亦睡遊狀態によつて、現はされた力ではないかと思ふ。芝居で見ると、岩見重太郎は、子供の時は馬鹿であつて。道場で修業する間は普通で、大杉山に入つて馬鹿になつて歸りしばらく馬鹿で居て、愈々と云ふ場合となつて非凡な人間になつたと云ふやうに演じます。して見ると岩見重太郎は、幾度も人格變換をしたのであつて、是をヒステリーとは云はれないが、忽然として人間がかはり、今まで優しいのが俄に怒りつぽくなり、今まで魯鈍であつ

たのが俄に敏捷になると云ふのは、唯ヒステリーと云ふ狀態であるとばかりは云はれないけれども、私の考へる所ではそれに似たやうな狀態で潛在して居た其の人の精神の力、筋肉の力が現はれたのであります。

ちよつと馬鹿になり、ちよつと利口になるやうな狀態は兎に角天才者にはよくある事である。昔からも云ふ通り、詩人とか藝術家には神來——インスピレーションと云ふ事がある。一週間も二週間も寢もせずに考へて居つて、一朝インスピレーションに打たれると恐しい精力で製作に熱注する。その中にインスピレーションが去ると馬鹿のやうになつて、酒を飮むとか、また以前のやうにぼんやりして了ふとか云ふ事は藝術家には往々ある、藝術家にある事が、擊劍家にもないとは限らないと思ひます。

天狗や狐が人間に妙な力をあたへるのではない。人間本來の力であり元來の人格の價値が、何かのはづみに——主に迷信によつて現はれるのであります。此を人格の變換と云ひます。

✿ 世間の迷信に隨つて現れる

一體人間の精神に伏在する力の現れ方は、世間の迷信に隨つてあらはれ。其の時代の流行によつて現れます。

物理學の方の例をあげると、明治の初め頃には、電氣に就いて樣々な世間の評判があつた。するとそこからもこゝからも電氣が身體についたといつて來た。バクテリヤが流行すると、何でもわからぬ事は皆バクテリヤだと云つた。其の人の主觀的の精神の考へ方によつて、伏在する力が電氣とかバクテリヤとかの形をかりて現はれるのであります。

催眠術の呼聲が高くなると、私の身體に催眠術が充滿して居る、他人に移らぬやうに此の催眠術を封じて貰ひたいなどゝ云つて賴みに來る。

一時見神見佛と云ふ事が流行したが、其の精神狀態も矢張同樣であります。

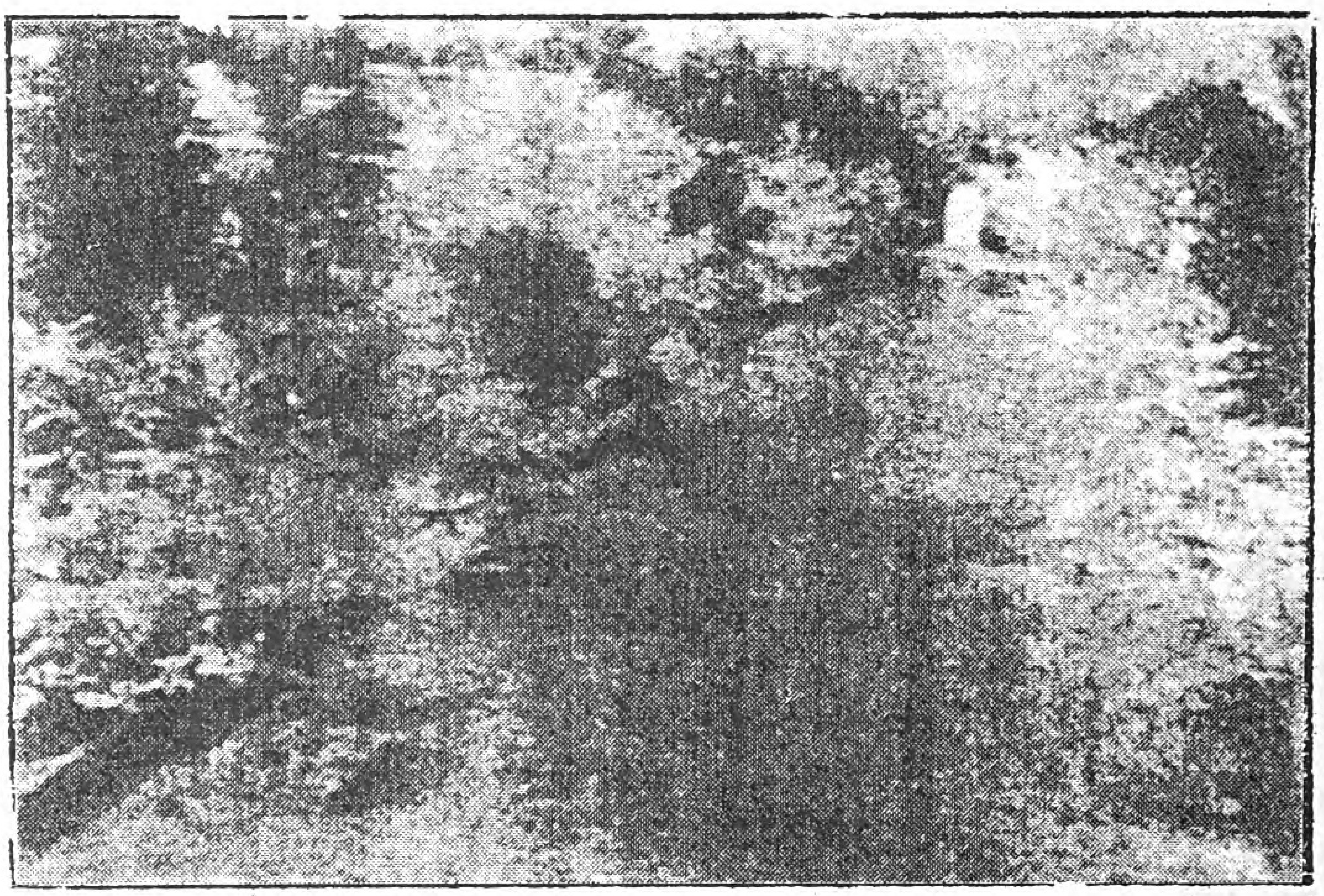
人間の隱れたる力はその人の居るその世間を支配し

て居る迷信の形によつてあらはれます。其の他ものを感ずる觸覺の力なども矢張さうであつて、狐つき等は普通の人ならば一定の力の制限のある所をすぐれて鋭敏になるのであります。

外國にかう云ふ人があつた。よく睡遊狀態になる癖があつたが、睡眠から寢呆けて起きて來ると妙に氣のかはつた人になる。而して眞暗闇の中に居て上手に裁縫をしたり細かい文字を書いた。是れなどは睡遊中に異常な感覺をあらはしたのであります。

❀觸感で音樂を味ふ 盲啞聾の女

米國にエレンケラと云ふ有名な女があつた。是れは睡遊ではないが、面白い實例であるからお話をします



周防國岩國公園の櫻

此の女は生れて八ケ月にして啞であり、盲目であり聾である事がわかつた。隨分念入りな不具である。此の盲目で啞で聾であるエレンケラは、非常に深切な家庭教師の厄介で教育せられました。其のうちに此の女が音樂が好きである事を發見しました。聾で音樂を好むと云ふと一寸合點がゆかないが、實際音樂を味ふ力をもつて居つたのである。どのやうにして音樂を味はふかといふと、樂器を彈じる時に手を樂器に觸れもしくは床板に手を觸れて、靜かに曲の進むに隨つて傳はる振動を手の觸感で味ふのである。而して愉快な曲であると、手を觸れて感じて喜こび、悲しい音樂である時には、女の顔は自ら憂愁ひて參ります。

其の後家庭教師の勞によつて、大學の聽講生となり、遂に卒業をしたと云ふ事が書物に書いてあります。

其の外にもローラアと云ふ女があつたが、是れは生れながらの盲目で、其の上に聾であつた。それで言語などは知らず、唯鋭敏な觸覺だけ特にすぐれて居つたので、母親の手の動かし方によつて觸覺で、種々な事を覺えました。殊に絲の色をつまんで見て解るので、赤や青を指先の感覺で區別して答へてあやまらなかつたさうであります。

これらの人のやうに尋常の人から考へると不思議とおもはれる程感覺の鋭敏なのには驚かれるが、然し吾吾でも、一切の感覺に於てすぐれたる潜在力を持つて居るのである。

舌の力の鋭敏

英一蝶と云ふ有名な畫家があつた。此の人は、鰹魚の刺身が大變好きであつた。八百善の主人と仲がよかつたので、毎年初松魚が出ると、八百善の主人から一蝶を招いて御馳走をしたさうであります。

ある時例の通り初松魚が出たので、一蝶をよんで御馳走をしました。いつも大好物の事故さぞ喜ぶ事と大に待ち設けて居つたが、一蝶は、膳にむかつて、一箸味つて見て、二箸と手をつけません、主人は失望をして、どうして一箸しか食べないかと理由をたづねると一蝶の云ふには、一體今日の料理はいかない。いかにも松魚は初松魚であるが、新しい砥で硏いだ庖丁でつくつたに相違ない。どうも味がよろしくないと云つたので、主人は直に料理人をたづねて見ると料理人は恐れ入つて如何にも新しい砥で硏いだ庖丁であると答へたさうである。

刺身をつくる庖丁は、古い砥にかけて、精神を丹田に据ゑて、悠然と硏いだものに限るさうであります。

新しい砥で硏いだ庖丁では味が甘くないと云はれて八百善の主人は一蝶の鋭敏な嘗翫力に驚いて、直ぐ藤緣の下にあつた古い砥を持ち出し、一日がゝりでゆつ

くりと研がせまして、更に刺身を作り、一蝶に御馳走をするとく、是れで甘くなつたと大に喜んださうであります。

神經と云へば神經と云はれるが、人間の舌の働きも其の力を現して來る〳〵それ程になります。

❀防害觀念が精神力に伴ふ

豆腐も亦切るものによつて味がちがつて來るさうで田舍では鐵の庖丁で遠慮もなく切るが、東京では眞鍮で切ります。私等にはよくわからないが眞鍮で切ると味がいゝさうであります。

要するに吾々の感覺の力も亦、精神のあらゆる力、筋肉の力と同じやうに、われ〳〵の考へて居るより大きいものであつて他に隱れて居ると云ふ事は、これまであげた實例によつてお解りになつたであらうと思はれます。

此の問題から自然に生ずる事であつて、精神修養とすべき肝心な事がある。それは何故隱れたる精神力が自由に使へないかと云ふに、吾々の精神作用には、精神の活動を防害する防害觀念と云ふものがあるのであります。自分々々の心にある力をこと〴〵く使用する譯にゆかないのは、主として、此の防害觀念の作用であります。精神の力が潜在しなければならないのは防害觀念に防害されるからである。防害觀念のために、吾々は平生、極く僅かの精神力の外使用する事が出來ない狀態にあります。

有名な澤庵和尚がある時柳生但馬守をよんで、あなたは天下に聞えたる擊劍の大先生である。そこで手前の註文をきいてもらひたいものであると云ふと、柳生先生は、何でも致さうと返答をした。そこで澤庵和尚は一尺の幅の板を庭に据ゑて、さあ此の板の上を渡る事が出來るか如何か渡つて見るやうにと云つたので、柳生先生は心中に、人を子供あつかひにすると思ひましたが、兎に角それを渡ると、感心々々と云ふ。其の後で同じ幅の板を、城の櫓の窓から窓にわたして、落ちない樣にして、さあ此の板の上を渡つて返へるやうに

と云つた時には、流石の柳生先生も思はず躊躇をした。庭の上では易々と渡つた所の板も高い城の櫓の窓に渡して見ると、一足踏み間違へば落ちて死なゝければならない。是れには閉口して居ると澤庵和尚が云ふにはそれでは不可ない。庭に据ゑて渡つた板とこゝに突き出した板とは幅がちがはない。同じ幅の板でありながら、庭に据ゑると難なく渡る事が出來て、是れを渡れぬのは、渡ると云ふ事の外に餘計の考が起つて居る。渡ると云ふ外に落ちやせぬかと云ふ心配が伴つて、遂に渡らうとする心を妨げるから渡る事が出來ない。落ちたらば死ぬ。落ちてはならないと思ふ考がない時には、庭の上で渡つた時の如く易々とわたる事が出來るのである。劍道の極意もこの奥の深いところまで心が据わらなければならない。落ちはしないかと思ふから渡る事が出來ない。是れを禪の方では自縄自縛と云ふのであるが、自縄自縛はひとり禪宗で不可ないばかりでなく武道に於てもさうである。此の自縄自縛の我に打克つ事が出來なくては、天下の名人と云ふ事は出來ない、單に術ばかりではなく、心の練り方が出來なくてはならないと説いたさうであります。

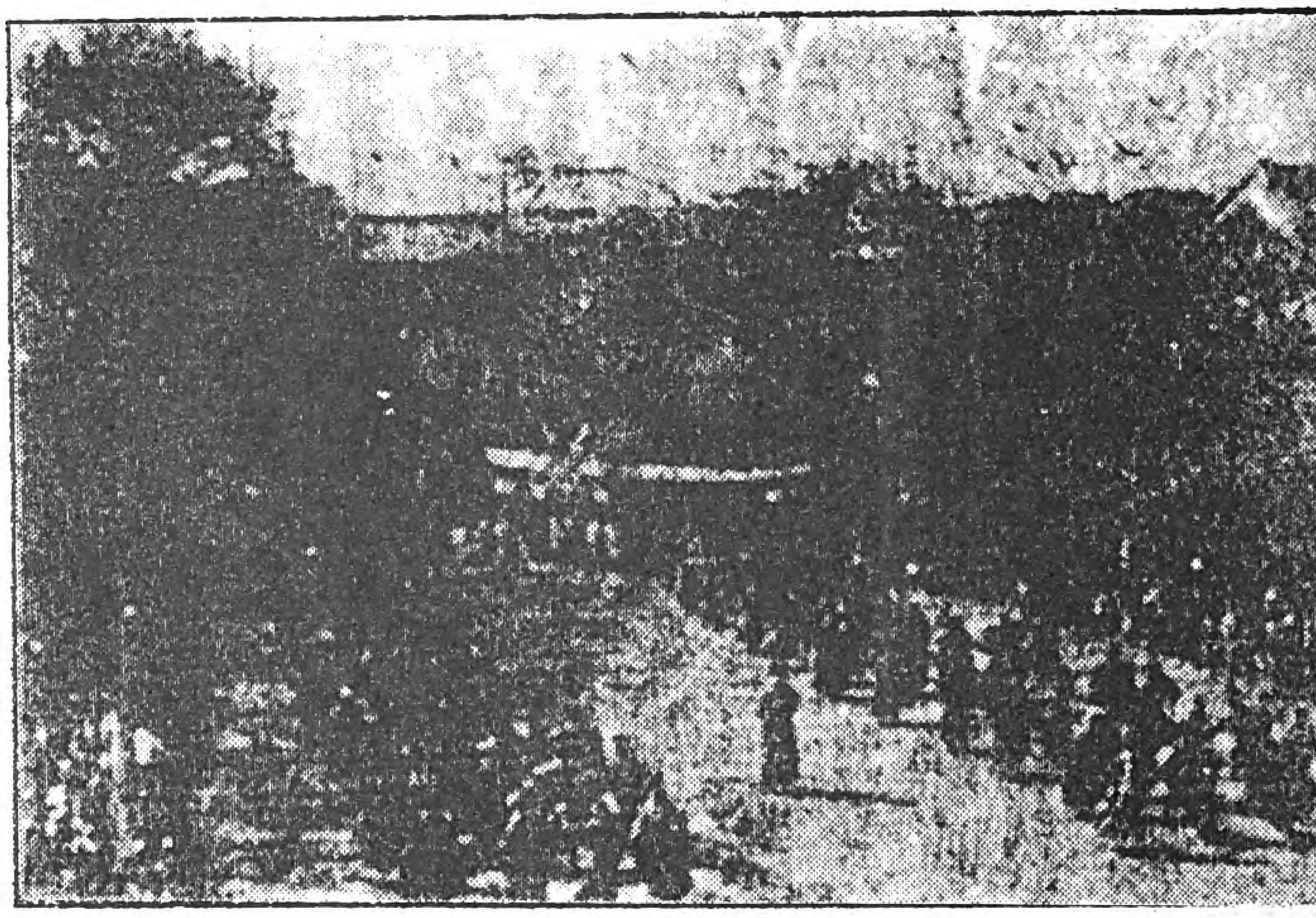
是れは講談師の話であつて、嘘かも知れないが然し面白い話であります。

❀精神を丹田に据ゑる

新免辰五郎と云ふ俠客があつた。喧嘩が強い上に、仕合をすると對手を殺して了ふ。此の男の云ふには、私は喧嘩をして負けた事がなく、仕合をして負けた事もない。ところが私は左程上手ぢやない。唯私には度胸がある。眞劍の勝負となると、術は知らないが、私には度胸があるから勝つのであると語つたさうであるが、是れも確に眞理であります。

近藤勇と云ふのは庚申塚で首打になつた志士である是れが云ふには、自分は武道にすぐれて居る者ではない。只どんな時にも、どんな事をしても勝てばいゝと思つて、無暗に斬り付けてゆくので、術で勝つのではない、勝たうと思ふ心の持ち方で勝つのであるといつ

たさうであります。近藤勇に對ふと、術のあるものが負けて了ふ。近藤は上手ではないが、其の度胸に負けるのである。然し。何に負けたのでも矢張負けたのだから仕方がない。常席を外して來たから負けたのであると云つたつて、兎に角負けたのであるから勝つたものが矢張強い。どのやうに腕が立派でも、怖れと云ふ事が働くと、腕は何の役にも立たなくなつて了ひます。平常鐵で製つた面籠手を着て、勝負をして居ると、ポンと來ても「よわい」なんて云つて居られるが眞劍だと、「よわい」どころではない、一命を落して了ふ。木刀で、お面をつけて居るといくら打たれても命には別狀御座なく候ですませるけれども、眞劍勝負ならば勿論命はなくなります。



小さき人々のダンス

度胸のあるものと無いものとは仕合の時にためす事が出來るさうであります。どうして試すかと云ふと、對手の刀の尖を押して見る其の時に、刀の尖が柳が風に動くやうに右に押せば右、左に押せば左になびいて來る者であると、度胸があると云ふ事が知れます。然るに度胸のない者となると、刀の尖が堅くなつて、電信柱のやうにすくんで了ふ。精神が丹田に据はつて居るものでなければ刀の尖を自由に動かし、手足を自由に使ふ事が出來ぬものであります。

❀ 加藤清正と血の出る槍

常陸山と大砲との相撲を見た時、水を入れる時、自分でその手を離す事が出來ないで、行司が一本一本別けてやつて居た、どうも自分の手で自分の手でなくなつて了ふ。精神をこめると手が堅くなるのは、精神が腕のところに出張して來るからであります。

度胸のないものは精神が手の先や足の先に出て了ふので、自分で自分の手足が自由にならなくなる、度胸のある者は心がちやんと丹田に据つて居るので、手も足も自由で、常時、柔に動かす事が出來ます。

昔、加藤清正が龜井新十郎と仕合をした事があつた關東では塚原、關西では此の人と云はれた程、當時龜井は、槍の名人であつた。

此の兩人が秀吉公の前で槍の仕合をした時、短穗の槍で負けると粉がつく事にしてあつた。加藤清正はこの勝負では負けた。加藤は負けた後で、いや是れは不可。こんな槍で勝負をして居ては負ける。負けても死なゝい槍で勝負をしては勝つ事が出來ない。私の槍は突けば死ぬ槍である。突いて白い粉がつくのではならない。赤い血の出る槍でなければ、私の腕は出て來ない。もう一遍私の槍で眞劍勝負をしようと、三尺の帽子を投げすてゝ云つた時に、龜井新十郎、まるで火のかたまりの樣になつて。いよ〳〵眞劍の勝負となつて加藤が勝つた。是れも講談師から聞いた話であるが、兎に角講談師の話にはいゝ事があります。

❀腕よりも精神の問題

西洋には種々むづかしい奇術がある。併し玉突が一番むづかしいさうであります。名人が突くと球の中に自由自在に精神が動くやうに見える。吾々が突くと途方も無いところに飛んで了ふが、名人が突くと心が籠つて居る程、ちやんと目的の通りに當る。それ程の名人が、名人同志の勝負となると、家を出る時「小言」を云つて出た時の球は思ふやうに當らない。僅に腹を立てたばかりであるが其の日の球は當りが惡いさうであります。その代り何も氣分に故障のないときには技神に入ると云ふ喩の如く驚くべき技術をあらはすので

ある。

日本の撃劍も其の奥祕の深いところになると、此れと同じで、それはもう實に微妙なる働きをする。宮本武藏は小姓の前髪について居る飯粒を二つに切つた。自分の弟子に眞劍勝負をするものではないと教訓するためにその技術を示して、是れほどの腕はあつても、眞劍の勝負はするものではないと云はれたさうであります。技術が微妙にわたればわたる程、僅かな感じも影響を及ぼして來る。車引きが宅で細君と口論をして出て來たから、其の日車を引いて足の運びが遲いなんて云ふやうな事はないが、微妙な技術になると僅な事が妨げになる。それでつまり、技術はその極に達するには、腕の問題ではなく精神の問題であると云ふ事がわかるのであります。

昔の人が繪を書くには、觀音を書くには觀音を信仰し、達磨を畫くには、達磨を信仰し、四十九日の間、精進潔祭をして、はじめて一念のこもり信仰のこもつたものを畫く事が出來たのであります。随つてその繪には恐しい精神力が現れて居て、見る人が信仰の心を起すのである。

けれども今日は腕はすぐれておても精神がこもつたものがない、一つ是れをあてゝ三百圓なり四百圓なりの金となれば、借金が拂へるなどゝおもつて書くものであるから慾の深い觀音樣が出來て、慈悲忍力の觀音樣は決して出來ない。藝術もやはり、究極は腕の問題ではなく精神の問題であります。何をするにも精神が籠つて來ないと取るに足らないのであります。そこで吾々の偉大なる精神の力、筋肉の力を現はすのをさまたげる防害觀念を征服する必要が生じます。其の防害觀念を征服するために修養をする事が、何よりも大切なる事となるのであります。

●●●記者曰。福來博士の興味あるお話は右で終りました此話は前に小石川區丸山町東洋高等女學校の紀念會の席上でなされたお話です、同校幹事岩上行坡氏の厚意に據り、本誌に掲載することゝなり、博く讀者諸君に御紹介することが出來ました。

萬歲　御即位式の話（中）

外島涙之介

（六）御服、御調度、御飾物

（イ）天皇は束帶、袍、純日本の最大禮服で即ち頭に冠、下襲の上に袍を召し、表袴（袷で表は文があり、裏は緋）に背後に裾（長くうしろに地を引くもの）をつけ、石帶（瑪瑙の一寸四分位のもの數個を黒漆に染めた革帶に糸で綴ち付けたるもの）をまき黄金作の太刀を帶び、牙の笏を持ち靴（日本中古のもの）を履せらる。皇后陛下は五衣、唐衣、裳、即ち女子の大禮服で、是は下は白小袖次に單衣、次に五衣（重袿の事で表は種々の色あり、裏は何枚でも紅の平絹である）を召し、其上に唐衣（錦のきれの袷で、兩袖が短く、しかも腰より上迄でみじかき衣）を着け御腰より下は裳をつけられる。頭はおさげにして挿櫛。御手には檜扇（袷の薄板を十數枚重ね糸を通じ餘れる絲を長く下に垂らす）を持たれる。

官人は勳、位、爵、及び官職に由て種々であるから一々述べると煩はしい、略す。

（ロ）威儀物。是は大禮使の高等官四十人が束帶姿で一定の場所に捧持してゐるものである。即ち、錦の嚢に納めた太刀八口、赤色の綾に入れた弓八張、紫色の綾の嚢に入れた壺胡籙八具、金鍔で黒塗竿の桙八竿楯八枚、合計四十を云ふので之が左右二十人づゝ分れて持つ。

（八）御飾り。日像幢（竿は三丈許り赤地錦に日の像を金で繡したもの昔のは日の中に三本足の烏がかいてある）一旛、月像幢（白地に銀で月の像を繡つてある。昔は銀色の月の中央に月桂樹があつて左右に二足の兎が居る形があつた）一旒、頭八咫烏形大錦幢（竿の頭に八咫烏の形をつけたものであるらしい。旗地は五色瑞雲の錦である）一旒、靈鵄形大錦幢（是は金色で靈鵄の形を繡つたので地は同じく五色瑞雲の錦である）一旒、萬歲幢（赤地錦に眞字で金色に表裏共に萬歲の二字を繡つたものである）二旒、菊花章中錦幢（五旒ある。即ち、青地錦、黄地錦、赤地錦、白地錦、紫地錦で、皆金で菊花御紋章を繡つてある）菊花章小錦幢（之も五旒ある。中錦幢と同じで形少しちひさいもの）。火焰臺の上に懸けてある鉦、六面、鼓、六面、桙（金の鍔で柄は黒漆。赤地錦の小旗が付いてある。）

（それに柄繪が金で繍つてある）二十竿、日像幡以下これまでの調度五十八は、いづれも左右に別れて其下には大禮使の高等官が立つて附いて居るのである。本誌の挿繪は中古即位の圖であるから、此に由て今との異同を略言すると、

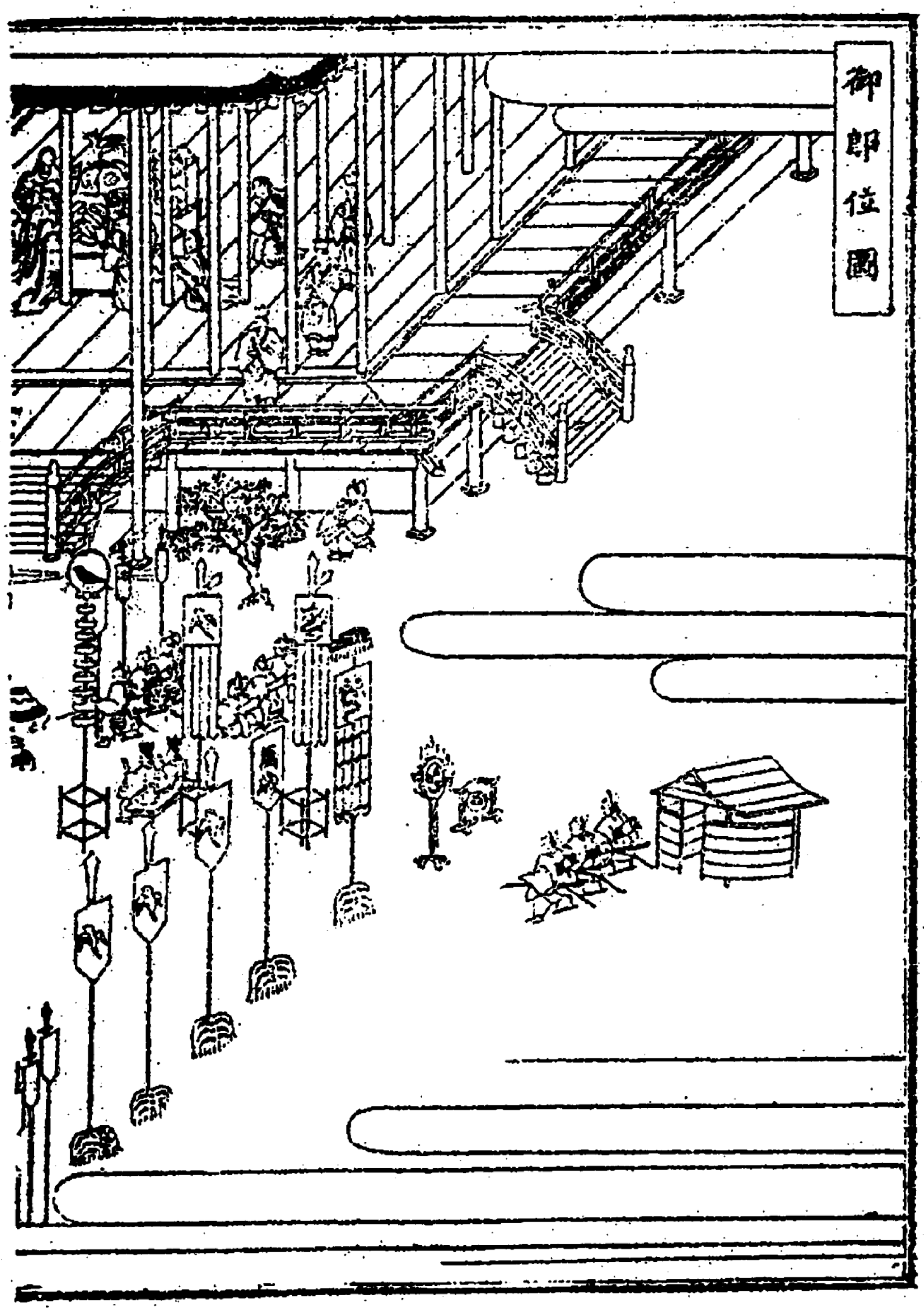
昔は日月兩旗の中央に神武東征の吉事に由られたのか靈鵄の旙を置いた。今の靈鵄形大錦旙と頭八咫烏形大錦旙の代りに、左に玄武、白虎、右に朱雀、蒼龍（四旗は支那にて東西南北の意）の四旗（圖中上部に二本桙、龍、鳥、虎、蛇の畫ける旗高さ三丈幅七尺）があつて其次の左右にある龍の旗が今の菊花章中錦旙に當り、左右三ツづゝ鳥（鷹の形なり）の繪ある旗が今の菊花章小錦旙に代るべきものであらうと拜察される。前面左右の五本の桙はお飾りの桙であるが、日月兩旗の左右に弓箭を帶した武人の持てる桙は、今の威儀物の桙に當るものであらうと思ふ。猶昔は中央に火爐と燒香筥を置き正門承明門内に銅の狛犬を据ゑたのである。

（二）高御座、紫宸殿中央に南面して立つ、之は黒塗漆三段で、一段二段は赤地錦、三段に青地錦を敷いて其の上に繧繝緣の疊（へりが五色の絹である）二枚、大和錦（唐草形の織りもの）東京錦（龜甲形の織りもの）を上に累ねて敷いてある。形は八角で屋根の中央に金色の鳳、八角毎に金色の小鳳がつき其下に錦の小旗が着き、搏風は五色の雲形に塗り、八個の小鳳の左右及び八角に大小四十餘の鏡が着く。その鏡の左右は金銅彫鏤の八花形や唐草形がついて、皆白玉が嵌入され非常に立派なものである。で、高御座のまはりに御帳（深紫色・小葵色の綾で裏は緋の絹である）が下つて中は見ない中には中央に御椅子、左右に螺鈿の机が一つづゝあつて、天井に大鏡があり。北階から高御座の後方迄筵道を敷いてある（此上は陛下以外お供の人も乗れない）昔は高御座の後に一雙の屛風をたてた。高御座の東方に　皇后の御座がある、高御座とは云はないで御帳臺と云ふ。八角の屋根の先が蕨手の樣であり、鳳が靈鵄に代り帳が淺紫であると云ふ風に高御座と大同小異である。昔は決して皇后は出御がなかつたので、御帳臺もなかつた。

以上の御服、調度、御飾の物、威儀物、高御座等の事が讀者に能く會得してないと、次に述べる登極の大禮の事は分るまいと思ふ。

（七）賢所大前の式及び紫宸殿の大儀

前記（前號所載）の儀式順序を經て卽位式になる。當日は東京宮城では皇靈殿、神殿に『今日卽位の禮を行ふ』といふ御奉告の式がある。京都の式場は二つある。卽ち賢所に御告文を奏する事と、紫宸殿の式が最も大切な禮であるから賢所大前の儀も重大な式であるが、式の順序は期日御奉告と稍似て居て異つた點は紫宸殿の儀に近いから、直に紫宸殿の儀式を述べよう。



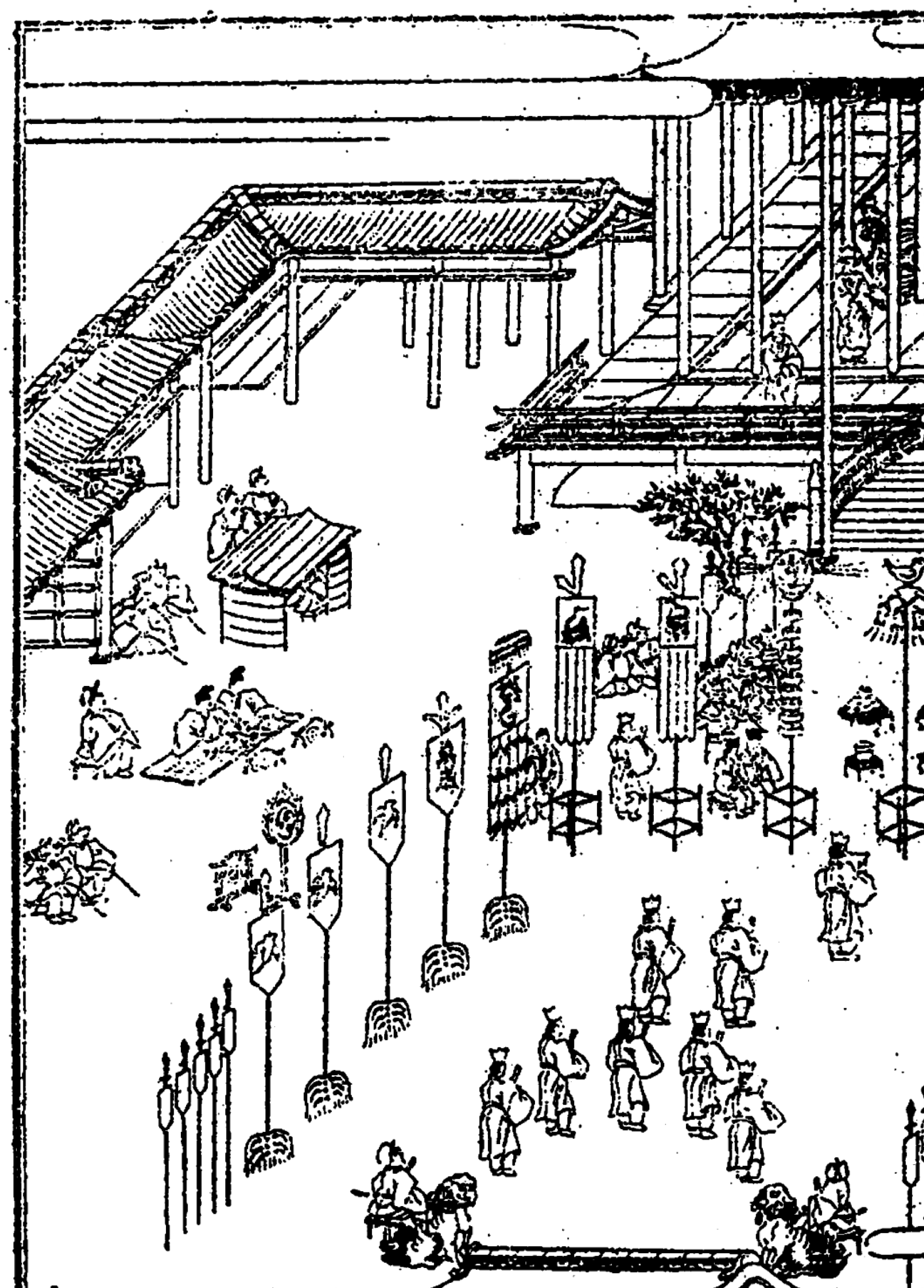
御卽位圖

紫宸殿の母屋の中央に南面して高御座を設け、それより東方に御帳臺を設けられる。母屋の圍は廂の間と云ひ、御殿に面して（以下左右は御殿に向つての左右をいふ）左が西廂、右が東廂、正面が南廂で南廂の中央に十八段の階、（南階）がある。階の左に橘（右近の櫻は之れなり）右に櫻（左近の櫻）がある。この處が廣いのでお飾りの旗や桙を建てるのである。それは、櫻（向つて右）の前に日像幡一旒、頭八咫烏形大桙幡一旒、萬歳旗一旒菊花章中錦幡五旒、菊花章小錦幡五旒、鉦三面、鼓三面、桙十竿、威儀物（太刀四、弓四、壺胡籙四、楯四、桙四）が列ぶ。左方橘の前に右と同じ様に月像幡一旒、靈鵄形大錦幡一旒、萬歳幡一旒、菊花章中錦幡

五旒、菊花章小錦旛五旒、桙十竿、鉦三面、鼓三面、及び威儀物がならぶ。

時刻がくると儀仗兵は外門（建禮門、建春門）の外に整列し、内門、（西面は月花門、右掖門、南面は永樂門、承明門、長樂門、東面は左掖門、日花門、以上十七門）の内の左右には三十八人の大禮使高等官が立つて居る。

定刻になると鉦と鼓を三度撃つ（昔は鼓ばかりを九つ撃つと諸門之に應じて鼓を打つて諸門を開くのである）と、内門と外門の間に列立して居た全員は大禮使の前導で内門を入り所定の位置（東西廂）につく。兩陛下の前面南廂に北面して立つ人は、内閣總理大臣大禮使長官、式部長官、宮内大臣、大禮使次官、式部次官のみである。本殿（母屋）高御座の前は皇太子、諸親王、諸王、皇后御帳臺の前には親王妃、内親王王妃、女王が立つて居られる。

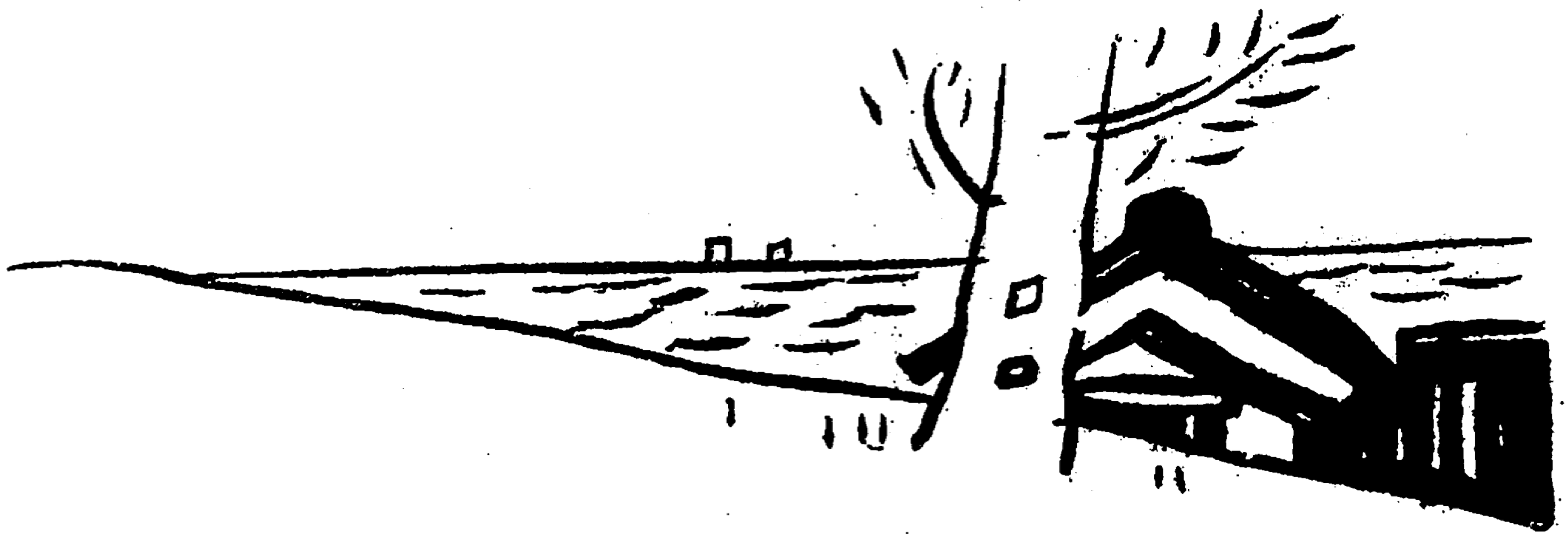


定められた時間になつて、式部官が警蹕と稱へる（昔は隼人が犬の鳴聲を三度したので今の警蹕に當るらしい）と天皇陛下は御束帶御袍を召し、供奉員を從へて奥の方から筵道の上をしづ〳〵と出御になつて、高御座に御昇になる。（昔は女官（女孺）十八人が翳（團扇の柄の長き樣のもの）を持つて、陛下の御姿を前後左右から隱しつゝ進まれ、高御座の帳を搴げる時も翳を魚鱗の樣に前にたてゝ居たのである）「侍從が帳中の案上に、

左に御劍、右に御璽を奉安して御笏をさしあげる。內大臣は高御座の上の帳の外へ向つて右側に立ち、侍從長侍從、侍從武官長、侍從武官は高御座の後方壇下に立つ。天皇の御座定まると、次に皇后、同じく後方から出御になり北の方から御帳臺に昇られ、女官の手から檜扇をお受取になる。皇后宮太夫、女官等は御帳臺の下後方に侍立して居る。之が濟と、侍從二人左右に別れて高御座正面の御帳を搴げ〔昔は關白が簾をかゝげられ、正面の御帳は搴帳の命婦二人（女王がなられる）が帳を搴げたのである〕女官二人又左右から皇后の御帳を搴げて座に復すと、天皇、御笏を端して立御、次に皇后御檜扇を執つて立御、玆に於て初て　兩陛下を拜し得られるのである。〔昔はこの時鉦を擊つ〕時に此の式場に參列の諸員最敬禮をする。〔昔は磬折と云つて殆ど直角に體を折たのである〕その間に〔昔は香を燒いたのである〕內閣總理大臣は態々西の階を降り庭に下り北面して　陛下の御前に立つて居ると、　御卽位に關する最も優渥なる勅語を賜はる〔昔は宣命使が　命を宣べたのである〕

次に總理大臣は正面の南階を昇り謹んで　壽の詞を申し上げて又南階を下り庭上にある萬歲旛の前面迄進んで「萬歲」と三度唱へると參列の諸員皆之に和して萬歲を三唱する。〔昔は武官が萬歲旗を振り動かして萬歲を稱した。〕之が終つて、總理大臣が西階から昇つて己れの位置に復すと、式部官が警蹕の間に　兩陛下は始めの如くに後方莚道の上を入御なされる。次に鉦と鼓を三度擊つてから諸員は元の樣に順次下つて、式はここに全く終るのである。

斯くして卽位式は終る、其後　兩陛下群臣を侍らせて、賢所に神樂の式を擧げさせ給ふ。多くは夜間であるが、庭燎を焚く　兩陛下、御禮拜の後、雅樂部の伶人が神樂を奏す、笏拍子、箏、笛、篳篥の合奏で、歌は本歌、末歌合せて一變の曲を奏す。神樂歌の種類は凡そ五六十章ある、歌は例へば、賢木の神樂歌の本歌「さかき葉の香をかぐはしみとめくれば八十氏人ぞまとゐせりける」末歌「かみかちのみむろの山のさかき葉は神の御前に茂りあひにけり」の類である。



誤解されたる貞操

女子師範學校教授　文學博士　吉田熊次

▲生命に變へても守るべき貞操

近頃新聞紙等を讀むと日本の若き婦人のうちに、隨分貞操をあやまる人が出て居る其れが事實とすれば、甚だなげかはしい事と思ふ。

婦人にとつてもつとも大切なのは、貞操を守ると云ふ事であつて、時としては生命にかへても操を守らなければならない程である。然るにかくの如く貞操を重んじないのは、何故であるかと云ふと、種々の原因もあるであらうが、一つは西洋婦人の貞操について間違つた考を持つて居るところから來るのではなからうかと思ふ。

卽ち西洋では男女間の交際が自由である。その自由なる男女間の交際を見て、彼れ等は貞操を重んずる者はないと誤解をして自分達も自由な行動をとるのを文明式の婦人の當然の態度と考へるのではなからうか。若しそうであれば餘程間違つた考と思ふのである。

我國に於いて昔から非常に女子の貞操をやかましく考へて居るのは、あらためて云ふまでもない事で、その思想が多く支那の教へにもとづいて居るのも事實である。け

れども西洋に於ても決して女子の貞操をやかましく云はぬ譯ではない。

▲古代の記錄にある貞操觀

極く古いところから云へば、今よりおよそ千八百年も前に書かれて居る記錄によると、獨逸の其の頃の風としても、女子の貞操はやかましく云はれてゐる。もし一旦結婚した女子が操を破つたときは、それを離緣する權利は夫にあつたのである。夫はかゝる婦人は赤裸にして、町中笞を打つて追ひ出したと云ふ事である もし未婚の女子でさういふ不品行の事が一度世の中に知られて來ると、たとへ身分がよくても、財產があつても、容貌がよくても、結婚をする事は出來ないと、「タシッス」と云ふ羅馬の學者が獨逸の旅行記の中に書いてある。

それであるから彼の地に於いてでく昔から女子の貞操をやかましく云つたのは明である。殊に基督教がはひるやうになつてから、益々嚴密となり、神の前で

誓を立てない以上は、女子はけつして男子に身をまかせる事はないやうになつて居る。結婚を重んずるのは基督教の一大特色で、而して一大美點であると思ふ。それに比較すると我國の風習の如きは嚴肅を缺いて居る。西洋にあつては一夫一婦の考がふかく人民の頭にしみこんで、貞操は何よりも大切の事と思つて居る その點は日本支那の從來の敎へとことなるところはないのであります。

▲支那留學生の誤解

何故に日本の人々がヨーロッパの人々の貞操を誤解するかと云ふと只外形的の觀察をするからである。ある人の話によると、支那の留學生が日本の男女間の交際の有樣を見て驚き、故鄕に手紙を出してかういふ事を報告したさうである。日本では同胞であらうが親子であらうが皆亂行をして居る。日本の風紀は非常に亂れて居ると云つてやつたと云ふ事である。何故そんな間違つた見方をしたかと云ふに、支那では女は必らず一

つの部屋を持つて居て、男は家の人であつても妄りに談話なんかしない、從つて婦人は容易に自分の部屋を出ないと云ふのが、大變に女德の高い事にせられて居る。

然るに日本ではさういふ事はなしに、女の人でも自由に男の人と話をする。男の同胞とゝもに散步をするのも自由であるし、父親と同道することも自由である。それで支那人が自分の國の習慣からこれを見て、日本はあだかも、婦人に何のつゝしみもなく、貞操も亂れたものであると誤解をしたのであつてまことに可笑な話であるが、日本人が西洋の風俗を見て、西洋人の貞操を誤解するのも亦これと似たやうなものでありはせぬかと思ふ。



▲渡歐者の不見識

日本では從來家族の人を外にしては、男子と女子との交際と云ふ事はほとんど無かつたといつていゝ、西洋では相當の紹介さへあれば未婚、婚既の人でも自由に交際をし話をする。もとより未婚の男女には相當に作法上のきまりがあつて、勝手に訪問をしたり、手紙を交換するやうな

事はないが、兎に角大道を一緒に散歩をし、人の前でも隨分愉快に話をする位はつねであります。かゝる男女の交際の形有樣だけを見ると、實に西洋の婦人はしだらないものゝやうに見える。けれど是れは支那人が日本の男女間の德義を誤解したのと同じやうなものであつて、西洋における婦人は、交際と云ふ事と、自己の貞操を守ると云ふ事とは別に思つて居る。自由に交際をするのは交際として交際するのであつて其の間に何ら嫌らしい考はない。男子にしても女子と交際するのを、話し相手として交るだけであつて、玩弄視して交際をするのでない。

日本の人が外國に行つて大なる失敗をする事がある知つてる人の紹介によつて若き婦人と話しをする場合非常に親切に且愉快に話をして呉れるところから、己惚の強い人は、これは自分に特殊の心持があるのだと早合點して、無禮なる事を云つて、恥辱を受けるやうな事が少くない事實のやうに聞いて居る。これらは形と、事實とをわけて見る事を知らないからの失敗である。西洋の婦人、中にも若き婦人は節操の事は重大なる事件と思つて居る。結婚すると云ふ事は一生の運命に關係することが極めて深い事と自覺して、その人の人格、境遇、將來などを綿密に考へてのちにはじめて決心をするのであつて外形は非常に貞操の觀念に乏しいやうであつても、實際は反對である。正式の結婚をしない間に男子の玩弄物となる事はないと私は信じて居ます。

▲貞操を重ずる事は日本に勝る

然るに日本は明治以來、舊來の風を一變して、男子と女子との接近する場合が多くなつたゝめに、徒にヨーロッパの風俗の外面だけを見て、内面の事實を知らないで間違を起すものが往々あるのではないかと思ふ男子と交際するのを女子の見榮のやうに考へ、男子と交際するには、自己の貞操を犧牲にしなければならないやうに考へて、今日のやうな風紀を亂るやうなものが出來のではないかと思ひます。これは一方には男

子の女子に對する心持が、西洋とはちがふからでもあるが、一方には婦人が西洋婦人の貞操についての心持を理解せざる所から出るのであらうと思ふ。いづれにしろ今日東京で行はれる風習は健全なるヨーロッパの健全なる社會には斷じてない事と思ひます。勿論ある人は西洋の婦人は結婚する前には貞操を重んずるが、結婚して了ふと考が自由になると云ふが、これらも社會のある特殊の例外の事實をつかまへて云ふのであつて、男女間の交際は日本よりは嚴重であつても寛大であると云ふやうな事はない。

我國の道德觀念が西洋に劣つて居るのは、殊に貞操であるといつていゝ、これは教育のある女子の特に注意をしなければならぬ事と思ふ。

＊　＊　＊　＊

▼蛤の吸物を吸ふ時、八百重の潮のさしては引く大海の味を想ふ。

▼百合の根の苦いのは土の味ひだ、暗い重い土の中でじつと辛抱してゐる味ひだ。

▼トマトは肉慾を刺戟すると云ふ、をかしなものも世の中にあるものかなと、こは〲食ふ、赤い皮、氣味のわるい實、酸ぱい液、肉慾を刺戟される前に、恐怖と不安に襲はれる、是も眺めて居るべきものか。

▼きくらげといふものあり、暗澹として太古の如し水のものか、陸のものか分らず、人類學者の好きさうなもので、又自分も好きさうなものだ。好きになりたいと思ふが、要するに堀出しものだから、折を待つより外はない。

▼蟹の肉は美しき毒婦の如し、殺されるかも知れないが、食べたい、後で何ともなかつた時はホッと安心する。

▼鯛は王者なれど時代に後れてゐる、階級制度の打破された時に、何時まで虚しき位を守つてゐるのであらう、新しい女などは疾くに鯛を顧みないであらう。

▼カフエーの香氣を嗅ぐ時は、フランス邊の田舍を想ふ、玉蜀を燒く匂は、海に遠い鄕土の村里をおもひ出す。（百味譜の一節、醉茗）

四つ街道

（旅のスケッチ帖より）

竹久夢二

まだ春も淺い二月の末のこと、雲の多い空は煙つたやうに閉されて、時折もれる日の光もうすら寒い日です。私は四ッ街道の停車場で人を待合してゐたことがありました。私は何げなく私のまへに腰かけてゐる若い婦人に眼をやりました。ひと目みるなり私はすぐそのおど／＼した心持を感じることが出來ました。女は袂から一封の手紙をとりだして包へ入れてそれをまた旅行袋の中へしまひました。そして紐もしつかり結むで、これで安心したやうに襟をかき合せたが、ついと立つて停車場の入口の所へ出て町の方を探すやうに見渡してゐました。誰かくる人を待つてゐるらしい。帯の間から時計を取出して停車場の時計とみくらべて、また町の方を見てゐました。町の向ふの低い岡のうへは雲がきれてうすあかりがたよりなく流れてゐる。女はまた席へもどつて、さきの包から手紙をとり出してまた懐へ仕舞ひました、包の中には小供の喜びさうな玩具が入つてゐるのが見えました。そのうちに驛夫が上りの汽車を知らせにきました女はあたふた外へ出てみますと、恰度、向ふから三つ許りの子を抱いた老女が走つてくる所でした。女は、はや涙ぐむで、手をひろげて子を迎へました。子供は人見知りをして泣きだしました、「おゝ、さう／＼こんな好いものがある」袋の中から玩具を出してみせたけれど子供は泣きやまぬ女も泣いてゐる。老女は貰ひ泣きはしながらも人目を憚かつて、待合室の隅へつれてゆきました。女はだまつて手紙を老女に手渡しました。その子につきぬ別れを惜しむ間もなく、驛夫にせかれて女はあたふたと汽車にのりました。老女は玩具の包を持つて町の方へ歸りました。どんないきさつなのか知らぬことゆゑ、それからどうしたことか私は知る由もない。

四つ街道



訪問みやげ（一）

婦人記者

澁澤男爵夫人　澁澤かね子

▲●●●●●樂しいものは　時々普請をしたりします時に、色々自分でも工夫しますのが、何より樂しみで御座います。只今の私共の居間なども、元は客間であつた爲めに、床なども三間通しでありましたが、それを居間にするといふ時に、私が工夫しまして三間の床ではあまりに單調ですから一間の置き戸棚をつけその後の壁を除いて小障子にしたので御座いますが、夏冬とも大變宜しう御座います。

大倉喜八郎氏夫人　大倉德子

▲●●●●●好きなことは　ものを丹精するのが好きです、小切の細工物などでも丹精して何か一つのものに拵へ上るのが、樂みなので御座います。つまらぬ草でも、根でも掘つて參りましては、さしておきまして、それがだん／＼大きく育つのが誠に樂みで面白いと思ひます。花も好きで御座いますが、形の大きい色の毒々しいものより、小さい淡白した花が好きで御座います。

二葉幼稚園主　野口幽香子

▲●●●●●嬉しいことは　物を研究することです、物を研究するといふことは其物に對して一種の興味を持つことであつて、未だ知らないことを知らうと勉めることであります。ですから、非常に困難を感じますが、其困難を忍んで初めて知ることが出來るのでありますから、知り得た時の嬉しさといつたら、それはもう到底門外の方には云ひ現はすことの出來ないことです。

仲小路廉氏夫人　仲小路八重子

▲●●●●●好きなものは　食べものではおみかんです。嫌ひなものはお菓子です、それからお世辭をいふことも嫌ひです。汚い顏をして居る小兒を見ても、まあおきれいなお子さんであるとか、別に美くしもない家を結構なお住居ですことなどゝいふ御世辭は大嫌で御座います。御世辭だの遠慮だの一種の虚飾だと思ひます。

▲樂しいことは●●●●●

楠山　春子

自分の部屋に居て靜かに讀書すること、かつて見聞した事柄を考へ心を錬へることなどが、一番樂みで、私に取つてこの時など滿足な時はありません。從つてまた何よりも、自分の居る家庭の平和を幸福と考へます。たとへどんなに自分が靜座して默想して樂しまうとしても、自分の身をおく家庭が不和で、陰鬱の氣に閉ざゝれて居りましたら、その心持が亂されます。つまりは家庭の平和、これが少くとも私にとりましては、一番滿足で御座います。

▲嬉しかつたのは●●●●●●

岡田八千代

近頃はじめて京都へ行つて見たことであります。さうは言つても、京都で何を見たかといはれると、私は何にも見て居りません。私は旅へ出てからの心持は何とも言へぬ程好きであるけれども出るまでと、出る時の心持と言つたら、今思つて見てもしんみりして終ふ位であります。何となくから自分の毎日居た室や、又この東京に未練が殘つて、胸が一ぱいになるやうであります。けれども一旦もう汽車へ乘つて終ふと、すつかり絶念めて行く先の事ばかりを思ふやうになります。さうして成可く東京に近い處は早く過ぎてしまひたいといつも思ふやうであります。そんなことは好いとして、京都へ行つたのは、思ひがけなかつたので、殊に嬉しかつたのであります。

▲樂しいことは●●●●●

江木　榮子

いろ〳〵ある中で、花を眺めることゝ、人に物を上げて、それをつけて居るその人を見たときであります。どんな時でも美しい花に向ひますと、とんと不愉快な感じなどは消えてしまひます。その無心に咲き匂ふ花や、可愛らしい蕾などを眺めますと、何ともいはれぬ美しさを感じます。私は何が美しいと申しても、この自然の美しさに優るものはないと思ふので御座います。ですから毎日々々どの室にもどの室にも花はたやしません。花のない時には遠くまでも、わざ〳〵溫室物を買ひにやります。食物で好きなのは蜜柑と干梅で、みかんならば一度に二十位平氣でたべます。



媒酌の經驗



母の考と娘の心とは異ふ

鐵道院參事富永睦治氏夫人　富永園子

結婚の媒酌して沁々思ひますのは、例の帶に短かし襷に長しの譬で、澤山ある縁談が、また澤山不調になるのでありますが、これは男の方では、學力があつて、容貌がよくて、兄弟が少なくて、溫和しくて、財産があつて、血統がよくて、と、十分な要求をするし、女の方では、ヤレ學士を良人にせねば恥かしいの、下女を傭はねば友人に恥かしいの、姑は嫌ひだの、なるべく獨身の者で財産のある家でなければいやだのと、双方十分な注文ばかりする結果であると思ひます。こんなことをいつて居る人にかぎつて良縁を求められなくなるのであります。初め嫁を貰ひたい、嫁にやりたいといつて居た當座は、人があれかこれかと、相談もしてくれますが、前にいつた通り長し短かしで落第させて居りますうちに、それが評判になつて、彼處は中々むづかしいからと、たれも相談相手になつてくれないのであります。

今まで私共で媒酌しましたのは、幸ひにどちらも、家庭が圓滿にをさまつて居りますから、よろこんで居りますが、かりに間違があつて、離婚沙汰でもありますと、双方へどの位ゐ氣の毒な思ひするかしれません。ですから始めに媒酌しようと思ふならば、十分に双方ともよく〳〵調べて、趣味や嗜好の點までにも、衝突のないやうにし

て媒酌せねばなりません。

よくある例ですが、娘の親が相手方の財産に絲目をかけて、本人の心の中も調べて見ず、門閥家であるといふのに惚れて、娘を無理やりと嫁がせることがありますが、こんなのに限つて、終には別れ話が持上るのであります。

男の方では、第一容貌を選みますが、この間も私共の知人でこんなことを申すのです、私も醜男だから、美人と結婚して子孫には美人でなくとも、せめて人に嫌はれない様な容貌のものを遺したい、といつて第一に綺麗な女を選んで居りますから、それぢや藝妓を連れて來たらよからうといふと、金がないからと、隨分馬鹿げた突飛なことを申して居ります。なあにあなた、顔が美しいとかいふことは、所帶の始めのうちで、一家を組織して可愛ゆい嬰兒さんの一人二人出來るやうになりますと、綺麗どころの話ではないのであります。



この間一寸きゝましたが、或る方が三越で、見合なさつたのですが、その娘さんといふのは、立派な所の令嬢で、顔といひ容姿といひ、申分のないお美しい方ですのに、たゞ手がひゞが切れないばかりに、きたなかつたのでありま

す、ところが婿になるべき男の方で申されますのに、あれ程の家庭で、下女も數人使つて居るのに、白魚のやうな指をして居さうなものに、と思つてあとできいて見ますと、下女達と一緒に臺所の用から、何から何まで働いて居られるからだといふことに感心して、結婚をされたといふことですが、これなどは寧ろ美談だと思ひます。

現代は娘さんと、お母さんとは、如何しても婿さんに對する理想が違ふのであります、娘さんは姑の無い男振りのいゝ人の處へ行きたがられる。母さんはたとへ姑があつても、男振は惡くても、資產さへある處なら嫁りたがるといふ有様であります。其結果娘さんが飽くまでも、お母さんと喧嘩をしてまでも、我を云ひ通すといふやうなのも隨分あります。

現代の女性として、舊時代のお母さんと異つた。特質の生じて來るのは、自然の理でありませう。その特質は、自己の性質、權威、價値といふやうなものを本位にして行くといふ處にあるやうです。

女がよめに行く……嫁ぐといふ字を見ましても女偏に家と書いてあります。即ち、よめにゆくといふのは、女が家へゆく事になります、昔の結婚はすべてこれでありました。現代のはどうかと申すと、昔のそれと反對に、家へ嫁ぐのではなくして、その人に嫁ぐやうになつたのであります。また男子の方から見ても同様に自己本位になつてまゐりましたから、媒酌人もこれをよく知つてかゝらねばなりますまい。

不足を辛抱するのは良緣なり

工學博士岡松參太郎氏夫人　岡松民子

私が結婚の媒酌して感じましたのは、少し不足だと思ふ位の處が丁度釣合つた緣談で、あまり滿足すぎる

やうなのは、却つて不相當な緣談と決つて居ります、ですから緣を求められるお方は、先づ自惚を去つてかからねばなりません。それからよく世間でいふことですが、釣合はぬは不緣の基と申すのは、身分や財產の關係よりも、第一番に兩家の家庭の空氣が適合して居るか、どうかを見るのが肝心であります。何處の家でも、祖先から傳來した特殊の風儀があるもので、此の風儀ばかりは、職業が如何に變化しても、何處かに必ず殘つて居りまして、それが其の家の空氣とでも申すやうに思はれます。ですから、媒酌しますにも、その處をよくのみ込みませんと、失敗することがあります。

主人は南滿鐵道の理事をして居るものですから、時時私も滿洲にまゐりますが、あちらに勤めて居られる方は、夫人のある人は少ないので、東京にお歸りになつたら連れて來てくれと、よく賴まれますので、かういふ女ならばと、大抵の當りをつけて、さて其人の平生から、家庭の有樣、學校の成績、本人の性格、技倆、容貌、習癖の事までも、綿密に綿密を重ねて調査いたしまして、大丈夫、と思つた處で話を持ち込みまして、先方で承知してくれますと、彼地へ連れて行つて結婚させますが、皆結果よく行つて居ります。

男も女もさうですが、此方にと決定してしまふまでには、それは〳〵迷つたり、氣を揉んだりするものですが、然し一旦寫眞を見て、此方をと心に決定してしまふと、却々動かないものと見えます。殊に一度でも見合をすると最後、急に情が出來るものと見えまして、たとへ豫想より惡い婿さんであらうが、又嫁さんであらうが、苦情を云はないのであります。先樣でさへ御承知ならば、妾には異存は御座いませんと、恥かしげに云ふのが多いので御座います。

それ位ですから、一旦見合をしまして、先方から跳ねつけられたとなると、非常に恥のやうに考へる人があります。

お嫁さんを世話して上げやうと思ふと、隨分馬鹿げたこともありますし、腹の立つことやら、おかしいことやら、くやしいことやら色々であります。娘を貰ひたいと相談を先方に持ち込みますと、先方の返事もいろ／＼樣々で、或る時は斯ういふ返事をなさる方もありました。

御思召は實に有り難いが、實は只今、彼女のやうなものでも、貰つてやらうと仰つて下さるお方は、凡てで十二軒御座います。何れも長し短しで。まだ何方樣へとも申さない始末で、あの樣なものをこれまで仰つて頂くのは、本人は勿論、兩親や兄弟に取つて此上もない幸福で、何れは御緣のある方へ片附くことで御座いませう、何分よろしき樣に御相談を願ひたいもので御座います。と、斷つたやうな、斷らぬ樣な、詰りは何時如何なる場合にお斷りと出ても、少しも腹の立てられぬ樣にとの用意、此れは何うして中々人を外らさぬ遣り方だと、殆んと感じ入つたのでございます。

嫁側では、男は腕さへあればなど丶口には申して居りましても、内々は男振がよくて、學校出ならば學士軍人ならば大尉以上、月給取りならば七八十圓でなければ厭だといふ權幕であります。

婿側になりますと、學習院や虎の門などは唯派手でハイカラであるからいけない、何といふてもお茶水女學校の卒業生に限るといふ人もあるし、又學習院か虎の門でなければといふ人もあります。そして餘り温和しいのも困るが、然りとてお轉婆でも困る、お轉婆に過ぎざる範圍で快活な人が欲しい、文字を巧に書くのと語學の素養のある女でなければ困る、それと兩親は舊思想の人だから、それと衝突するやうな女は眞平だ家庭の平和を保つ可く、是非此の兩思想を巧に調和するだけの才能のある女が欲しいなど丶、隨分勝手な注文をして居る人が多くあります。

見合の寫眞

江木定男氏夫人　江木ませ子

媒酌人が一番困るのは婿の性質よりも、嫁になる人の性質の分り難いことです。唯その家庭の樣子と、學友位から聞いただけで見當をつけねばならぬことです。ちよいと會つて見たゞけでは、女の氣質は消極的でありますから、よく機微を捉へることはむづかしうございます。

それともう一つは、先の女親の姑となる人の氣質を知ることで、母親



として、主婦としては、評判の好い人でも、嫁に對する姑としては、どうも手のつけられぬことがよくあります。

先づ媒酌します時に、第一は双方寫眞の見合で御座いますが、實物がよくても寫眞の惡い方と、實物が惡くても寫眞のよい方とありまして、實物の見合は一番間違はないのでありますが、初めから實物の見合する人は少ないので、大抵は寫眞見

合ふ土臺となつて、話が進行してから見合をするのであります。それで私は寫眞のことについて、宅の技師たちが申して居ることを聞きますと、御存じの通り宅の店は新橋にありますので、場所柄婦人が十人お撮しにいらつしやるとすれば、藝妓衆が五人といふ割合で御座います、それで私も時々行つて見て居りますと、藝妓は藝妓で、小粋なところに何ともいはれない美がありますし、素人は素人で、何處から見ても上品で、藝妓に見ることの出來ない美を見出すことが出來ます丁度藝妓の美は、人工的な日比谷公園とすれば、素人の美は、自然のまゝに飾り氣がない芝公園のやうなので、それ〴〵何とも云はれない美點があります。素人の方は、藝妓を見て、綺麗だから、見合の寫眞をあんなに撮つて、と、急に小粋にして見たりなさいますと却つてそれが粋とも上品ともつかないで、見惡いものになるので御座います。

　先日土橋から神保町まで電車に乗つてきましたが、見るともなく電車へ乗込む婦人方の姿勢が目につきましたが、咄嗟の場合ですから、盛裝の婦人を我勝ちに車中へ這入つて不體裁に腰かけられる、すると一人の十七八の山の手の上品な娘さんが、少し體を斜にして電車と並行の姿勢を取つて、ひらりと腰かけられましたが、その落付いた態度は、何とも云はれない美しい姿勢でありました。

　技師たちの苦心しますのは、撮る人の美がどこにあるかといふことで、この方ならば側面、この方ならば正面、この方は立つところに、又腰かける處にあるかといふことを認めてから撮るのであります。外國で名を忘れましたが、有名な女寫眞師で、この人は一日に三人しかお客を入れません。それで一人の客を撮りますには四五時間もかゝつて撮るのであります、さうしてそのながい間に、いろ〳〵話をするとか、物をたべるとか、立つとか、腰かけるとか、色々もして居りまして、その内この人の美點はこゝであると思つた時に始めて撮るのであります。如何なる人でも、人の美點を見るといふことは、一時間や二時間では出來ないものであると技師たちが申して居ります。

好評雜誌 講談世界

一冊金貳拾錢
半年分一圓廿錢
一年分二圓卅錢



發行元 東京神田旅籠町一 文光堂 賣捌 全國各地書籍雜誌店にあり

—(振替口座東京一九五五)(電話下谷四八一九)—

婦人年中行事　四月

▲四月の魚▼

桜魚、めばる、ひらめ、櫻鯛、鰆、さくら蝦、車ゑび、さより、鯵、しやこ、飛魚、あかゑ、あなご。

▲四月の野菜▼

筍、蕗、わらび、自然薯、蓴菜、さや豌豆、杉菜、茗荷、野芹、獨活。

▲四月の花▼

櫻、山吹、木蓮、小田巻、李花、梨花、菫、櫻草、蓮華草、石楠花、藤、辛夷、つばな、金鳳花、金蓮花、チユーリツプ、フリージア、アネモネ。

▲櫻の名所▼

吉野（大和）、嵐山（京都）、上野、向島、江戸川、飛鳥山、荒川堤、熊谷土手、小金井（以上東京附近）櫻の宮（大阪）

▲汐干狩▼

品川、羽田（東京）、堺ノ濱（大阪）加多ノ浦（紀伊）其他。

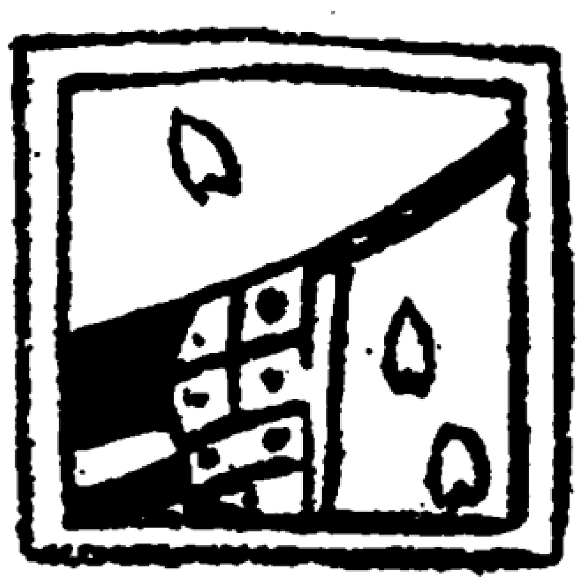
▲四月の暦▼

一日、新學期。
三日、神武天皇祭
八日、灌佛會。
九日、汐干（舊三月三日）
十七日、東照宮大祭。和歌祭。
卯の日、住吉卯の祭。

七曜表

日		6	13	20	27
月		7	14	21	28
火	1	8	15	22	29
水	2	9	16	23	30
木	3	10	17	24	
金	4	11	18	25	
土	5	12	19	26	

花にきて
うつくしくなる
心かな
たつ



婦人年中行事

四月

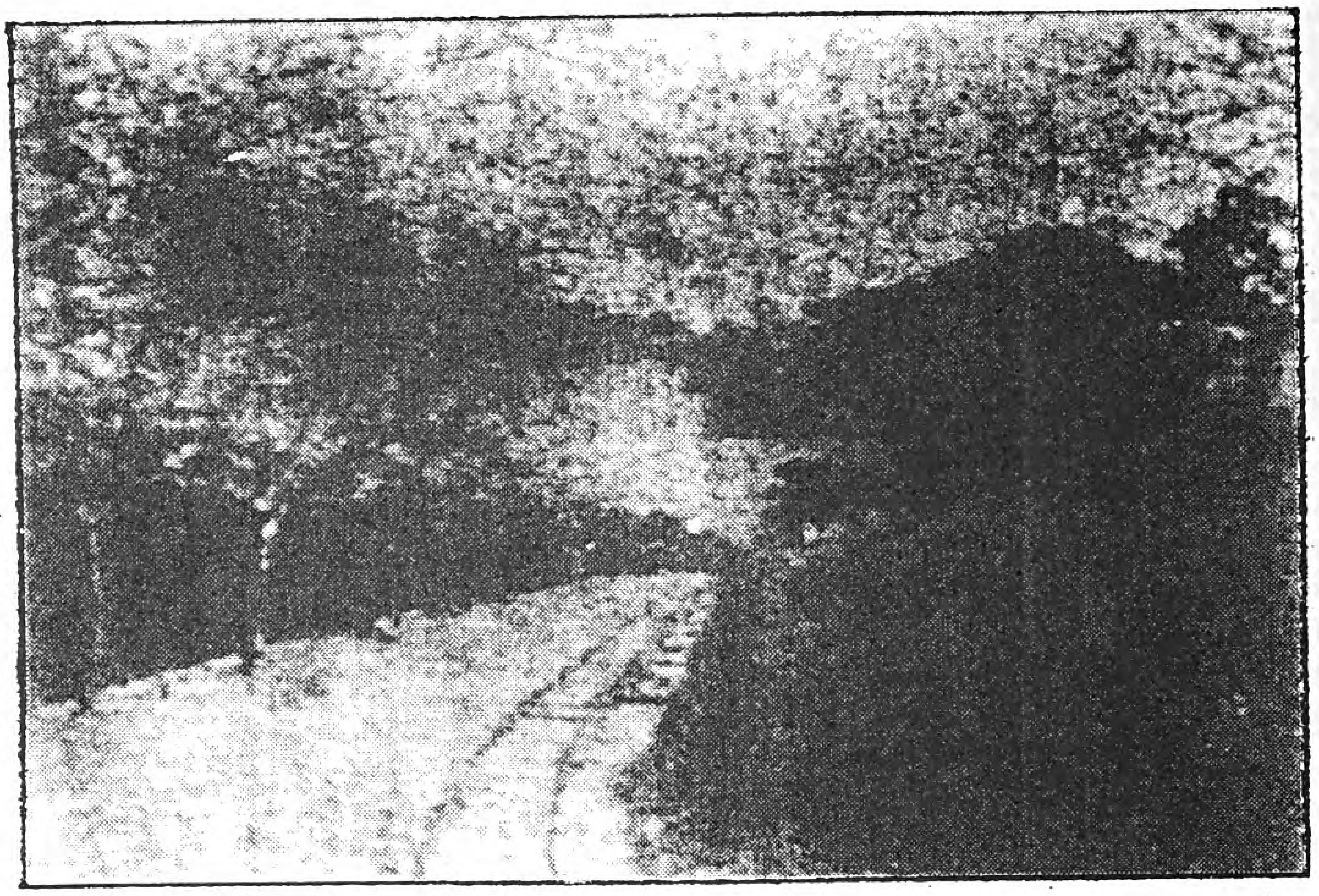
▲花咲き蝶舞ふ。
▲お花見に出かけること。
▲手輕にして遊びに出でよ。
▲學校用品は早く整へて置け
▲櫻は咲いた時に見よ。
▲窓を開け放て。
▲汗をかゝぬやうにせよ。
▲冷水摩擦を初めよ。
▲夕方、水を撒け。
▲開帳多し。
▲展覽會多し。
▲起つ兒は庭に下せ。
▲夜を更すな。
▲旅人に親切なれ。
▲なまけ癖をつけるな。
▲神經衰弱を豫防せよ。



わきもこがひたひ髪結ふ元結の濃紫なるふぢなみの花　長樹
春の野の菫つみにと來し吾ぞ野をなつかしみ一夜寢にけ　赤人
心あらむ人にみせばや津の國の難波あたりの春のけしきを　能因

婦人年中行事

さくらはいつまでか盛りに候はむ、春はいつまでか美はしく候はむ、後とも云はず今日の春日和に出かけばやと存じ候、お約束の通り速達にてお誘ひ申上候





春雨や屋根の小草に花咲きぬ　嵐蘭
蝶の來て一夜寝にけり窓の際　小波
春風や袖より落つる舞扇　湖纈
鶯に水汲こぼすあしたかな　榛舌
廣庭に一本植ゑし櫻かな　笑草
去年の巣の土ぬりなほす燕哉　俊似
町中へしたるゝ宿の柳かな　利牛

婦人年中行事



今月の運勢

▲三碧木星の人(十六、廿五、卅四歳)。本命中宮なれば萬事謹しむべし、不平の事起る月、御婦人は新しき事起る月なり、迷ひ進むべからず、現在を保守せられよ。暗劍東大凶。

▲二黒土星の人(十五、廿四、卅三歳)。不如意勝の月、住居の苦勞、盜難、或は病難、御注意、萬事障害多し、諸事自動的に進む事損失を招く、目上の言に從ふべし。吉方北未申、暗劍東大凶。

▲一白水星の人(十四、廿三、卅二歳)。水生木の相生故盛運なり、爲す事凡て調ひ、喜び事有。諸事自已の意見通り進んで利益あるべし。吉方未申、暗劍東大凶。

▲九紫火星の人(廿二、卅一、四十歳)。幸運の月、萬事進んで吉、相談事御婦人緣談來る纏る樣なるべし、吉方西北、暗劍東凶。

▲八白土星の人(廿一、三十、卅九歳)。凶月なり、無益の入用多く、迷ひ易く、故に時節を待つべし、親しき中を絶てる、様な事起る月なり。吉方未申、暗劍東大凶。

▲七赤金星の人(廿、廿九、卅八歳)。凶月なり、火難盜難の恐れあり、御婦人色情よりの苦勞起る月、萬事進む事凶、吉月を待つて事を成すべし。吉方西辰巳、暗劍東大凶。

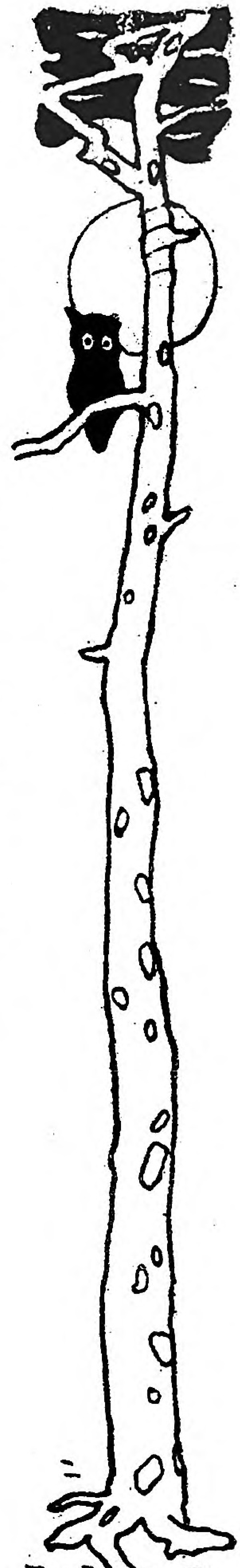
▲六白金星の人(十九、廿八、卅七歳)。面白からぬ月、萬事不平を謹しむべし。吉方南北、暗劍東大凶。

▲五黄土星の人(十八、廿七、卅六歳)。散財を生じ易き月、萬事目に見て手に取り難き結果を生ずる事多し、輕卒を謹しむべし。吉方北未申、暗劍東大凶。

▲四緑木星の人(十七、廿六、卅五歳)。比和にて願望の成就する月なり、相互にたすけあふ事などある月、御婦人緣談旅行等起る進んで吉。吉方未申、暗劍東大凶。

歷史上の四月

▲一日、明治天皇東京に移らせ給ふ(明治二年)▲二日、ロブデン死す(一六六五年)▲三日、憲法十七條を定む(推古帝十二年)▲四日沖繩縣を置く(明治十二年)▲五日、婦人の散髮を禁ず(明治五年)▲六日、蜀山人死す(明治六年)▲七日、板垣伯岐阜に於て刺さる(明治十五年)▲八日、釋迦生る(神武紀元三十七年)▲九日、南北戰爭終る、一八六五年)▲十日、奠都三十年祭を行ふ(明治卅一年)▲十一日、政治家カンニング生る(一七七〇年)▲十二日、武田信玄死す(天正元年)▲十三日、マカロフ提督戰死(一九〇四年)▲十四日、リンコルン殺さる(一八六五年)▲十五日、日清平和條約成る(明治廿八年 ▲十六日、東海道線開通す(明治廿二年)▲十七日、德川家康死す(元和二年)▲十八日、孔子死す(周敬王四十一年)▲十九日、ヂスレリー死す(一八八一年)▲廿日、佛人國女死す(享保十一年)▲廿一日、天一坊誅せらる(享保十四年)▲廿二日米西開戰(一八九八年)▲廿三日、井伊直弼大老となる(安政五年)▲廿四日、德川家光死す(慶安四年)▲廿五日、僧侶の肉食妻帶を許す(明治五年)▲廿六日、クロムウエル生る(一五九九年)▲廿七日、大本營を京都に移す(明治二十八年)▲廿八日、樞密院を置く(明治二十一年)▲廿九日、足利尊氏死す(延文三年)▲三十日、ワシントン大統領となる(一七八九年)



皮膚と毛髮と乳房及び臀部（つゞき）

澤田順次郎

◎乳房の發生

乳房の發生は、頗る早期に於て初まるもので、通常胚胎して三ヶ月頃になればあらはれます。初めは皮脂腺の集まつた樣な狀態ですけれども、後にそれが乳腺になります。乳腺では各一條〻輸乳官があつて、それが集束して乳頭に開けるのです。併しそれは發育した後のことで、最初は極めて微少です。

十二三歲頃までは、女の乳房も男のと略同形ですが漸々成長して、發情期の頃に至れば、膨脹して半球形となります。然るに男は發情期になつても、發育することなく、終生同じ形を保つて居ます。男の乳房のことに就ては、後にお話をする意です。

◎乳房の形

乳房の位置は、男女に依つて少しく異なり、婦人の乳房は前胸壁の第三肋骨と、第六肋骨との間ですが、男の乳房は恰度第四肋骨に對して居ります。斯く女の乳房の廣く場所を占めて居るのは、乳房が大きい爲なことは勿論です。それから其の形は　年齢に依つて一

樣でありませんが、大別して圓盤形、半球形、圓錐形、鐘形及び瓢形の五種と爲すことが出來ます。圓盤形は平盤の樣な形で、隆起の度が弱い。半球形は椀の樣な形で、乳房の中最も美なものです。圓錐形は先きの尖つたもので、餘り見えの好いものでありません。鐘形は鐘の如く、やゝ下垂したもので、其の最も長く垂れたものは、瓢形です。要するに乳房の形は、體質、營養、習慣、職業、被服物、授乳の如何其の他の事情に依つて支配さるゝもので、野蠻人の乳房には種々珍妙なのがあります。

然し何れの形にしても、乳房を區別すれば、乳體と乳嘴との二部となります。乳體は乳腺と稱して、乳汁を分泌する數多の腺を包める所で、其の大小は乳腺の發達如何に關係します。乳腺は授乳すればする程、發達します。それで分娩頻々としてよく授乳する婦人の乳房は、肥大にして、垂下するに至ること、人の知る如くです。それから又種々の物理的刺戟を加へるも其の發育を促す原因となります。例へば摩擦、溫度、電氣等の如き是れです。これは摩擦が血液の循環を能くするからです。

乳嘴は乳體の中央に存する小突起で、其の形は又、年齡、習慣等で異なりますけれども、大體疣の如くで淡紅色を呈し、數多の乳暈があります。乳暈とは腺結節のことで、其の乳體に接續する所を乳頭と申します。

◎何んな乳房が美しいか

乳房は婦人美の一要素なることは、前號に述べましたが、何んなのは美しいかといふに、西洋ではヴエナス女神の像に於て見るが如く、半圓形のが、最美としてあります。これは西洋人ばかりでなく、日本人も同樣と思ひます。圓錐形や鐘形のものは、美といふわけに行きませんが、實際は半球形が尠なくて、此の種のものが多くあります。瓢狀と來たら色消しです。

◎乳房の變化

乳房は一生の間に、種々に變化するもので、恰度顏

の變化するのと同じです。これは人の餘り氣の着かぬことですが、此の變化は非常に込み入つて婦人の生活と重大な關係を以て居ます。言ひ換へれば乳房は婦人の第二の面貌で、啻に生殖機能と關するのみならず、其の性格とも關係して居ます。次ぎに之れを述べましやう。

先づ第一の關係は姙娠です。姙娠すると血管が太くなり、乳腺は膨脹します。乳暈も隆起して、乳嘴は暗黒色となります。其の變化は姙娠の進むに從つて著しく、臨月近くなれば少しく乳汁を分泌する樣になります。これは初乳と稱するもので、殆んど水の如く稀薄です。分娩後も二三日は初乳で、少量ですが三四日を經てば、普通の乳汁となつて、多量になります。

それから授乳を始めると、乳嘴は吸吮せらるゝので、少しく楕圓となり、乳暈の隆起大となり、随つて乳體は肥大します。頻々分娩授乳すると乳嘴は愈々隆起し、乳





體は乳腺の膨脹するが爲に漸々に垂下します。此の垂下するのは、乳體の重さもありますが、一つは母親が授乳を容易ならしむる爲に、乳房を引き延ばす習慣も關係があります。斯くして乳房は漸々に垂下すると、謂ゆる櫓狀となりますが、ホッテントットの婦人ばかりでなく、日本婦人の中にも、隨分背に負つてる子に肩を越えて乳を飮　るものがあります。

前に言へる如　、乳房の形は、年齢、體質、習慣、職業、衣服等種々の事情に關係するのですから授乳すると、必ず櫓狀になるに決つて居ません。授乳が終ると、一般に乳腺は弛み、皮膚に皺襞を生して、醜くなりますが、時としては引き締つて、授乳前の形に復する者があります。然な樣なのは、勿論體質にも因りますが、一つは乳房に對する保護と注意とに關します。例へば英國の婦人は日本人の樣に、大抵其の子を母乳で育てますが、授乳後は引き締つてもとの美しい形を失ひません。然るに佛國の婦人は、小供は多く牛乳で育てますので、母は授乳しませんが、何ういふ理か、初產に於いて、乳腺は著しく弛んで、下垂します。これは人種的徵候とでも謂ひましやう。

◎乳房と生殖

兎も角も、乳房と生殖との關係は大なるもので、妊娠しない者の乳房は、發育しません。然し妊娠しなくとも、結婚すれば變化は著しく、その特徵をあらはします。それですから乳房を見れば既婚者であるか、未婚者であるか、又は妊娠したことがあるか無いか、婦人一切の生理的變化が判明ります。又、月經とも關係があつて、月經時には、乳腺は多少腫脹して參ります。

以上の事實を概括すると婦人の乳房は、次ぎの場合に於て變化することが知られます。

一、發情期　二、月經
三、結婚　四、妊娠
五、分娩　六、授乳
七、閉經

一から六までは乳腺は肥大し、七に至つて弛緩しま

すが、六までの間に於ても、各時期に由つて多少の差があります。

◎乳の分泌と斷乳

難かしいことはこれ位にして、も一つ乳汁のことを申しましやう。初乳は姙娠中から分泌するが、成乳（普通の乳）は分娩後三四日から分泌することは、前に述べた如くです。成乳の分泌期は卽ち授乳期に相當するもので、其の時期は矢張人種、營養、體質、習慣、職業等に依つて一樣でありませんが、普通は一ヶ年間で、爾後四ヶ年間は分泌します。併し人に依つては二三年で止まるものもあれば、時として七年乃至十五年間も分泌する者があります。



エスキモー人の如き是れです。

乳量の多い人と、少ない人とあるのは遠因として遺傳關係もありますが、近因は營養と習慣とです。若し營養が不良であつたり、習慣が惡かつたりすると、生來乳量の多い人も、漸々減少して仕舞には全く止る樣になることがあります乳の出なくなることを俗に乳が上ると申しますが、初產で一度乳が上ると、多くは習慣となります。又遺傳で斷乳の人には、大酒家の子孫が多ゝあります。これは酒が子孫の乳を斷つのです。

それから習慣で斷乳するのは、授乳期に廢乳するの

が原因となります。獨逸、佛蘭西等に斷乳の婦人の多いのは、授乳を廢して、牛乳でその子を育てるからです。我が國でも昔の大名が子を生むと、直ぐ乳母の手に渡して、自分で授乳することをしない爲に、斷乳するのが多くあります。それであるから授乳を廢するのは、大變に惡くあります。乳母を雇ふのは、母に惡疾があるか、虛弱であるか、特別の事情のあるものに限り、虛榮の爲に授乳を廢するのは、天理に背きます。

これに反して乳汁の分泌の增加するのは、食物と外部の刺戟とで、其の方法宜しきを得れば、乳汁がよく出て來ます。肉類では魚類が一番効驗があります(鯛、鯉、鮒の類)。次ぎは牡蠣の類、鳥肉、獸肉等で、抱水炭素も補助になります。刺戟では摩擦、溫浴及び電氣等で、嬰兒の死亡したる場合は、他の嬰兒に授乳させることが必要です。

◎副乳房

時として乳房の外に、小さい乳房の存することがあります。

これは學術上副乳房と稱するもので、普通乳房の上部又は下部にあります。これは間歇遺傳の理に因るもので、人間の祖先が、獸類であつた證據の一つとなります。婦人ばかりでなく、男にも副乳房を有するものがあつて、或る外國の男に、胸部に一對、腹部に二對これに普通の乳房を加へて、都合四對の乳房を有する者がありました。

◎男子授乳

男の乳房は微小で、女のと比較になりませんが、併しそれは大小の差だけで、構造は女の乳房と等しく乳腺、輸乳管共に具つてあります。それで男にも肥大なる乳房を有して、盛んに乳汁を分泌するものがあります。ワイデルシヤイムといふ學者の示した例に依りますと、或る勞働者が嬰兒を遺したる妻を失つて當惑したが、その啼く兒をすかす爲に、自分の乳房を吸はせて見たら、飢ゑた嬰兒は、スパ〱と吸つた。斯くの

如くすること屢々なる中に、其の乳房は著しく肥大して、不思議にも、乳が出るやうになつた。勿怪の倖ひと、その男はこれで以て、其の兒を育てたといふ。

恁ういふ類の人は南亞米利加に多く、歐洲其の他にも乏しくありません。我が國にも稀れにありますが、偶然乳房の吸吮から、乳腺の發育を促したもの丶外に、生來發育せる乳房を有して、日々多量の乳汁を分泌せるものもあります。

人間ばかりでなく山羊、綿羊などにも、男性で乳を分泌するものがよくあります。特に山羊の牡を去勢すると、乳房が著しく發達して、優にその兒を哺乳することが出來ます。

併し男性の乳は、女性の乳と、其の成分が違ひはせぬかと、疑ふ人があるかも知れませんが、顯微鏡的及



び化學的檢査の上で、男の乳は女の乳と差異はありません。それで男の乳で立派に嬰兒を育てることが出來る譯です。實際にさういふ例があります。

右の事實に就て、科學者の說は面白い。たとへ異例にせよ、ある事實は、無意味のものでなく、必ず以前にあつた事實の再現です。副乳房から人類の祖先の一端が窺はれると等しく、男性授乳から、人はもと男女兩性で、共に子を哺育したものであつたことが想像されます。勿論それは原始的時代ですが、兩性の分業が著しくなるに從ひ、男の授乳は生存競爭の上に不利益となりて、之れを廢する樣になれる結果、全く萎縮したのでしやう。然るに一方女性の方は其の性質の上に於て、哺育に最も適當することから專らそれに從事し、愈々發達して今日の樣になつたのです。それで男子の乳房は祖先の遺物で、後には全く消滅するかも知れません。（つゞく）

女子文壇四月號

元祿時代

男涙記



上は正保より、下は寶・曆頃まで、元祿の前後凡そ百年間は、德川時代の文化旺盛を極め、殊に當時の首府たる江戸人士の興味的生活の多趣多樣であつたことは云ふまでもない、就中花見の如きは當時の風俗中にも最も華美な行事の一つであつた。

花見の場所は然う澤山はなかつた、先づ遊覽地としては第一が上野東叡山で、向島、御殿山、飛鳥山等が主なものであつた。以上花見の場所は少いが、上下貴賤共同和樂の意味で、一軒毎に一度づゝ『お花見』は行はれた。大商店になると主人を始め大小男女の雇人より出入のもの、又は近所の人達を誘ひ集めて、一團數十人になる。

お花見と云ふと其前後は家内中の大騒ぎで、小僧や娘さんはてる〳〵坊を造へてお天氣を祈る。番頭は髪屋に走る。中僧はおかみさんの長襦袢を借りる。女達は云ふ迄もなくお化粧に忙しいが。然しそれよりも、もつと女の忙しいのはお辨當を作るのである。御馳走は今とさまで變りはないが、一寸言つて見ると、お重の一番下には握ずし、稻荷ずし鐵砲もある。別に重にはお結びも、五目もある。次に魚の切身、八頭、烏賊、椎茸、竹輪のお煮物や旨煮。次に竹の子や慈姑の黄色に配して、青いものでは小松菜の浸物、少し上等になると栗の金團蒲鉾、玉子燒、別に茹玉子、鰑。酒は云ふ迄もない又小供等の爲に櫻餅や花見煎餅の用意もして行く。

さて當日になると、上下男女一同に櫻の花を型染にした美しい手拭が行渡る。今何々商店觀櫻會と云ふ旗の下に胸に赤や白のリボンを挿すのと同じ樣に、女は又一樣に櫻の花挿頭をつける。そしてぞろ〳〵家を出かけるのだ。氣早の若者は二三杯を過ごして向鉢卷で景氣をつけ、片肌脱いでおかみさんに借りた赤い縮緬の長襦袢を見

お花見

女浪 畫



元祿時代のお花見

せびらかす。下駄を履く人は少い。娘達は今なら空氣草履といふ處を赤い鼻緒の重草履など履く。美しい日傘をさす女もあつたらしい着物は正月に作らずに殊更花見小袖と云つて花見に着る爲に特に仕立たものだ。頗る華美であつた。或る書に「本町通り町を始め有徳なるも左もなきも、町方にて女房娘正月の小袖と云ふは仕立てず、花見小袖とて成程手を籠め結構に伊達なる物數寄に仕立てたるを著て出づる也。花よりは見事也」とあり。以て其美しさが想像される。

さて目的地に着くと、徳川の初め頃には幕を引いたものだが、此頃では重箱の紐を解いて枝から枝へ引き渡し、男は羽織、女は小袖を脱いで紐にかけて幕のかはりにし、内には毛氈や花筵を敷いて其上で重箱を開いた、彼地でも此地でも花の下に美しい小袖幕が引かれる、温い春風が吹いて幕が動くたび花がひら〳〵と散りかゝる。中では美しい女が踊る、男が唄ふ。唄ふものとしては當時流行した籬節、道念節、或は投節、一節切の小唄から次節などであつたらしい、遂には婆さん迄が浮かれ出して若い時流行した芝垣節などを唄ひ出すと云ふ騒ぎ、そんな花見が、少い時でも二百組、花の盛りには三百組位もあつた。娘や小供が喰べものにあきた頃は「鬼ごつこ」「目かくし」「子捕ろ」などが始まる。皆美しい華やかな著物の袖や裾を飜して駈歩き、親父も出る。醉客が混ぜつ返す。落花狼籍の極を盡す。之を又見物する人がある。上野飛鳥山御殿山は櫻に醉ひ歌につかれ遊びに亂れた人ばかりが埋まるのだ。こんな歡樂な境地は明治の今日では考へられない。花の頃は午後から曇るならひで、花盛りの夕暮には能く春雨がしと〳〵降り出すものだ、然し伊達を主とした江戸の男女は、傘もさゝずに美しい初衣――花見小袖――を雨に濡らして平氣で歸る。是れが又、一種の誇であつた。

西洋音樂の稽古

東京音樂學校教授　神戸絢子

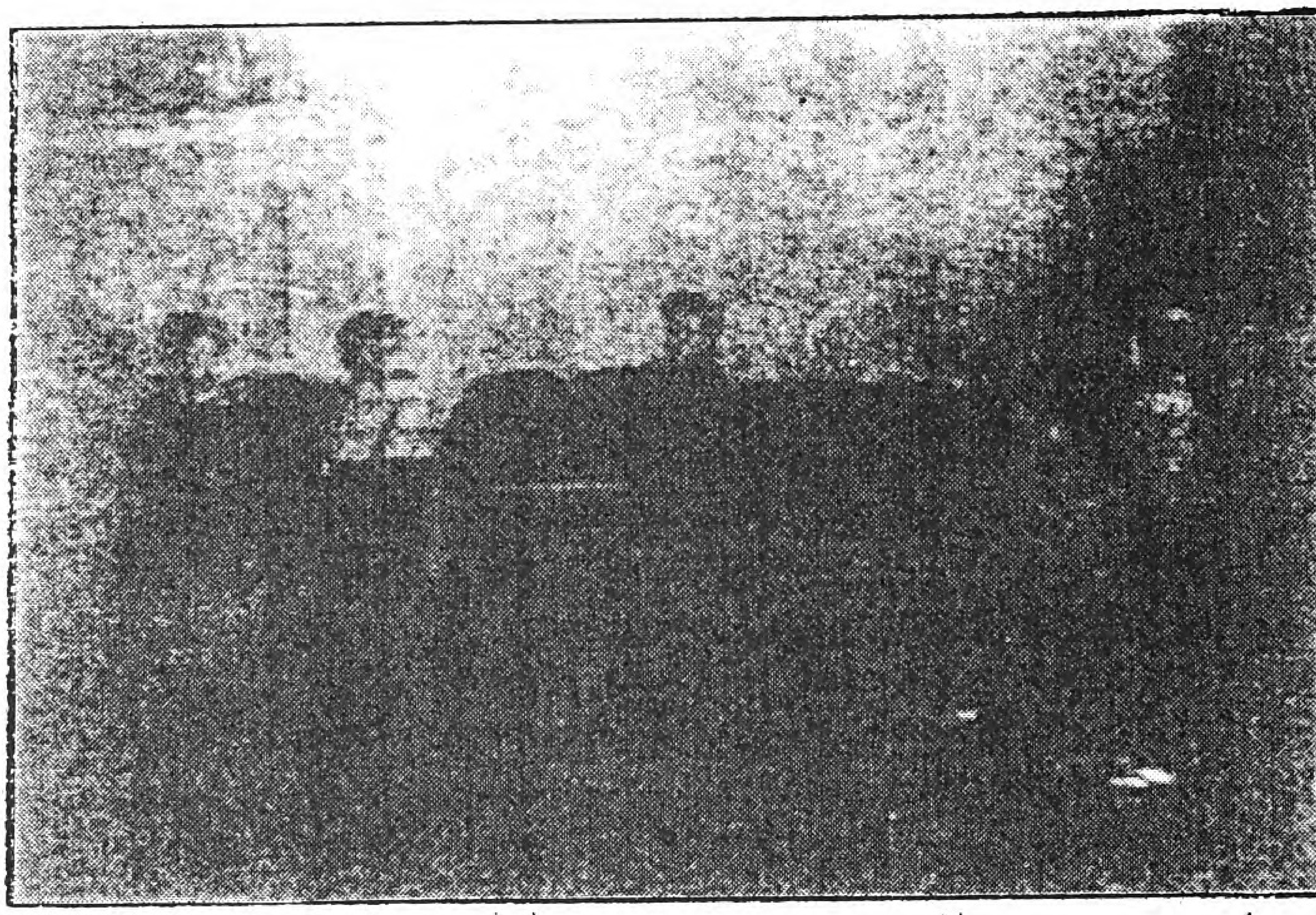
巴里から歸つて來ましてから足掛け六年になりますが、歸朝しましてから、大變洋樂は進歩して來ました。私が洋行した時分には、それは微々たるもので、ある一部の人に限つて居たやうに思はれました、所が今では若い方は何の方もなさると言ふ樣で大部盛になりました、と言ふのも一方では演奏會は屢々ありまして、聞く機會が殖えて來ましたからだらうと思ひます、申すまでもなく音樂は出來るだけ澤山聞かなくては判りません、が少し批評でも言はうとなるには何うしても自分で稽古して見なければなりません、さて聞いて居ると一ヶ年か二ヶ年稽古して試れば出來さうにお思ひになりますが、なか／＼一ヶ年や二ヶ年では出來るものでは御座いません、音樂ばかりは天性があると思ひます、少し稽古して見事に上達なさる方がありますが、さう言ふ方は全く先天的なので御座います、私などは日に何う致しても六時間は稽古致します、一日でも稽古致しませぬといけないやうです。

私はピアノを稽古致し出したのは八九歳の頃、三崎町の高等英佛和女學校へ入りましてからのことで、その頃はピアノと言つては他にはなかつたやうに思はれます、そしてピアノのキイに手が觸れる前までは三味線を稽古致して居りました。最も碌に三味線も持てず疊の上に置いて彈きました程で、一體に音樂は子供の時から好きでして、周圍の人達が勵した所爲だらうと思ひます。音樂學校を卒業しましたのは十八の時で、最う十四五年になります、ですからピアノのキイに手

を觸れ出してから約二十年にはなります。

巴里ですか、そりや盛で毎晩のやうに會がありますして、彼方では切符を無代價で配付しまして、皆に聞いて貰ふので御座います、名手は澤山あります、十二三歳で以て名人になつて居る人も御座います。彼方では一般に音樂思想があつて、大抵の人は音樂に對して相當の趣味を持つて居るのは、日本の三味線が一般に普及して居るのと同じで御座います、十二三歳の少年や少女が名手だなどと申しますと、少し變に聞えますが、彼方では幼い時から外の事は捨てゝも、夢中になつて稽古しますし、周圍の人達も勵しますから自然に上達するので御座います。

本當に稽古なさらうとするには何うしても七八歳の頃から稽古しなくては十分に發達しません、最う十七八歳にもなりますと指の骨が硬くなりますから、思ふやうに指が動きません、ですから本當に稽古なさらうとする方は、七八歳の頃から初めなくてはなりますまいと思ひます。



ヴイオリンの合奏

今では重に中流から上流へかけて行はれて居る位で、迚も一般の人の耳に入ると言ふ譯には參りますまいと思ひます、然し年一年に盛になつて行くのは事實です。何うも婦人は結婚なさると種々な用事が殖えますから、折角稽古したのを捨てゝお了ひになりますが、一方から考へると誠に惜い事で、今一息と思ふ方が一日でも二日でも稽古を捨てゝお了ひになるのはその方のためにも殘念な事だらうと思ひます、本當に

稽古なさらうとするには樂み所ではありませんが、短い時日でも根氣よく稽古なされば、多少なりとも上達なさるし、一家の慰みにも何の位よいか判りません。ある西洋人は日本の音樂、三味線とか琴とかは陰氣だと申されましたが、或はさうかも知れません、日本の音樂は一體に音が單調で變化が少く從つて面白味が音樂そのものゝにありません、が西洋のには變化があつて、暢氣で面白味がありますから從つて日本の音樂に對して、斯う言ふのだらうと思ひます。

私は一般の方が最つと洋樂に趣味を持つやうになつて頂き度いと思ひます、それには御自身で稽古して頂き度い、前にも申しました通りに、御自身で稽古して見なくては本當に了解する事は出來ないだらうと思ひます、よく演奏會で拍子なさいますが、ある一部の人より以外にはよく判らないだらうかと考へます。たゞ手の働きが早いとか何とか言ふので巧いとお思ひになるやうですが、それは間違で、名があるからと云つて巧く出來ると言ふものではなく、名の出ない方に巧く彈く方がその時の調子で澤山ありますが、斯う言ふ方のは判らずに了ふやうでございます、これは一般の人の頭腦に音樂思想がないからで、ありさへすれば能く判るだらうと思ひます。

私の入りました學校は、巴里でもたつた一つの學校で入學するには隨分難しいので御座います、その學校へ入れば名譽になる位であつて、何百人の中から三人か四人、椅子の空いて居るだけしか入學を許してはくれません、勿論月謝は取りませず政府で補助致して居るので御座います。月謝を取る學校なら幾何でもあるので御座います。

前に指と申しましたが、指の發達の惡い方はピアノを巧く彈く事は難儀だらうと思ひます、指の發達が惡いといゝ適當な音が出ません、ピアノはたゞ指の働き一つキイに觸れやうによつていゝ音と惡い音が出るので御座いますから、ピアノ彈の指は普通の方よりも發達して居り、又大切にしなくてはならないので御座います、十本の指の働きで樣々な音が出るので御座いますから餘程指の働きがよくなければなりませぬ。



若き女の友情

女子學院講師　三谷民子

若い女學生の間のお友達は矢張女同志の交りが主で男の方とお話しをしたり、手紙の交換をするとか云ふ事は、直ぐ世間から惡く解釋をせられます。今の日本の狀態では、友情は男は男、女は女とするのが普通の樣であります。男女の交際については別に意見がありますが、また他日のお話といたします。

女學生の間の友情は、眞に溫かい、いつまでも賴みになるものだと、私は自分の經驗から信じて居ります。而して私の持つて居る友達は皆、優しく、眞情からの交はりを長くつゞけて居ります。友情には大切なる素質となるものがあります。私は特に、愛の中に尊敬をもつてゐなければならないものだと思ひます。

御承知の通り私はクリスチヤンでありますから、お友達も矢張りクリスチヤンの方が多うございます。クリスチヤンは自然にクリスチヤンのお友達が出來るやうに、女學生の中には、同じ先生が好きであると云ふ事から親しくなる人があり、同じ學科が好きであると云つてお友達になる人があり、時には着物の縞柄が同じであつたから、リボンの模樣が同じであつたからと云ふ些細な譯からでも、隨分友達になる事があるのであります。

然し一旦友と交はるやうになつて、お互にお友達の何も彼もを美化し過ぎて、却つて長く續かない事があります。いつも變らぬ深切と同情とで、女同志の交りをつゞけますには、お互の人間が有りの儘を見るやうにして交る事が肝心であります。

西洋の諺に「愛は罪をおほふ」と云ふ事があります。愛は罪を掩ひますが罪をなくなすものではない。罪がなくなると取ると失望をいたします。いくら親しく交はつて居ても、互に何も彼も美化し過ぎて居りますと人間である以上は矢張過失がありますから、こんな筈ではなかつたと失望する事があります。一番長くつゞくには、どうしても愛の中に尊敬を保ち、互にゆるしあふやうにし、有りの儘の自分を心から解し合つてゆく必要があります。

今一つは、友情を結ぶ動機が立派でなければならないと思ひます。

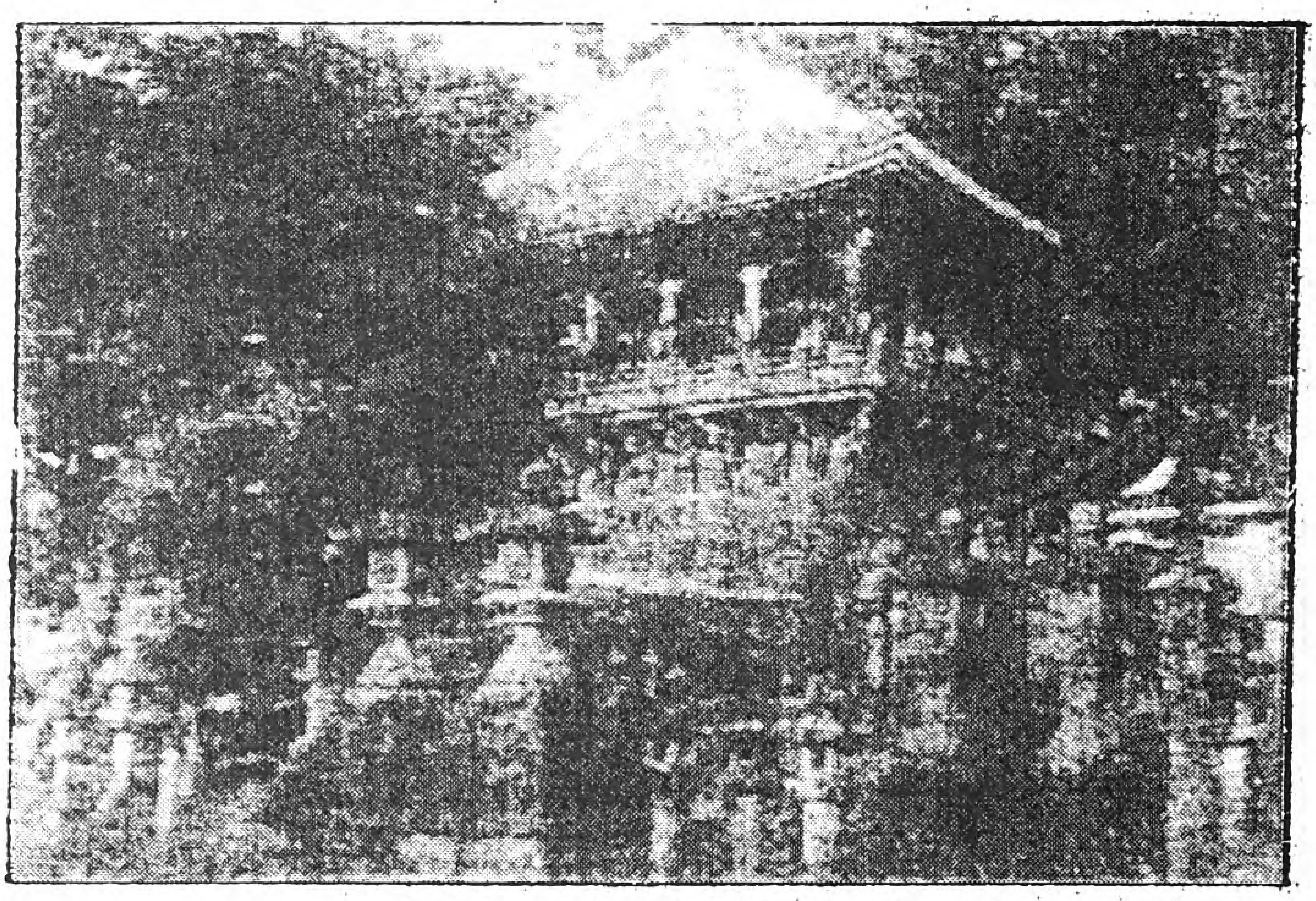
それを簡單に説明をしますと、車輪の矢が、車輪の軸に近ければ近い程、矢と、矢との距離も亦近くなります。車輪の軸に遠ければ遠い程、矢と矢との距離も亦遠くなります。此の車輪の軸は、友情の立派な動機に喩へる事が出來ます。交りの結ばれた動機が立派であれば立派なだけ長く續きます。

人々は各自、自分と友達との交はりが學問からであるか、お金からであるか、それとも其の人の品格からであるかと云ふ事をよく思ひ返さぬと飛んでもない失望をするやうになります。

私が英國に留學中に一つの美しい實例がありました。私の入學つて居ました大學に立派なお孃樣と、苦學生の方と大層仲よくして居りました。苦學生の方は學課の濟んだ後で羊飼をして、其の給金を學資にあてて居りました。二人とも二十歳そこ／＼の、勝り劣りのない秀才でありまして、よく一緒に文を作つたり、散歩をしたり、立派なお友情でありました。其の中に金持の娘さんが、ある學期の成績が秀れて佳つたのでお父さんお母さんは大相お喜びになつて、豫て約束のダイヤ入りの指環を貰つてあげませうと云ひました時、お孃樣が、御願になるには、どうぞ指環を求める事は待つて下さい。私が大學を出てヨーロッパを旅行する時まで、來年の三四月の頃まで待つて下さいとお頼みになりました。それではと云つてお父樣もそのまゝお預りになつて居られました。其後一年を經ましていよ

いよ二人とも大學を卒業しました時、金持のお孃樣は
あづけてありました指環を現金で頂戴いたしたいと、
親御樣にお頼みなさいまして、其金をお友達の苦學生の方の旅行費としまして、仲のよい二人は手を携へてヨーロッパ旅行の途に上りました。金持のお孃樣の兩親も娘の此の行を大變感心されまして、一層御心付を厚くなさいましたので、二人は喜んで巴里、伯林とまはつて、到る所の舊跡を訪ねて、見聞を廣くされました、私の許にローマの廢虚から二人からの繪葉書がまゐつてをります。

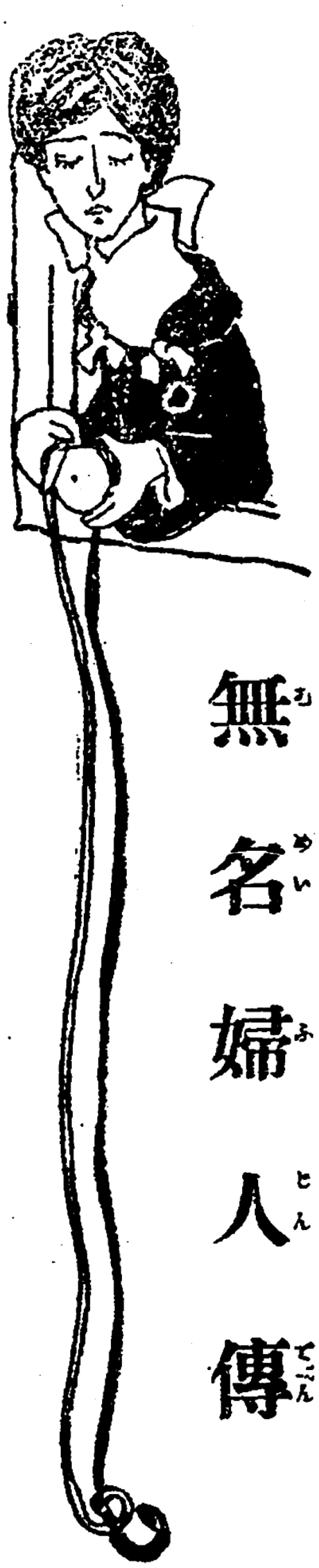
其の後立派な身分の方は名高い醫者の夫人になつてブルクランに住んで居ります。苦學生の方は黒坊の孤兒院に勤めて、可憫想な黒坊の子供たちの母となつて働いて居られますが、今も猶二人の方は昔にかはらぬ優しい麗はしい交はりをつゞけて居られますが、恐らくは二人とも死に至る日までも立派なお友達であるに相違ありません。若い友情はその動機が立派であれば、必らず長く續くことを、私は自分の經驗から信じる事が出來ます。



奈良二月堂

まださう以前の事ではありません、私は四五人の生徒と一緒に上野公園へ參つた事がありました。すると公園内ではつたり昔のお友達に出會しました。此の方は私の若い頃からの親友で互に心の中まで察し合ふ事が出來る位で、長く御交際して居たものですから、出會ひました時の嬉しさは非常でした。あとで生徒があの瞬間の先生の御顔は日本晴でしたと笑ひましたが、屹度さうだつたらうと思ひます。

無名婦人傳



(二二)　神に召さるゝ一刻前までも、生命を大切にした十八歳の常處女

初鹿野道子 (青山)

幾久代さんは、十八の聖い處女で世をさりました。

神に愛せらるゝ者は、其召さるゝ事はやしといふ。

幾久子さんは、ほんたうに早く召されたのでした。

幾久代さんのお父樣は、日本聖公會で有名な長老で被居います。先年、英京ロンドンで開かれたパン、アングリカン、コングレスの折には、日本からの代表者として出席なされ、アルバート、ホールの演壇に立つて、一萬の聽衆を醉はしためた方、將來日本人監督がたてられる日には、其第一人としてゆるされてゐる方でございます。

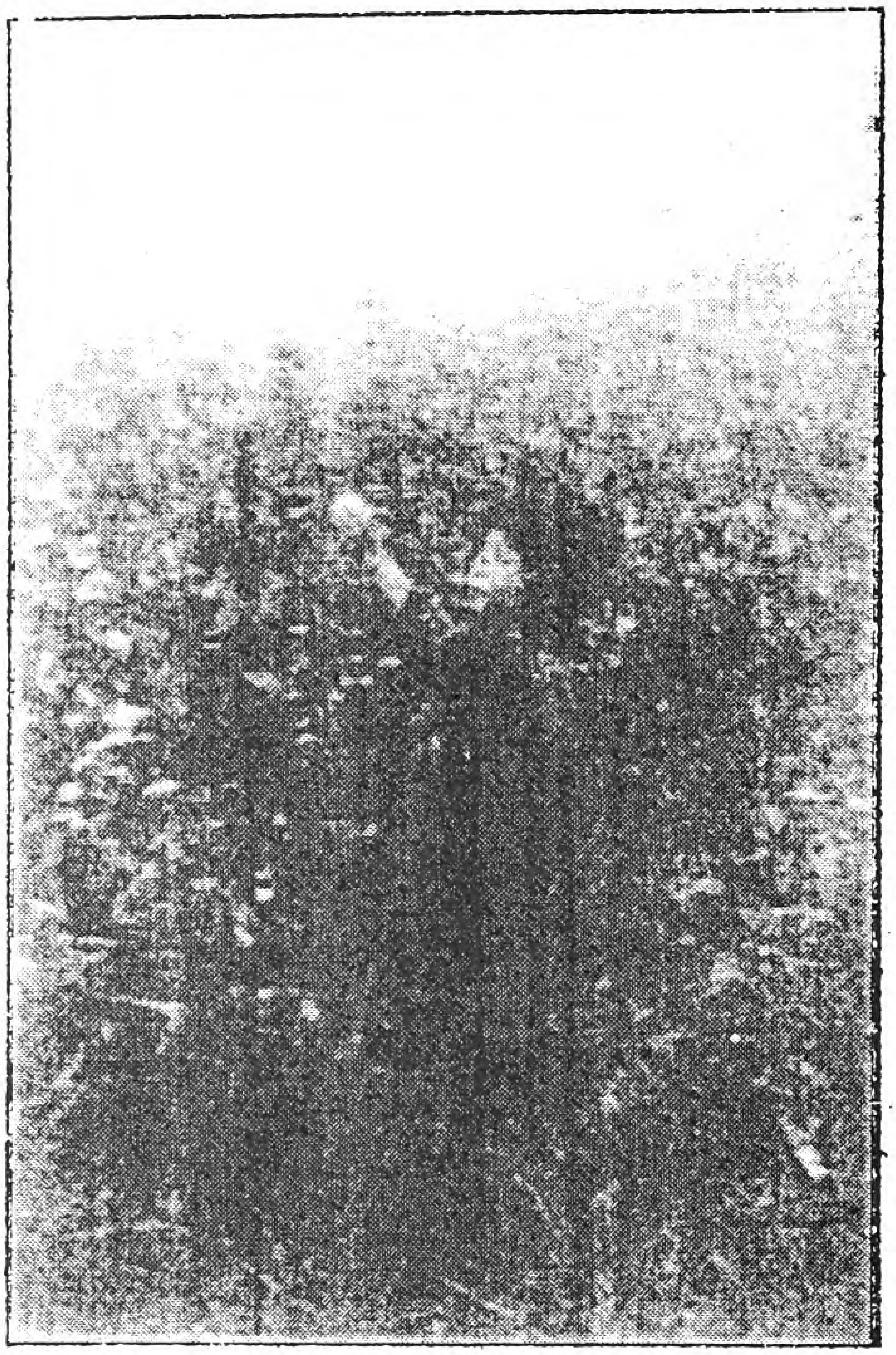
かう云ふお父樣をもつて、幾久代さんは、兩親の祝福の中に八人の姉樣とお生れでした。お幼少い日はしらず、私が初めてお目に懸つたのは某校入學のとき、幾久代さんは二級上の本科一年で、たしかお十三だつたと思ひます。

同じ組のたれかれが、皆下げ髪にリボンを結んでゐる中に、幾久代さんお一人は總髪で、可成に長いのを結ばずに、ふつさりと背にたらして、いつも紫のふさのながい被布をきてゐらしつた。丈も餘り高い方ではありませんでした。痛々しいほど瘦せた細い姿が淋しく思はれたけれど、大きい曇りのない瞳が、柔い光をも

つてゐました。病身のやうに思はせる體格に、頼りないやうな、氣の毒のやうな心で、じつと後姿を見守つてゐる時、ふつと振りかへつて見合す瞳が、明るい日の光の樣に輝いてゐて、『あゝよかつた』と思ふ事が度度ありました。

學課は二番三番といふ位置でしたが、人望のある事は學校一でした。其れは決してお父樣の××長老が校主でゐらしつた爲ではなく、何もしらぬ新入生まで、美しい玉のやうな人格に引きよせられるのでした。と云つて、とりすました、ませた所はちつとも無くて、いつも樂しげにしてゐらしつたので、下級の人等などが、つまらぬ事にいさかひしてゐる時でも、優しい笑顔に和げられて、何一言も口にいはず、其儘終つてしまふのが常でした。

どちらかと云へば馳せまはつて騒ぐ事より、細工物や編物などの靜かな事がお好きのやうでした。其頃學校に、生徒の有志が集つて、一週一度午後の時間をさいて、編物などをし、出來上つたものは毎秋の慈善市に賣拂いて、其利益で、十人に餘る老人を養つてゆく會が有りました毎金曜の午後一時半から三時半まで寄宿の自習室に集るのでしたが、幾久代さんは、いつも庭に向つたバランダーに椅子を持ちだして、小聲に歌ひながら、器用な手つきで星編の針などを運してゐらしつた。皆がいつとなく引よせられて、五人六人と集つていつて、果ては大きな輪を作つて、幾久代さんの大好きなアラビヤン、ナイトを聽



摘むは何の葉ぞ

くのでした。左の袂の揃つた赤いふりの中から、極細の白や水色の毛絲がほつれて、細い白は手先の調子づいてゆく話しの時も亂れもせずに動いてゐました。

私が覺えてゐるので三度ほども、校友會に英詩の暗誦をなさいました。其內に度々缺席なさるやうになり、今更に驚かれる程やつれていつて、遂々お十六の年には肋膜といふ名で退學なすつてしまひました。其れから一年餘を南湖院にゐらしつて、靜かな朝夕を送り迎へ　被居いましたが、大分よくお成りになつて又東京のお家にお歸りでした。

お父樣が神學校長でゐらしつたので、澤山の神學生も一つ家に居ましたけれど、家におかへりになつてからは、一度でも御自身の召上つたお茶碗の始末を、人手におかけなさらなかつたと、言ひ出してはお母樣をお泣かせします。此麼でゐらしつても、あのすんなりした春の日のやうな心ぞへは變りませんでした。幾久代さんの心に僻みや惡みや、其麼暗いものゝ隱れてゐる場所がなかつたのでした。其れでゐて、御自分の御病

氣についての注意は驚くほどゆきとゞいて、皆がよつて話しなどしてゐる時でも、何とかしたはづみで、サーッと風の吹き込む事があると、默つて、袖を顏にあてゝ、つと立つて風下にお坐りになつたといひます、『風上にゐて、もし私の息が皆に掛つたら――』ときいて、お母樣は『幾久代、あなたはまあ』と仰有つたなり、ほろ〳〵お泣きなさいましたとか。

少し快くおなりになつてから、學校へも折々三時半のお茶によばれて被居いましたけれど、どんなに進めてもお茶は召上らず、お菓子だけとり分けて上りました、かうした事を傳へき　教會の人々も、學校の友達も、どんなにもして全快をと祈りました。中にも二三年前ゆかれた南部地方監督の故オードレー博士は幾久代さんの教父でゐらしつたので、はたで見るさへさしぐまれるほど幾久代さんを愛してゐらつしやいました其の贈物といふ可愛い金の十字架を、黑い組ひもで被布の胸に下げて、復活日の禮拜にいらしつたのが最後でした。おてたつたと思はれた病氣が再び重つて、其年

の秋、幾久代さんの短い旅は畢りました。

お父様の××長老は、自分の子ながら、私はあれに敎へられた事が幾つあるかしれぬ、と仰有いました。

あとで御覽になつたら、お机も本箱も整然として、只日頃手ならした手帖の末の方に、

吾がゆくべき途くらくも、手をたづさへ、伴ひませ

と云ふ讃美の第一節だけしるされて、其處に鉛筆がはさんであつた相でした。

いよく最後と知つた醫師が、僅かの間だのに藥や何かにくるしめるより、日頃好んだ果物でもといふ心づけを、其れとなくお父様がきかれたとき。

私をだまして甲斐ない望を起さして下さいますな、お藥も苦いし注射もつらいけれど、私の生命が終りに近づいたとて、自分の我儘から其れを怠る事はしますまい、一日きり與へられぬ生命なら、其一日を大切に保つのが、私に殘された只一つの務めですもの。

と仰有つて、遂に最後まで、苦いくすりを快よく、うれしさうに召上つたときゝました。

僅かの事にも世を怒り、人をのゝつて、自らやぶる人の多い世に——私は思ふ毎に淚がこぼれます。けれど、其れは徒らに悲しみ歎くそれではなくて、思ひかへす毎に、內に溢れる尊いなみだ。

年若い人々が何のなす事もなくて、世を去つてゆくと思ふのはまちがつてゐる、其人々の死によつて幾つのよき事が生れるかは、只神のみ知り給ふ、空しく逝つたと思はるゝ人々は、かくして永く生命があるのだ。

とヂッケンスは云ひました。此の語こそ幾久代さんの死に當てはまつたものかと思ひます。

汚れなき魂は其の若き日に翼をはつて、天の高きにとびましたけれど、青山の墓地の靜かな臥床、ドロセヤ××幾久代の墓と誌されたさゝやかな十字の碑の下に吾等の眼寫つた幾久代さんの身體が眠つてゐます。父母の愛、同胞の愛、師友の心づくしの消ゆる日もなく、美しい花にかこまれた墓碑は、もう六年の雨露に

ぬれました。

（二三）舅姑小姑にあり丈け苛められても辛抱の果は幸福になつた嫁

つゆ女

これは私の御友達の御母樣の事なんです。名は政子樣とおつしやつて埼玉の小さな村に產聲あげたのです。御兩親は其地方で評判の美しい人たちで其第二番目に生れた娘なのです。十五歲の時に隣村の庄屋の倅のところへ嫁に行きましたが、世間によくある嫁いぢり。それで一通りな、いぢり方ではありませんでした。向ふには小姑が五人居ります。それ丈でもなか〳〵ですのに、近處へ嫁にいつて居る良人の姉さんが度々やつて來ては、政子さんのやり方をいろ〳〵文句を云ふのでした。舅がなか〳〵むづかしやのところへ、わきから姑がいろ〳〵突つくので、幾度便所や臺所でないたかしれませんさうです。いつそ死んでしまほうかと思ひましたが、其中に女の子が出來、引つゞいて男の子が出來ましたからどうする事もできません。しかしいくらか子供に望を置いて、たのしむやうになりましたからいゝやうなものゝ、人より早く起き、夜は人よりおそく寢て其外色々苦勞をするので御乳も十分には出ませんので、子供がよわくて、それに女中などが少しでも子供の世話をすると、姑が「子供の二人位世話の出來ない嫁は家にはおけない、出て行け〳〵」と大きな聲で奉公人の前でどなりちらすので却つて奉公人の方が氣の毒になつて蔭では世話をしても、家の人の前ではたとへどんなに泣いて居やうが知らん顏をする有樣、女の子が六つの時にかせをひき手當もろく〳〵しなかつたので肺炎となり、今日明日があぶないのでいくら何と言はれてもかまはずにおく事が出來ないので、一生懸命になつて看病を致しましたが翌日つひになくなつてしまひましたが、誰一人氣の毒と思つてなぐさめてくれる人はなく、却つて厄介拂ひでもしたやうな風でした。くやしいと思つても其て

は嫁の、何とも云ふことは出來ません。其中夫は志を立て東京に出て或商賣を始め、政子さんが二十三歳の時に夫から迎へ取られ、夫婦共稼ぎに小さな家でも持つやうになつてから國から兩親、小姑をよび迎へました、其中小姑は追々かたづき夫の信用は同業者にも認められだん〱商賣も手廣くやるやうになると、御つきあひとかで歸らぬ夜も出來る有樣（しかし夫は心だてのやさしい人で大層政子さんを愛したのです、）子供は男四人女三人生んだのですが今は男二人女三人居ります。しかし舅はます〱やかましくなるばかり、姑は意地がなほつのるばかりなのです、或時などは政子さんが產後の肥立が惡くつて、起る事も出來ないでウン〱苦しがつて居るのに、可哀想だとも思はず寢室の戶をバタ〱はたくやら、「私なんかどんなに肥立が惡くつても一日でも休んだ事はない」などゝきこえよがしに話されるし、末子が（私の友達名はきよ子さん）乳が足りないためにのべつに泣き通しても誰一人かまつてくれず「此がきはのべつピー〱泣いてばかりゐやがつてうるさい、赤坊は御つかさんのところが一番いゝ、早くつれてつてやれ」ときよちやんを抱くのでない、まるできたないものでもさげるやうにぶらさげて女中に連れさせる。そして自分の娘の生んだ女の子は皆して機嫌をとり何でもいよ子〱と大騷ぎまさ子さんは「アヽなさけない、私は嫁でいくら憎いといつても罪とがもない此子、現在自分の孫ぢやないか、この子まで何もそんなにひどい目にあはせなくともアヽすまないゆるしておくれ、こんな足りない母さんを持つたばかりにお前にまでつらい思ひをさせるかんにんして」といくら泣いたかわかりません、便所へは、這つて行つた想です。けれ共一體が表面はやさしくても心はなか〱しつかり者ですから、何度死ぬやうな目にあつても、又二言目には出て行け〱とどなられてもぢつとがまんにがまんをしてとう〱今日に至つたのでございます。そして今では舅姑ともいくらか下に出ていらつしやいますし、小姑等からも親類のものからも、女丈夫として立てられ、夫にも小供にも愛せられて幸福に世を送つていらつしやいます。



婦人職業案內（四）

山田菊水

タイピスト

▲タイプライター

タイピストとは、タイプライターを使ふ技術者を云ふのであつて、最も新らしい婦人の職業で、その名からして大分ハイカラであります。然しそのハイカラなる點は、只だ横文字のみを扱ふと云ふだけであつて仕事そのものは、寧ろ事務的なじみな仕事であります。

タイプライターの構造を、今こゝで説明することは出來ませんが、一口に云へば文字のピヤノと云つた樣なもので、文字や記號を器械に植ゑてあつて、それが指頭で鍵を叩くに從ひ動き出して、立派に文字を印刷するのであります。ピヤノやオルガンが、或る鍵を叩けば、それに相當した音が出て來る樣に、タイプライターは、或る鍵を叩けば、それに相當した文字が紙の上に印刷さるゝのであります。只だピヤノにありては七音と及び五種の中間音と、都合十二の鍵が重複連續して居りますが、タイプライターはアルファベット、數字、其他各種の記號のために、性質の違つた數十の鍵があつて、最も新しい器械で云へば、四十二個の鍵を備へて居て、それが各々二樣に働き、八十四種の文字記號が現はるゝ仕組になつて居ります。この四十餘の鍵を交々指頭で叩いて、種々の文字を現はすのが、タイピストの技術であつて、恰かもピヤニストが樂譜を讀んで、音樂を奏すると同樣に、タイピストは草稿を讀みながら、指頭の早業で文章を印刷するのであり



ます。

▲タイプライターの速度

器械が既に精巧に出來て居るから、時間と手際さへ構はねば、誰にでも出來ます。恰かもピヤニストでなくても、一本指を使つて君が代くらゐは彈ける樣に、ポツリポツリ一本の手紙に一時間もかゝつて居る分には、稽古も練習も要らないが、それでは殆んど實用にならないので、爰に特別に練習をした、タイピストなる技術者が必要になつて來ます。

ピヤノを彈くにも自から指の順序がある樣に、タイプライターを使ふにも、指の使ひかたがあつて四十餘の鍵を叩く指は、一々チヤンと極まつて居ります。何もそれでなければならぬと云ふ理由はないが、種々經驗の結果その方則に從はねば巧く行きません。而して舊式の方則では、左右とも小指を使はなかつたが、新式の方則では、小指まで使ふことになつて居ります、斯くして指の使ひかたが極まり、鍵の在所を暗じて來ると、最早タイピストの眼は、單に草稿の上のみに注がれて、指は無意識に動き出して、迅速に文字が現はれて來ます。之れを觸接式と稱し、段々熟練するに從つて一秒時間に七字位の速度を以て叩ける樣になります。即ち一分間に四百二十字の割合で、一語平均四字とすれば、一分間に百五語の速度であつて、大抵の手紙は一分間の内に綺麗に書き上げらるゝ譯であります。



武藏荒川のほとり

▲タイピストの需要

タイプライターの最も利用せらるゝ所は、内外の貿易商であつて、少し頻繁に外國と手紙を往復する會社商店には、大抵タイピストを雇つて居ります。横濱の貿易商店では、少くも一二人づゝ使つて居ない貿易商はなく、大倉組などは四五人三井の如きは十三四人のタイピストを使つて居ると云ふことであります。今日東京中に幾人のタイピストがあるか、一寸調べる道がありませんが、其道の人の話しに依れば、少くとも東京だけに五百人以上に上るだらうと云ふことであります。然しその大多數は男子であつて、女子は今日の所甚だ少數の樣であります。元來この仕事は男子よりも、婦人の仕事として適當したもので、その成績も女子の方が誤りが少なくてよいと云ふことであります。それが今日男子に占められて居ると云ふのは、女子のタイピストの少ないために、一時男子にて補充されて居るのであつて、女子のタイピストが出さへすれば、當然女子の領分に復する筈のもので、少くとも五百人の需要がある譯であります。恐らく今後この需要は益々增加するだらうと思はれます。

▲現在の女子タイピスト

現在女のタイピストが何人あるか、これも一寸調査の道がありませんが、神田三崎町のタイピスト養成所に於て、去る四十二年より昨年の六月までに養成した女子の數は、左の通りの數字を示して居ります。

明治四十二年	十一人
同　四十三年	二十一人
同　四十四年	二十人
同　四十五年六月迄	三十五人

即ち八十七人でありまして、昨年上半期の增加は偶々需要の急激なる增加を示すもので、恐らく今日までの養成數を調べたならば、百人以上に上るでありませう。それに我流で獨稽古をしたタイピストを合すれ

ば、百四五十人ぐらゐはありませうし、假に今日の男女タイピストを五百名とすれば、今後女子の開拓し得る餘地は、尙ほ三百五十人だけある譯であります。況んやこの職業は、今後年と共に盛んになつて來る見込がありますから、女子の職業としては、實に大に有望なものと云はねばなりません。

　養成所に就いて、その賣口を聞いて見るに、日本商店向のタイピストは、片つ端から賣れて行くのみならず、未だ修業中のものまでが雇れて行く有樣であります。それは同所の中途廢學者表を調べて見ると分ります。

入學後一ヶ月で廢めた者	二十九人
同　二ヶ月で廢めた者	十九人
同　三ヶ月で廢めた者	十六人
同　四ヶ月で廢めた者	三人
同　五ヶ月で廢めた者	八人
卒業した者	三人

右の内一二ヶ月で廢めた者の中には、實際廢めたものもあらうし、或は自宅で練習して何所かに勤めて居るものもありませうが、三ヶ月以上で廢めたものは、最早廢業ではなく、タイピストとして雇はれて行つたものであります。卽ち未だ一人前の技術者にならぬ前に、未熟のまゝで賣れた譯で、如何に需要の多いかゞ想像されます。

　外國商館向きとなると、未熟のまゝでは役に立たない、これに後に說明する如く、學力も技術も優秀なものでなければ勤まらないので、今はその方に向くるに適當なる資格のもの少なく、爲めに申込の七分通りは斷はつて居ると云ふ話しであります。

▲タイピストの資格

　タイプライターは我流で獨稽古の出來ないことはない。現に我流のタイピストも大分多いさうであるが、然しその稽古たるや主として練習であつて、器械を離れては出來ません。そのために態々二百四十圓も出して、一臺買入るゝのも不經濟な話しで、且つ我流で

は大成することが困難であります。而して今日の所組織立つて致ふる所は、神田三崎町三崎座前のタイピスト養成所だけのやうでありますが、新たに稽古しようとする人は、同所に於て練習した方が便利でせう。
三崎町の養成所では入學者の資格を、高等女學校卒業程度としてありますが、實際その位の學力がなければ、タイピストとして勤まりません。殊に英語の素養は何しても、高等女學校卒業程度以上を要します。元來タイピストの仕事は、擲り書にした草稿を綺麗に寫すのであつて、第一に草稿を判讀する力が要ります。夫から忙がしく書いた草稿ですから、勢ひ脱字もあり綴りの間違ひや誤字も多い、それを一々正すのが、亦たタイピストの大切な役目であります。啻に誤字脱字を正すのみならず、時としては文章を直すこともあり或は要點だけ書き擲つた草稿によりて、文章を作つて行かねばならぬこともありますから、何しても高等女學校卒業以上の英語の力がなければ、滿足に勤まらないのであります。尤もタイピストの扱ふ所は、多くは商業文で、これには自から文例があつて、少し慣れて來ると、思つたよりも易すく、又た日本の商店だと使ふ方で手加減をして、タイピストは英語の實力の乏しいものときめて、草稿も丁寧に書いて呉れるし、口授する時にも加減して寛くり讀んで呉れるので、實際は高等女學校三年修業位の所、勤めて居るものもあります。書取りにしても、タイプライターをやつて居れば妙に綴りが頭に入り安く、實務に當つては案外安いさうであるが、然しそれは日本商店のことで、外國商館となるとその邊の手加減もなく、高等女學校卒業位ではチト覺束ない所があつて、先づ東京で云へば女子學院とか青山女學院とか、佛英和女學校の樣な、ミッションスクール卒業位の英語の力を要するさうであります。

▲タイプライターの稽古

年齡には制限はないが、然し三十五六歲以後になると稽古しても上達しない、何しても若い內に限り、先

づ英語の實力が一通りついた所で、二十歳前後位が一番良いと云ひます。而してその人の性質によりて、自から巧拙があつて、舊來日本の令孃風の、溫順にして柔和しい性質の人よりも、西洋風の活潑な人の方が適して居て、響の聲に應ずるが如く、氣輕にオーライで動き出す底の人が成功するさうであります。夫から學力の優劣も亦爭はれないもので、何しても英語の素養の深いものには及びません。

三崎町の養成所では、毎日二時間づゝの練習をすれば六ヶ月、隔日二時間又は毎日一時間づゝ練習すれば一年で卒業し、前者は月謝二圓五十錢、後者は一圓五十錢であります。而して六ヶ月若くは一年間練習すれば、技術も立派に出來るし、且つ又たタイプライターの外に、商業文や簿記等も教へますから同所を卒業すれば一人前のタイピストとなれます。



バザーの陳列室

▲タイピストの給料及び勤務

タイピストの給料は、日本商會だと初め十五圓乃至二十圓、外國商館であれば、突出し二十圓から二十五圓に雇はれます。勿論會社などでは、月給の外、毎月若くは半期々々の賞與があつて、普通の社員の通りに貰へるのであります。若しまたタイプライターの外に英文速記が出來れば、大抵右の月給に十圓位増して雇はれます。

會社なり商店なりに雇はれると別室か又は事務室の一隅に陣取つて、カチヤ〳〵手紙などをやるのですが、平常はのべ

つに仕事のある譯ではなく、何れも概して閑散であります。その代り郵便日となると一時に仕事が輻湊して眼のまはるほど忙がしく、他の店員が退けた後までも片付かずに、夕方の七時位まで働くことがあります。又た手紙の外に明細書とか、古い記錄の謄寫などが出ると、可なり忙がしいこともあるさうです。然しタイピストは商會内の何れの部とも交渉があつて、彼所からも此所からも頼まれるので、自然重寶がられて可愛がられると云ふことであります。

▲英文速記

タイピストの仕事の都合から、今日は速記の出來るものでなければ、眞個のタイピストとは云へないことになつて居ります。殊に外國商館にては、是非速記の出來るタイピストを要求します。日本の商店では、まだ我慢をして、速記を要する所も使はずに、カチヤカチヤ音のする所で聲高に口授しながら、それをその儘タイプライターに取らせて居りますが、外國商館では大抵タイプライターは別室に置く位であつて、一應口授して速記に書かせ、若くは簡單に要點丈け速記させ、其上にて文章を直しながら、タイプライターにて淨書させるのでありますから、外國商館に雇はれるには、是非速記が必要であります。

速記を稽古するには餘程英語の力を要する。會話の力が要る。こちらからの返答は出來なくても、話しを聽く力と、文章を直す力は十分なければならん。故にこれは普通の高等女學校卒業ぐらゐでは間に合はず、何してもミッションスクール卒業ぐらゐの力を要します。三崎町の養成所では、毎日一時間の練習で、一年間に卒業させることになつて居りますが、目下日本人でそれを學ぶものは甚だ少ないと云ふことであります。





吾行く途

白木いと子

發露せしめよ。そこに停滯せずして只自然のまゝに
發露せしめよ。

どうも貴女のは氣分が停滯する氣味がある。停滯してゐるうちにそれに理屈がつき高慢になり純な處を蔽つて了ふ。われから傷ふものといふ事に氣がつきませんか。と人の心持を理解することの敏なK先生は親切に云つて下すつた。

すべての人の前に眞實のわれを語りうるやうになつたと自ら思つてゐた私には、まだ流れずして停滯する厭はしい氣分を持つてゐたのであつた。

さうすれば自分もほんとに樂なんですけれど。K先生の言葉にから答へた私は、やるせない辛さと寂しさとが胸一杯であつた。

人に敬せられ憚られる事はあつても懷しまれ親しまるゝことの少い自分、二十年の永い間壓迫せられ〱て孤獨遂に倚るなきを先入主觀として了つた生活は、どんなに私に禍ひしたであらう。

今放たれて何等の束縛なく明るい日の下に息づきつつある身に、尚多年の習慣に色づけられた忌はしい氣分はまつはつてゐる。

私の本性は孰ちかといへば樂天家の方である。それが時に陰鬱の暗き色を帶ぶるのは何の爲であらう。尖つた神經、偏狹な心持。それら一切を捨てゝ自然のまゝのわれを發露せしめ得る純良な氣分になりたい。戀や詩の時代は私には過ぎた。一人の愛あればすでに足る、多くに愛されんとはもう希はないけれど、たゞ、眼を開いてわが前の廣き世界のもの一切を抱擁する心持になりたい。現在の願は實にそれのみであ

る。

三人の同胞のうち一人私は毛色が異つてゐた。兄も妹も物に溺れ得る性質だのに、私にはどんな場合にも溺れ得ない淋しさがあつた。

人は充分に惑溺し得られる場合にあつて、自己を離しえずジッと見据ゑてゐるほど淋しい事はないと思ふ。

私だつて何も琥珀色した酒や薄紫の煙り吐く煙草がのめない事はない。けれども私は決してのまない。自ら酔ひ得ないのを信じてゐるからである。

只一つ私が溺れ得るものは音樂のみ、和洋の樂何によらず只物の音をきく時だけは自己を取離しうるまでに私は酔ふことが出來た。併しそれとても強ていはゞ全然溺れきつて了ふものとは云へない。

悲しみを悲しみとして溺れ得ず、喜びをよろこびとして溺れ得ない處に目さめたるわれの哀愁がある。

酔ひうるものは幸福なるかな。醒後の味はひの苦き

は知らず、只瞬時でも傷ましき我を忘れうるだけでも幸福であると羨まれる。

電報に驚いて闇い根岸の路を夢のやうに俥飛ばせたが、行着いて見ればもう間に合はなかつた。

何よりもの倚るべき蔭、只一つの力のやうに思つてゐた祖父は私のつかない一時間も前にもう冷い骸となつてゐた。

かの慈愛に背いた不孝の子は遂に不孝の子としてあらしめよ。との神のみ旨かも知れぬ。一時に壓された嚴肅な氣に、私はその亡骸の傍に濡れた面をやゝしばしは擧げ得なかつた。

死に目に會はなかつたといふこと、それが何よりもの憾みであつた。肝心の方がと皆な殘念さうに云ふ。つまりは電報の案外な遅着がての結果をなしたのだけれど、雖然私には口にして云得ぬものがそこに潜んであるやうに思はれる。

私の感情ありのまゝを云へば、死に目にあはなかつ

たといふこと、それが必ず私にも死者にも不幸であつたとは云得ないのだ。

死に目にも會はないで、といふのはそれは周圍の感情だけである。私は祖父の臨終がごく安らかにあつたといふことを聞いたゞけで澤山なのだ。不孝の子は遂に不孝の子にあらしめよ。心配かけたばかりで何一つ報ゆることを得なかつた人の生涯の最後の幕を閉づる時、私は立會ふに忍びなかつた。薄情かも知れない。この心を誰か知らう。私はむしろ最終の悲劇の場を見ざりしを死んだ人の爲にも自分の爲にも却つて幸福であつたかも知れないと思つてゐる。



亡骸を守つて端然と坐つた私の昂奮した血はぐん／＼頭に上つて春立つたばかりの頃の夜寒の氣も少しも感じなかつた。

祖父の息のない體と私と——大きい蠟燭の灯が謎のやうに瞬く室の内に、犯し難い神嚴な氣は漂ふけれど、そこに横はつてゐる空しい骸を見ると、どうしても、どうしても、息ありし時の祖父の懐しさは消えて了つて、單に一個の物體としか思へない感じであつた。死ぬ者貧乏とはよく云つた

もの、死んで了つては單に一個の物體に過ぎない。確かにもう息あるものとの世界が違つてゐた。すべての交渉は全く絶えて了つたのである。

祖父が死んでも私の悲しみは自ら思つてゐたほど深くはなかつた。却つて一人の親友が毒を仰いで逝つた時の方が遙に悲しみは濃く胸を流れた。一つは若きもの丶死が不自然なのに引かへて老いたるもの丶朽ちゆく自然は誰しも諦めを持つてゐるからでもあらう。然し私がいまだ未婚の處女であつたら又祖父の死についての悲哀は少くとも色が異つて表はれて來はしなかつたらうか。境遇によつて起つて來る事柄に對する眼が異ふのは事實である。

が、けれど私は今にして知つた。子を失つた悲みは何ものにも優るといふことを。仍且り第二の自己である分身にはあらゆるすべてのもの丶うち何よりも深い執着を持つのは否定することが出來ない。それは人とし生ける者の誰にでも共通した深甚な親の情であらう。

私はまたもさきに失つた子を思ふて消えない悲愁を覺えた。

信ずるま丶になされた私らの結婚は、一面に於て大分缺陷した處があつた。それは精神上にでなく表面の生活上に於てゞある。今まで親に代つて後見した祖父はそれをうまく自分の袖の下に蔽ふてゐてくれたが今度祖父が死去つて見ると私等はいつまでもうか〳〵としてゐられなくなつた。私等の精神上にも生活上にも非常な動搖は起つてきた。

祖父は何處か人より超越した處があつた。八十年間の苦痛な生涯を送る爲には勢ひ超越せざるを得なくなつたのでもあらう。

祖父の亡後、死後の整理なんかの心得は勿論財産の處分法も何にも書いた物は一片だに見つからなかつたそして平常また其樣な事に關しては一切人に云つておかなかつたのである。無論祖父の方は分立した家であつて、本家の兄が萬事處理することにはなつてゐるけれど、然し夫れにしても誰しも確かに必ず明細に處分法がつけてあるもの、書いた物でも遺しておいたことと信じてゐたのである。

超越した人は何處までも超越して了つた。K先生な

どは其祖父の爲方を、偉い、中々出來ない事だと云つてほめた。けれども私らは感歎ばかりしてゐる譯にはゆかなかつた。これからの生活、それも今迄とは多少違つて來なければならなかつた。私等にきた變化の第一着として此の住心地のよい家も、今月の中にでも引越す筈になつてゐる。

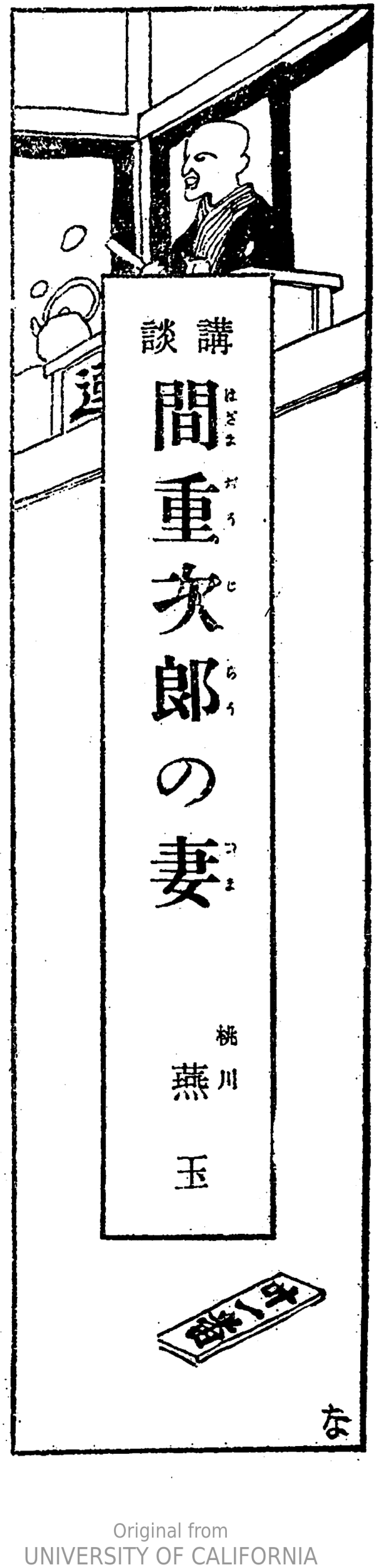
　あるべき筈のものがなかつたといふことに就ても私は別に驚かなかつた。他を信ずるより自己を信ずる力が私には強かつたからである。

　祖父の死は私等の生活に一劃を線した。今まで私はどの位祖父に對して責任を感じ苦痛を味はつてゐたであらう。けれど、もう今は全く責任を免れ得た心安さがある。

　是からの生活は眞に人間としての私等の生活である



今まで自ら生きてゐた事は感じつゝあつたけれども、然し今にして省みれば、それが眞個の生活ではなかつた。結婚してから今日までの三年間、それは私等の生涯を語るほんの前提に過ぎなかつた。



講談

間重次郎の妻

桃川燕玉

赤穂四十七義士の内、間重次郎の妻おもよの傳記を申上げます、元祿十四年三月殿中松の廊下の騷動、四月二十七日赤穂城渡し相濟み、諸士の面々思ひ〳〵に退散をする、中に間重次郎は、配當されました金子の多くを、妻のおもよに渡し　重　お前は伜重七を連れて、江戸表の實家へ立歸つて、我が便を待て」と云つて、一人何處ともなく立去りました、據ろなく重七といふ小兒を抱へて、江戸表仲御徒町御納戸同心佐藤庄左衛門といふ義理ある父の所へ立戻つて居りましたが、元元來さぬ仲、殊に不届きなる庄左衛門は配當金さへ取上げて仕舞ひ、何かに附けて辛く當る、搗て加へて伜の重七が重い疱瘡に掛つたが、醫者にも掛けて呉れない、のみならずおもよに再緣をしろと勸めるので、女心の淺墓から、ツイフラ〳〵と死ぬ氣になり、ソット家を拔出してやつて參りましたのは吾妻橋、ヒユーといふ顏を切るかと思ふやうな寒風が身に染み渡る、欄干の所に凭れて下を見るとゴウ〳〵といふ水の音は物凄うございます、何にしろ十一月の中旬のことで何分にも寒氣は強しおもよ「重七お前は本統に運の惡い子だ、切めて父の跡を繼で武士になるやうにと今まで育てゝ居

た甲斐もなく、餘りと言へば御祖父さんの無慈悲から斯う云ふことになりました、此上からは仕方がない母と諸共此の隅田の川に身を沈めて、草葉の蔭から御父さまが立派な武士になるやうに天下に名前を殘すやうに共々に祈つて下され」と未だ四才になる頑是ない子供に言聞かせ、其儘小供を抱いたなり、既に飛込まうと云ふ折から、突然後ろより ○「待つた〳〵、何てへ事をするんだ、串戯ぢやアねえ、先刻から變だ〳〵と樣子を見て居りやア何かよめへ言を言つて、此川へ飛込まう樣子！」もよ「何誰かは知りませんが何うか御慈悲でございますから殺さして下さいまし」○「馬鹿な事を言ひなさんな、御慈悲に殺すと云ふ奴がある者か、一人なれば兎も角も、子供抱いて飛込まうと云ふのは何れ譯のある事にやア違へねえが、そんな無分別をするもんぢやアねえ……」もよ「アヽ然うでもございませうが、どうぞ御見遁しなすつて」○「宜いつて事よ、惡いやうにはしねえ、マア宜いから俺の言ふ事を聞きなせえ」と確かり押へ付けられておもよは其儘引戻され

橋の袂に參りまして其男の樣子を見れば、寒いのに褞袍一枚、頬被りをして居ります、大層扮裝が惡いから何者かと思ふ位ゐ、男もおもよの樣子をシゲ〳〵見たが、被つて居た手拭を取り ○「若し貴所は間の御新造樣ぢやアありませんか」もよ「オヤお前は」○「ヘエ鐵砲洲の御屋敷に旦那樣が在しつた時分御奉公をして居りました又助でございます、ヘエ仲間の又助でございます」と言はれて能く〳〵樣子を見れば、成程三年以前に江戸御勤番の時鐵砲洲のお屋敷に仲間をして居た又助と云ふ男だ」もよ「マアお前は又助か」又「ヘエマア御新さん何と云ふ不了簡の事をなさいます」もよ「今お前に此處で逢ふといふのも實に」又「ヘエ盡きない緣でございまして、私も今度御家の騷動を承まはり、何とも申しやうがございませんで、併し何と思つても私共の力には及ばんてと、依て蔭で旦那樣と貴所樣の事をお案じ申して居りましたが、オヤ〳〵是はアノお坊ちやん、オヽ〳〵斯んなお子さんになりましたか、確かお四つでございましたね」もよ「ハイ四つになります」

又「マア貴所然んな扮裝をして嘸御寒うございませう私しは男のことゆゑ斯んな綿衣一枚でも寒いとは思ひませんが…オヽ坊ちやんは大層の御熱ですね、お身體でも惡いのでございますか」もよ「ハイ天然痘で誠に難儀をして居ります」又「ヘエ天然痘だと言ふ子供を抱いて川へ飛込んで仕舞つては仕方がないぢやァありませんか旦那樣は當時何處に被入しやいますか」もよ「ハイ…」又「旦那樣は江戸に來て被入しやいませんか」と言はれた時に流石のおもよも涙を流し、委細の話をなしかねて差俯向いて居りますのを夫と察して 又「マア御新さん、此處でお話しをするよりは斯うなさい、私の家は本所の三笠町でございまして、夫婦で貧乏世帶を張て居る汚ない家でございますが、兎も角も手前共までお出でなさい、又御相談にもなりませう」と見掛けに依らん深切者、又助が案内をして三笠町の家へ立歸つて參りました、今日の三笠町は大分立派になつて居りますが、元祿時代の此の邊は餘程貧乏人の家が多くございました、新屋の裏の角から二軒目、別段に戸締りもなく、ガラリ開けると中は眞暗でございます

又「エヽ御新造さん其所にお待ち下さい今燈火を點けますから」もよ「又助、お前の家は此處かい」又「エヽ左樣でございます、斯ういふ見苦しい所に這入つて居ります、又其の内に宜い風が吹かうと思ひます」と言ひながら、カチ／＼火打箱を取出して火を打ち、附木へ移して燈火を點けましたが、一本燈心で、赤貝の貝に魚油を注ぎ、夫へ燈火を移して 又「サアお這入んなさいといふから、家の樣子を見ると、四疊半敷ける所へ疊が二疊しか敷いてございません、今戸燒の火鉢に眞黒に燻つた土瓶が一つ掛つて居る、傍に素麺箱の廻りを張つて箱に仕切りをし、上が佛壇下が膳棚になつて居ります、鍋も釜もない土釜でお飯を炊くといふやうな家で木片を二つ三つ出して、夫を細く火鉢に入れ、ポッと火を燃して 又「サア此方へお出でなさい、誠に此んな家でございまして、火を燃して置きますと用心が惡うございますから、其の度に焚火をするので、お坊さんは嘸お寒いでございませうに、オヽ／＼お泣寢入

りにお寢みなすつたやうだ」もよ「又助、御家內は」

又「ヘエ未だ歸つて參りませんが、モウ程なく歸りませう、もう御家內などゝ仰しやつて下さると面目次第もございません、其所では冷えますから、モツと此方へお出でなさいまし‥‥扨御新造さんどう遊ばしたのでございます」もよ「ハイ又助聞いてお呉れ、殿樣が殿中御刃傷から、遂々御家は潰れ、重次郎殿は別れて私は先へ江戸表の實家へ出て來ました」又「ヘエ、確か御新造樣の御實家は御家人樣でございましたな」もよ「下谷仲徒士町でありますか、誠に爲さん仲とは言ひながら阿父さんといふ人が善くない人で」又「ヘエ〳〵」

又「此の通り子供が疱瘡に惱んでも醫者一人聘んで呉れず、誠に便りないから實は死なうと思つて、併し夫は御兩親が惡いばかりではない、私が屆かないので、決して親が惡いと云つては濟みませんが‥‥」又「貴女樣の御氣性では御道理でございます、私も鐵砲洲に旦那樣が在つしやる時分に御奉公をいたして居りましたが、お國へ行つしやるに就て、お暇を頂き、元は大工でございましたから、敲き大工をして居る內に、詰らない女と一緒になつて、些とやそつとは錢もありましたが、長らくの煩ひ、モウ全で仕事も出來ず、大工道具も賣つて了ひ、別に稼ぐ道もございませんから、嬶アが女の髮を結つてどうか斯うか暮して居ります、男が女に養つて貰ふといふのは極りが惡い譯でございますが、何分病には代へられませんで、斯ういふ有樣でございます、併し旦那樣や御新造さんに御恩になつたのは忘れません、假令斯樣な樣子をして居ても何の位ゐにも御世話をいたしますから御心配なく見苦しい所ではありますが、手前共にお出でなさいまし、此の近所に醫者もありますから、明日の朝早速醫者に見せてお坊ちやんの疱瘡の治る樣にいたしませう」もよ「お前がさう云つて呉れゝば辱じけない、併しお前も見れば餘り樂ではない樣子」又「どうせ此の通りの態でございますから、樂といふ譯には參りませんが、辛く思つて御實家にお出でなさるより却つて氣樂でございますから、決して御心配なくお居でなさい其の內に又旦那樣

の御便りもございませう。あゝいふ結構な旦那樣ゆゑ決してお出先でお心が變るの、外に増す花が出來たといふ譯でもございますまいから‥‥サア〳〵モッと此方へ寄つてお煖んなさい、モウ直ぐに嬶アが歸りませうから、さうすると御飯を炊いて上げますゆゑ」おもよ「御飯は欲くはありません」又「ナアニ左樣ではございません、私が又寢際に一杯やらなければ寢られませんので、今に戻つて來ますからお待ちなさいまし」と云つて居る内に女房のおてつといふ者が歸つて參りました、誠に之が心だての優しい女で、夫婦して何くれとなく世話をして呉れますが、今まで二人きりでさへ暮し兼ねて居る所へ、おもよと子



供が入つて來たのだから、其の苦しさは一通りでない見るに見兼ねておもよが私が袖乞ひに出て、情のあるお方のお救ひを受けようといふ、固く夫婦も留めましたが、却々利きません、其では途中に何か間違ひでもあつてはならないからと云ふので、此のおてつといふ女が傍に附いて、毎晩江戸橋の河岸へ袖乞ひに出る或夜の事、相變らず柳の陰に二人が人の來るのを待つて居ると、折よく一人の侍が參りました、ズカ〳〵と夫へ出て參りましたおもよが「少々お願ひでございます、難澁の者でございますから、どうぞ御合力を願ひます」と傍へ寄る時摺違つた侍「さうか、夫は氣の毒な事だ、手の内を進ぜよう」と足を止めて、懷中か

ら紙入を出し、其の内から小銭を探つて居る様子其の間おもよは顔を上げる所ではございません、手拭を被つたなり頭を下げて居ると、ブーッと吹き来る寒風の爲に、被つて居た手拭を取られ、アッと思つて顔を上げる途端に、彼の侍は頭巾を被つて居りましたが、おもよを見てビックリ驚ろき

○「ヤッ、其方はおもよではないか」もよ「オゥ貴郎は・・・」と言つて驚ろいたのも道理、夫間重次郎でございます、おもよは其の儘バラ〳〵と逃出さうとする袖を確と押へた重次郎重「コレ待て」もよ「ハイ、どうぞ旦那様、お許しなされて下さいまし」重「何故あつて此の場に至り、人の



袖褄に縋るやうな事をいたして居る、扨々見下げ果た致し方、人の情を鬻いで今日の養ひを立てるまでに其方の根生は腐つたか、モウ別段に聞くに及ばん、今より改めて離別をいたす」と思はず大聲にいふのを、柳の影に聞いて居たおてつ、何だ乞食に離縁をする奴があるものか、馬鹿々々しい人があるものだと思つて居る内に重次郎は、其の儘行過ぎようとする、其の袖に縋つたおもよもよ「御立腹は御道理でございますが、只此の儘に御覧になりましたら、情ない奴と思召すでございませうが、之には段々譯のある事、かくお留め申しはいたしません、御様子をお見受け申せば貴郎様も種々御苦心を遊ばされる様

子、離縁と仰せられるならば其は離縁も受けませうが實は下谷仲徒士町の佐藤の元に居りました所が、なさん仲とは申しながら、お話にもならん事でございまして、其に應じません爲に家にも居兼ねまするやうな始末、殊に重七は此頃疱瘡でございまして……」重「エッナニ、伜重七は疱瘡の爲に苦しんで居るとな、山を上げたか、今日で幾日になる」もよ「ソレ御覧じろ、私に離縁をすると仰しやる其の下から、重七の事を御案じなさるではございませんか、今日で丁度七日になります、其の子を抱いて表へ駈出しお話申すも涙の種、實は入水をしようと存じ、吾妻橋まで參りましたる處、旦那樣御存じの仲間又助に助けられ、其から云々斯々と、掻摘んで物語るを聞いて居りました重次郎、暫くは顔を下げて何の言葉もございませんでしたが　重「其れにて袖乞ひをいたす次第も相分つた、併しながら人の袖に縋つて合力を受けるといふは、此の重次郎に恥を掻かせるやうなもの、父喜兵衛弟新六に聞えても、腑甲斐ない者と思ふに相違ない、愈よ以て勘辯ならん

離縁いたすから左樣心得ろ、男の子は男に附くが當然なれば、斯く申す重次郎が引取らねば相成らん」と言ひさしたる時には、胸迫つて暫くは口籠る樣子、稍あつて懷中より金子を取出し、重「之は聊かなれども重七の手當として其方に遣はす、此の金子を以て疱瘡とあれば猶更大切にいたして遣はせ」もよ「イエ私は離縁となつたる折柄、決して斯樣な金子に望みはございませんが、其の代り外に望む物がございます」重「ウム、扨は金子と申しながら聊かであるから其方の意に叶はぬか、重次郎も今日は斯る姿、其方に充分なる手當を遣はす事も相成らんが、何ほどあれば宜いと申すか」もよ「イエ千萬の金子をお惠み下さるとも快よく頂戴はいたしません。金子といふ物は申さば世の融通物、別段私は寶とは心得ません、貴所樣が一大事の場合になつても、未だ幼年の重七に何か筐の品をお遣はし下さるやう、さすれば重七い成長の後定めて喜こぶ事でございませう」重「ウム、其は宜く申した、成程金銀は融通物、紀念には相成らん如何にも其方の申する處、感

心いたした、然らば之を遣はす故、成長の後重七に渡して呉れ、併し之は離縁いたした其方に遣はす譯ではないぞ」もよ「ハイ」話の内に間重次郎、差添を取つて渡しまするのをおもよは押戴き、帶の間へ挾みました重次郎は改めて金子を取出し」重「之は聊かであるが、重七に口直しの菓子を求めて遣はして呉れ、併し對面いたすは今夜限り、縁あらば此の通り思ひ掛けなく對面もいたす」もよ「お目通りいたせばこそ、私も御離縁を下し置れましてでございます」とホロリ／＼落す一雫、重「如何にも離縁をいたしたに相違ない、併し何日かは斯く申する重次郎や、父喜兵衛、弟新六が落命いたしたといふ事が相分つたら、其の時にこそ念佛の一度なりと唱へて呉れ」もよ「念佛どころではございません」と四邊を見廻して聲を密め、豫て伺ひましたる殿樣の仇討をなさるお志し、首尾能く御本懐をお遂げ遊ばしたる後は、重七を連れて必らずお墓場の水を汲ますするやうにいたしますから、其をどうぞ泉下にお樂しみにして下さいまし」と云ひさした儘跡は涙の村時雨、流石の間重次郎も少しく胸を痛め、何日まで斯くて果つべきと思ひましたから、重「然らばこれにて別れるが、呉々も重七の身の上を頼む」と言ひ捨てた儘駈出す、「暫らく待つて下さい、今少しお話申したい事がございます」と言へども留まる場合でない、バラ／＼／＼バラ重次郎が駈出して行く後姿を見送つて、おもよは涙に暮て居る樣子、おてつは其へ出て參りまして、てつ「おもよさん何でございます」もよ「おてつさん、今此處でお目に掛つたのが私の連合でございます」てつ「オヤマア何でございますか、旦那樣が……其で又旦那樣が此のお姿を見て逃出すといふのは餘り不實ぢやアでざいませんか、何か外に增す花でも出來たのでございませう」もよ「イエ／＼却々さういふ譯ではございません、其には種々譯がありまして」と言ひ掛けたが俯向いて了ひました、途端に後の方で○「モシおもよ殿と突然聲を掛けた者がある、ハッと驚ろいて二人が振返つて見れば、何時の間にか此處へ來た一人の侍もよ「之は何誰樣でございますか」○「イヤ某しは決して心配の

者ではござらん、其に連れて居る女を何れへなりと遣はし、其許だけ一寸之へ」もよ「ハイ、おてつさん、一寸お前さん脇に居て下さい」てつ「何でございますか又お侍……」と、おてつは目を丸くして脇へ行きます、おもよは其の侍の傍へ參りましたが、頭巾を深く被つて居りますから、面體は更に分りませんもよ「何誰でございますか」侍「木村岡右衛門でござる」もよ「其では赤穂に居りまする時分、隣家にお在の木村岡右衛門殿でございますか」岡「如何にも、實は先刻からの様子之にて承知いたした、其の許に申し入れるも如何なれども、大石氏の下知に依り、本所松坂町の吉良邸の近傍に立廻る其の砌りは、若し一人にて上杉吉良の家來に咎められる所となれば、迚も一人にては防ぎ難し、五人八人一丁二丁と離れて同行するやうにいたせとの豫ての達し、我々今晩間重次郎殿と同行いたし參りしが不圖足早やに來つたる重次郎殿、之にて御身との物語り、何事なるかと思ひ、實は木蔭に様子を窺へば、御夫婦の際會人情として、定めし我が家に罷り越し、彼是れ重七の顔も見たからうけれども、流石に侍の事ゆゑ其の儘にして別れを告げ、様子を聞けば離別の趣き、必らず重次郎殿をお怨みなさるな、離別を受ける其許と言ひ、離別をなさるゝ重次郎殿のお心の内をお察し申せば、實にお痛はしい、之は何かの手當として大石氏より與へられし金子、聊かではあるがホンの志し、其の許に進上いたす、御子息重七殿疱瘡にお罹りとの事どうぞ其を以て手當を充分にして下さるやうに」

もよ「有難う存じますが、只今夫よりいたして種々……

岡「イヤ其は其れ之はこれ侍の志し、木村岡右衛門の寸志であるから是非御受納を願ふ」と取出したる金五兩、押戴いたおもよもよ「有難う存じます、然らば頂戴いたしますと頭を下げる其の中に、木村岡右衛門は其の儘其所を立去りました、跡に殘つたおもよ、其の晩夫より三兩、木村岡右衛門よりの金子五兩貰ひ、其の頃八兩と云へば大した金子、殊に子供への紀念まで貰ひましたから之を携へ、モウ柳原の土手に居るどてろではなく、早く立歸つて又助に噺しをしようとおて

つを連れて、三笠町へ立戻り、家へ這入らうとする途端に、ヒーイと泣出す子供の聲、又助一人弱つて居る所へ今重七は此の世を去らうといふ有様、驚ろいて其へ駈上り、突然おもよは物をも言はず重七を膝へ抱き上げ、阿父樣にお目に掛つたよ、阿父樣がお歸りだよと我を忘れて一聲呼べば、絶え入るばかりに泣叫び、未だ四歳になるかならない小兒が、腫潰れて居る目をば漸々に開いて、細き聲を上げ「母樣、阿父樣は何所にお出でなさると」四邊をキヨロ〱見廻す樣子、愈愈おもよは胸を張裂くばかりの思ひ、又助夫婦も氣の毒に思つて、慰め兼ねて暫くは共に涙に暮て居りましたが、早速に届ける所へ届け、本所報恩寺へ埋葬いたしました、其の初七日に至るまで、おもよは毎日のやうに參詣に參りましたが、實家の佐藤兵右衛門の所へは頓と便りをいたしません、猶又助の家に居りまして重次郎の筐に殘しましたる差添へを夫の如く子の如く心得て居りますのは天晴の者でございます、爰にお話別れて仲徒士町の佐藤兵右衛門の家では子供を責めて家出をさせて了ひ、頓と其の後便りがないから大方死んで了つたんだらうと別段氣にも留めずに居りました所が、どうも惡い事は出來ませんもので、賊が押入り抵抗をしたので夫婦は切られました、殘るおむよといふ女房は重傷で即死をいたしましたが兵右衛門は死に切れず苦しんで居ります、斯くいふ譯になつて悔悟したと見え、先手組頭兼松平九郎に申入れ、何卒臨終の際に娘おもよに遇ひたいといふ、ソコで平九郎が八方捜索をいたしました、聊かの手掛りなく本所三笠町の又助の所に居る事が分りました、其は兼松平九郎自身に參り、右の次第を物語り、おもよは之を聞いて心の中に、惡い人とは思ひますけれども、父親といふ名義のありまする事ゆゑ、捨置く譯にもなりません、平九郎と同道して仲徒士町の實家へ參り父に對面をすると佐藤兵右衛門も大いに悔悟して「誠にお前に對しては濟まなかつた、どうぞ此の事は勘辨をして呉れろ、就ては此の家は此の儘お前に讓るゆゑ善き婿がねを貰つて跡を相續して呉れろといふので、おもよも充分に手當をいたしましたが、遂に賊に切られたる疵が原因で兵右衛門は相果てました、依て相當の葬式を出し、今では他に召仕へなるものも御座いませんから又助夫婦を引取り、之を手許に置き只管夫の安否を氣遣つて

居りましたが、時は元祿十五年十二月十四日、淺野の浪士四十餘名、吉良の屋敷へ乘込んで、首尾能く本懷を達し、高輪泉岳寺へ引上げるといふ事を聞き、おもよは飛立つばかりの嬉しさ、自分で泉岳寺へ參り、夫に一目逢ひたいと思ひましたが、女の事ゆゑ其もならず、又助に申附け、どうぞ生前に夫に對面を致したいけれども私は女の事で行く事が出來ないから、どうぞお前行て夫に逢ひ、重七の死したる事も申告げて呉れといふに又助は承知いたし、高輪泉岳寺へ參りました處が却々嚴重でございまして、緣なき者は面會を許しませんが、之々の次第でござると、右の由を語りますに就て早速之を間重次郎へ通知いたしますと、重次郎之を聞いて門へ參り見れば、以前に召使つて居りました仲間の又助に相違ない、そこで又助はおもよからの口上を落なく演べまするを、重次郎は伜の死したるを聞いて大いに驚ろき、又妻の貞節を感じ、又助夫婦の義氣を賞し、佐藤兵右衛門の死を悼み旁々し、重「立歸つたらおもよに、其方佐藤の家を相續いたすやうに申傳へて呉れ、且つ父喜兵衛殿を初め、弟新六も充分なる働きをいたし、殊に新六は昨夜吉良邸へ推參いたし少將義房に對して第一に槍を附け、此度の大功は新六が第一番となり、間の家の名譽なれば、おもよにも喜こび呉れるやうにと斯樣申して呉れ」又「へエ左樣でございますか、其は豪い事をなされました、宜しうございます、必らず御新造樣に左樣申上げますが、モウ旦那樣別にお申殘しはございませんか」重「別にいふべき事はないが、此の槍短冊をおもよに遣はして貰ひたい我が名前を記してあるから、之を位牌と心得て折節念佛の一遍も唱へて呉れるやうに申して呉れ」又「畏まりました、左樣なれば之をお預り申して參ります」といふ内に、間喜兵衛も弟新六も其へ出て參り、新六は肌附きの金子を出し、喜兵衛は印籠を出して之を紀念として、どうかおもよにやつて呉れろといふので、又助は右の三品を預つて三人に別れを告げ、仲徒士町へ立歸つて其の趣きをおもよに申入れました、時におもよは暫く淚に暮て居りましたが、各々切腹仰せ附けられた時に、自分に於ても切髮になり、夫婦養子をして佐藤の家を相續させ、自分は間親子を初め我が子重七の菩提を弔ふ爲に尼の姿となり、生涯を送りましたのは中中其の志し天晴なる者にて、貞女百婦傳の内に加へて然るべき婦人でございます、間重次郎の妻おもよの傳記此の邊に留め置きます。(今村次郎速記)

お辨當のお菜

毎日のことで困りますのは、お辨當のお菜です、子供などは何でもかまひませんが、主人の方は然うもゆきませんので、一等都合のよろしいものといふので、大抵はお魚の燒物にいたします。

味噌二百匁、砂糖二十匁、醤油一合の分量で能く混和せ、之にお魚の切身、拭巾で能く拭き取つたものを一晝夜ほど漬けて置きます。さて燒く時には味噌を落し、ざつと清水で洗ひまして、串にさします、身の兩面とも、各五分間ぐらゐづゝ燒きまして、串を廻しながら抜き、一寸てり醤油をつけて置きます。それから烏賊の皮を剝き、庖丁目を入れ、能く水氣を除き、十分間ぐらゐ醤油に漬けて置いてから取り出し、串にさします。燒くのに庖丁目を入れてある方から先にし、また二分間ほどもしてから醤油をつけて燒くのですが手輕でおいしく出來ます。それに玉子を添へます時は、玉子をつぶして砂糖と鹽とを好加減に加へ、薄く燒くのです。燒けたのを一寸位の幅に切り、それを又絲のやうに細く切ります。別に海苔を弱火で能く燒きまして、乾いた拭巾に包んで揉みます偖てお辨當の御飯をつめる前に、その玉子燒と海苔とを底の方へ入れまして、御飯の上へも亦海苔と玉子燒とをかけます、そして切身なり烏賊なり添へるので、お辨當は出來上るのでございます。

手數を要するやうですが、實は雜作なく出來ます、宅の臺所は御覽の通り三疊ですから、狹い方でございます、それに折々十人二十人といふお客樣の見える時もありますが、お料理をするのに、別に不都合を感じません、一つは瓦斯を使つて居るためでせう、それで狹くても不自由はないのです、何んな料理をするにも一切炭火を用ひませんから、廣い場所は入らないのです、お魚を燒きますにも、海苔を炙りますにも、またお茶をほうじるにも、皆瓦斯七輪でいたしますので、朝でも、晩でも火を起す世話もありません。主人や子供が出掛る支度をしてゐる僅の間にお辨當も出來るのです。（某婦人談）

光風會展覽會

光風會第二回展覽會は上野に開かれた、今回は出品總數四百二十一點、大作よりも小品ものが多かつた。岡田三郎助、中澤弘光、藤島武二、石井柏亭、丸山晩霞、南薫造、山本森之助、竹久夢二の諸氏を初め、有名の人もあれば、無名の人もある。無名の人の作の中に心を惹かれたものも二三はあつたが、兎角名の聞えてゐる人の作に眼を惹れる素人の悲しさが恥かしかつた、一帶に調子が眞面目になつたやうで、然うあてきみでなくなつたのは嬉しいやうに思つた、各個の作に就いて言ひ得ざることを遺憾とする。（M）

髪の流行と髪かざり

大西白牡丹調

▲春から夏にかけての髪の流行を、總括して申上げると矢張束髪が流行て、是れは例年同じ事であります。束髪も前髪をわけて、結び目を下にさげた女優結びなぞが一部分には流行りますが、一般に通じての流行は前髪を取つた束髪の方であります。髪の結び方も隨分變つたのがありますが、一體に長ての方が喜ばれて居ります。先を編んで結んだのも一寸風が變つて居ります。髱は一頃出さないのがはやりましたが、此頃では髱をとつたのがはやります。

▲日本髪の中で一番數多く結はれますのは丸髷であります。丸髷は一頃いちの上つたのがはやりましたが今ははやりませぬ。形のこぢんまりして、ふつくり高い方がよろしいやうであります。それに日本髪は髱がつまつて前髪の出た方がいゝので、此頃は前髪に入れ毛をなさる方が多うございます。鬢は下へ撫でさがつた方がいゝやうであります、一體に春さきになると、丸髷が四分、束髪が五分、あとが銀杏返しとか島田とかいつた位であります。隨つて銀杏返しとか島田などには、別段に流行はないのであります。島田は矢張高島田がはやつて居ります、銀杏返しの方は輪が大變細くなつて意氣になつて居ります。



流行の束髪（桑島ちよ）

▲髪かざりの流行は、矢張束髪の流行にともなつて、束髪をどだいにして、種々と珍しい變つたものが現れると云ふ有樣であります。束髪の櫛は依然として新ダイヤの鉄入つたものが勢力があります。新ダイヤ入りは今迄は安物に限られて居ましたが此頃は上等品が出來て、新ダイヤだからと云つて、上等の方々も嫌はないやうになりました、定價にしても、まへは二三圓がとまりであつたが、今では一枚の櫛で二十圓位



流行の丸髷（伊賀とら）

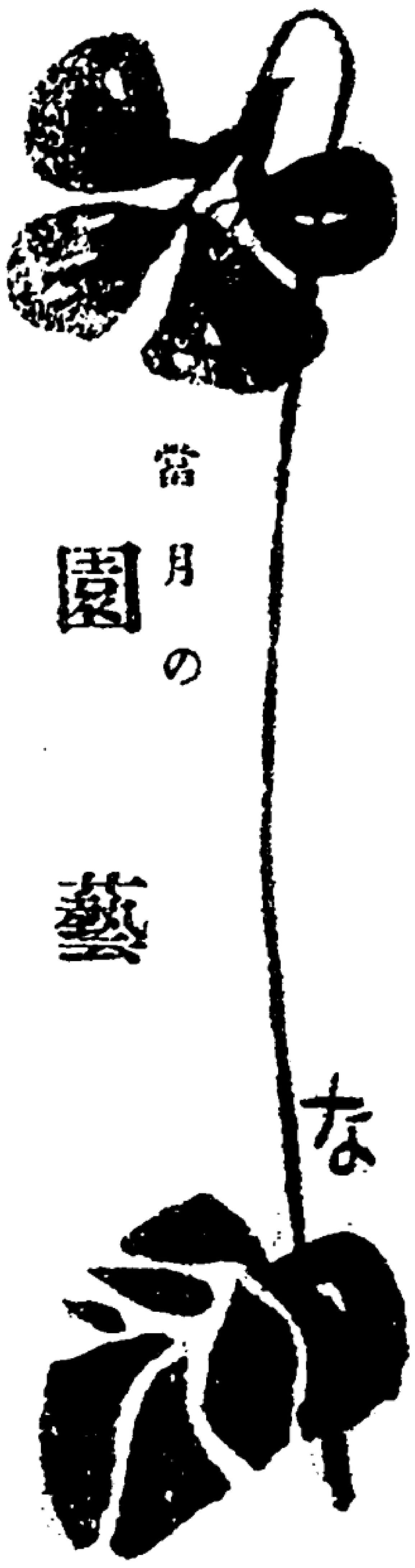
のものが出來て居ります。先ブ御年若のお嬢様向きは、一枚の櫛ですみますが、御婦人方となると二枚櫛をおもとめになります。櫛も品がよいのになると、プラチナとか金を嵌めた立派なものとなります。蒔絵の類は此頃はとんと流行りません。櫛の模様は今のところでは、日本在來のごく淡白なものが喜ばれ、草花の寫生などのこつてりしたものは一寸下火であります。霞に雁、流れに櫻をあしらつたやうなものが好まれて居ります。

▲日本髪のものでは、櫛笄の類は一帶に車輌天がはやつて居ります。模様はおもに彫刻風のもので、殊に鼈甲を彫刻してそれに翡翠玉を嵌入たものとか、真珠を嵌入だものとかいふのであります。蒔絵ものは矢張廢れて居ります。日本髪の櫛の模様は今まで外國風の模様はつかなかつたが、昨今は大分ふまはしい新奇な圖案が出來てまゐりました。それに當年は髪かざりや帶止に、翡翠の彫刻を應用するのが流行るやうであります。一體翡翠は夏場のものでありますから、此の夏にかけて非常に出やうと思ひます。

▲色は諒闇後から一帶に黒つぽいものがはやつて、櫛も簪も黒の勝つたものを用ひましたから、此の春さきには多分白つぽいものが歓迎されるであらうと思ひます。



流行の銀杏返し（桑島ちよ）



當月の園藝

櫻草

櫻草は皆樣が御存じの可愛らしい花で、鉢植にして眺めるのも宜しい、一體に繁殖力の強い草で、最う咲きのてります。最も花屋の店頭には餘程前から出て居ります。

櫻草と言へば名を聞いたゞけでも可愛らしく聞かれますし、事實に於て愛らしい花であります。今でこそ色形種々樣々で、その種類は幾千とありますが、元は紅と白との二種類のみで、春の初め三四月頃に咲きます。

さてこの香かぐはしい上品な花を作りまするは、春花が咲いて了つてから根分けをしますと容易に繁殖することが出來ます。尤も毎年分株をしますと苗がよわりますから隔年位になさるとよろしからうと思ひます

然し櫻草のみとは言はれませぬが、別して櫻草は初めは甚麽に立派な花であつても、段々に見劣りがして來ますから種子を蒔くとよろしいと考へます。種子は春秋何れでもよろしいのですが、寒暑にはよく〳〵注意しないと不可ません。三年目には大抵よく見守つてやりさへすれば奇麗な花が簇生します。鉢植ゑになさるには肥料を絶えずやるが適當します。肥料には油粕汁と共に鉢土を選んで肥えた土でないと不可ません。

チューリップ

頃は四月の中頃、春光うらゝかに輝き渡るに、花屋の庭を訪れて御覽なさい、皆樣の眼に映ずるのは何でせう。燃える樣な丁度焰のやうなけば〳〵しい色光澤で持つて、咲いて居るのはチュリップです。何と言ふ美しさでせう、私共の眼は自然と引付けられて了ひます。昵と見詰めてゐると小い花からは生が燃えてゐるのが判りませう、丁度若い貴女方が戀に心も身も燃やしてゐるやうな姿をしてゐます。

一重と八重とがあるのは言ふまでもありません。早咲と遲咲との別があります、その色の美しさは實に明るく只驚嘆するより外にはない程に美しく上品な花で

す。
十月末か十一月初め頃に、藏つて置いた球根を植ゑ込んで肥料をやるのですが、水除けのよいやうに砂を少し入れねばなりません。霜除けのために藁など被せるのであります。鉢なれば自分で作つた温室に入れるのがよろしいと思ひます。花が咲いて了つたならば陰干にして砂か鋸屑の中に藏つておくのです。さうすれば大丈夫であります。

バイオレット。

バイオレットと言へば今では知らぬ人はありますまい、さうして直ぐ愛と言ふことを思ひ浮べるでせう。この花は元來は野原に瘠せ見窄らしい一重の花でしたが人が色々と世話をしたものですから今では美しい大きな七重咲き千重咲きなどのあるやうになります。日本ではバイオレット菫草と言ひまして、芭蕉なども山路來て何やらゆかし菫草と云つてあります。

種子を買つて蒔いてもよろしいのですが、失敗しますから斯う言ふ無謀こ近いことは止めて、信用ある花屋から苗を買ふのが一番よろしいと思ひます。

根は毎年殖ります故それを根分けして殖しなさるとよろしい。又挿木も出來ます。又親株からは絶えず蔓を出し漸がてその芽が一本の芽になりますから、それを育てゝ行けば一本のスミレになりますが、さうすると苗がよわくなり花が小くなりますから切り棄てるやうになさい。冬は室内に入れておき、肥料は灰か過燐酸肥料でも少しやれば三月頃になりますと、芳香を含んだ花が咲きます。

パンジー

一般に三色スミレと云つてをります。遊蝶花としてバイオレットよりも奇麗で然も之れを作るにも繁殖させるにも非常に容易ですから、多くの人に好まれて作られます。

種ならば春でも秋でも、床蒔か鉢蒔になさる方が安全です、そして苗が二三寸になりますと、餘り強く日の當らない所に移植しておいて、九月か十月の初めに花壇なり鉢へなりと植ゑるのです。根分けをするには秋が最も容易で健全な苗を得られますから、根分をするならば秋の彼岸頃になさるとよろしいと思ひます、さうして一二回肥料を掛けてやると、四五月頃になると奇麗な花が咲きます。

この花は蚰蜒が餘程好むと見えまして、往々害せられますから見付次第除くやうにしなくてはなりません



化粧問答

化粧研究會婦人修容會顧問　藤波芙蓉

問　お化粧の仕方について、近い處でしたら、毎日でも御訪ねして、先生に御手づから拵て頂きたいのですけれど、若し寫眞を差上げましたら、それを御覽下さつて、どうお化粧すべきかを御示し下さることが出來ますでせうか。（名古屋、ふみ子）

答　御寫眞では充分といふわけには參りませんけれど、お目に掛り得ぬとすれば、致方ありませんから、わかるだけを申上げることに致しませう。

問　私は御地の某高等女學校を好成績で卒業して以來、六年になりますが、幸か不幸か今猶親の厄介になつて居る當年二十七歳のオールドミスでございます、家は郡中資產者の一二と屈指されて居ります程故、私一人位別に生活の道を講じませんでも、終生困るやうなことはございませんけれど、自分としては何もすることなく暮しますのは、世間に對してもおもはゆく、あれかこれかと自分の採るべきことにつき考へても見ましたが思ひ迷はれて何れが適當たとも決しられません、この上は一層化粧家とでもなつて半生を面白く送らうかとも思はれますが、如何なる手續きをふみましたら先生のお弟子として下さることが（惱ましく獨り喞つ女）

答　尤もなる御煩悶、お痛はしう同情申上げます、併し「でも」位の御精神では、所詮立派な化粧家として世の師表となることは望み得られますまい、斯くては前門の虎をさけて、後門の狼を迎ふるの煩悶を再びせねばなるまいと存じますから、此上は然るべき御緣組をお求めになり、人の妻と呼ばれ人の母と呼ばるゝ御身の上とならるゝことを切に望みます。

問　私は本年二十一歳ですが、「化粧に非常な趣味を持ち、自分のことは案よりも人様のお顏なんか拵へて上げるのを何より樂しみに致して居ります、それで或人は化粧家になると非常な利殖があつて自働車に乘つてあるけるやうにもなるから、私にもなれとすゝめて吳れますが、本當に左樣でしたら私も一層のこと左樣なりたいと思ひますが、私のやうなものでもなれますでせうか、それには何年位先生の御敎を頂けばよいでせうか。（大阪、つや子）

答　非常な利殖があるから、それで化粧家になりたいと仰しやるのですか、では私は化粧家たる資格なく、從つて貴女に御敎する何物も持つて居らぬ譯です、何故なれば藤波は、むかしながらの窮措大、自働車には澁澤男爵と梅谷氏とのに乘せて貰つたことのあるだけ、自用車さへ持つことが出來ずに居る貧乏書生であるからです、併し單に利殖を得んとの御希望なら何も化粧家なんて大したことを仰しやらんでも、山師の美顏術師位の所で、勝手な無責任な法螺を恥かしげもなく廣告で世の不見識な人々を引付けなさるのが、何よりの近道でせうから、宜しく其邊の人の處に御入門なされては如何ですか。

問　特許長身器は何所にありますか、その代價等も。（京都、豊代）

一**答**　何かに廣告あつた筈ですが、大阪の何

所でしたが只々一寸記憶して居りません。

問 捨毒の充分でない入毛を用ひたゝめですか、頭皮一面に小さいブツ〳〵したものが出來ました、何卒其の療法を。（牛込、早稲子）

答 千倍の昇汞水をガーゼにひたし、それでヒタ〳〵と頭皮をしめして御覧なさい。

問 （一）ニキビを全治する法、（二）ニキビの再發を防ぐ法、（三）ニキビの痕の黒いのを治す法。何卒御教を。（札幌、かつ子）

答 （一）流動炭酸を御つけになるか、三色スミレの葉を内服して、馬齒莧の煎汁で御洗ひになるか、左もなくば神田旅籠町文光堂からニキビ新劑を御求めになりて、それを御つけなさい。（二）文壇社から「拔毛止」をわけてお貰ひになり、それを日に一囘御つけになり、毎日馬齒莧の煎汁で御洗顔なさい。（三）右の拔毛止を御つけになり、文壇社の「化粧水」を御つかひになつて居れば自然消失致します、若し急に直したい御希望でしたら剝離劑を應用なさらねばいけますまい。

問 生來赤黑い顔ですのに冬季つめたい風に當りますとブチ色になります、それにニキビ樣のオデキが絶えず發生致しますので、毎朝石鹸で洗つて居りますが、直つた頃に再發致しますが。（佐渡の女）

答 皮膚がお弱いのでしやう、石鹸は御やめになり、毎朝コールドクリームの少量をよく指先ですり込みなさつて、一應それを紙で拭き取り、その上に艶肌劑をすり付け、暫らく間を置いて、微温湯るベンヂインを十二滴加へたもので御洗顔なさい、洗顔の場合には指先を御用ひになり、他の洗器を御つかひになつてはいけません。

問 （一）白粉をつけますと顔へハタケが出來まして、その上に粉がふき出しますので、（二）キセロルクリームとキセロル白粉とは何處にありますか、價格はどれ程致しませうか。（廣島の女）

答 （一）白粉が粗惡なためです、先づ洗顔なさつたらコールドクリームの少量を指頭でよく御顔にすり込み、紙でふき取つて艶肌劑をつけ、それから精良の化粧下クリームを平らにぬり、その上に精良の粉白粉を御うちになれば其樣な御心配はありません、それでもケバ立つて落付かぬやうでしたら艶肌劑を手につけそれで其上を御叩きなさい。（二）三越にも、丸善にもあります、クリームの方は七十五錢白粉の方は八十五錢の筈です。

問 「拔毛止」をつけましか處が、段々拔けなくなりましたので、大抵つけずともよいと存じ止めましたら、又五六日經つと拔け出しましたので、再びつけ初めまして二日程して試みにやめて見ましたら、もう拔けなくなりました、併し眉にはつけてはいけぬとの御言葉故つけずに居りますが、眉を濃く致しますには。（大阪、つね子）

答 拔け方によつては一瓶で止まるのもありますが、貴女のは強い拔け方であつたのでせう、眉を濃くするには、豚脂、オルモンド油各五十匁、芫菁末、鯨蠟各二匁、白檀油、ラベンダー油、ベルガモット油各五分をよく捏ねまぜて日に二囘齒磨楊子で御つけなさい。

問 「拔毛止」をつけて見ましたら、却つてぬけ落ち、今では眉のない程になりました、尤も最初眉毛につけてもよいか否かを御尋ね致しましたが何の御返事もなかつたので差支ないものと存じたのに、斯樣のものを先生の御名でお賣出しになつては自然世の信用にも關することを御注告申上げます、尚もとの通りになるやうな藥があつたら御知らせ下さい。（大阪、きみ子）

答 御忠告は謹んで御受け致します、併しその御尋ねの手紙は私が遂拜見もしてありませんので、飛んだ御迷惑をかけました、けれど私のこしらへた「拔毛止」は眉の拔けるのは無効でこそあれ、その脫落を更に誘致するといふやう

な性質は斷じて帶びて居らんのですから、それをつけたがために眉毛なきまでになつたとの御言葉に　私の方でも少々迷惑に存じます、「拔毛止」はカプトール、エピカリン、チゲール等が主材になつて居ります、これ等が脫眉を招致するかどうか然るべき識者に御尋ね下さつたらよろしいかと思ひます、本來を申すと化粧は個性的のもので、如何なる妙劑でも百人が百人に同一の結果を齎らすといふことは不可能のことですから、甲の人には適切に奏効しても乙の人には緩漫なる効驗をあらはし、丙の方には一向効目の見えぬ場合もないではありません、大醫の調劑も又同樣で特に其病の特効藥として公認されて居るものすら、何等の反應もないことさへあります、只に効の見えなんだ爲めに斯樣な手きびしき御注告下さるだけ、私の信用は貴女の前にゼロとなりました、その信用のゼロとなつた私は、もとの通りになる藥について申上げても御採用になるとも覺えませぬ故、その御尋ねに對する答は致しますまい。

問　(一)顏に小皺が多く且つアレて困りますが、(二)石鹼は何がよろしいでせうか。(三)手足のアレますのにリスリンでもつけましたら直りませうか。(四)おしろいは何がよろしいでせうか。(五)ライラツク水を用ひて居りますが差支ありますまいか。(都の女)

答　(一)コールドクリームで日に二回遠法のマッサージをなさい、小皺も消え、アレも止まります。(二)貴女の皮膚には石鹼は適しますまい。(三)リスリンは斷じて貴女にはいけません、リスリンは御承知の通りベタ〳〵致して居るので、これをつけた當座はツル〳〵致しますからアレにはよい樣に御考へなさるか知りませんが、それは一時の現象で、リスリン自身としては皮膚を乾燥させる性質をもつて居りますので、他の藥劑の副劑としては結構なものですけれど、これを單用なさるのはいけません、それにリスリンをつけますと皮膚を燒き且つ硬張らせて黑く致します。(四)先づ私の知れる限りではキセロルプードル、ドリがよいかと存じます、他もなければ御自製なさる外ありますまい。(五)斯樣な御尋ねは困ります、現に御つかひになつて居らるゝとすれば私に御尋ねまでもなく、貴女の方がよく御承知の筈と思ひます。

問　私　先生の美髮香油を使はして頂いて居りますが大層髮の格好もよく毛の艶もよくなりますので喜んで居りますが、ホコリのつくのには誠に困ります、全體私の毛にはクセもなければチヾレても居りませんのですけれど、他の信用出來ぬ髮油よりは先生の御拵へになつたのなら安心と存じつけて居るのですが、クセやチヾレのない毛のためにもなる髮油を調製して御わけ下さることは出來ますまいか。(門司、はる)

答　美髮香油をつけますと髮にホコリのつくといふのは、正に一大缺點として私もこれを認め、何とかしてこれを取去りたいと苦心して居りますが、まだ好結果を見出さずに居ります、せめてはこれを御つけになつた時に、よくすき櫛で御すき下さつたら、多少はホコリのつくのを弱めることが出來やうかと思ひます、普通の毛の人のお用ひになる髮油は、近き將來に於いて化粧研究所で實驗の上、世に提供することに致します。

問　誠に申しかねますが、その御答のありました雜誌をなくしましたので、何卒今一度やせる藥としての人工カルヽス泉鹽の製法を。(岡山、ふみ)

答　製法をと仰しやるのか服用法の御間違ではありませんか、製法でしたら乾燥硫酸曹達四十七匁　重炭酸曹達三十六匁　クロール曹達十五匁、硫酸加里二匁を中末として混和するのですが、若し用法でしたら人工カルヽス泉鹽一匁を水呑コップに三分の二程の水に溶かし、空腹の時に半分を服み、十五分ばかり運動して後殘りの分を御のみになるのです。



文藝欄



小品文

沈丁花

横濱　江の柳

あの佛國の領事館の通りに面した方の庭には幾株も沈丁花が咲くといふ事を見つけたのはをとゝしの三月頃でした、けれどなぜだかわかりませんけれど去年はみませんでした。そしてつひ先日また見ました、まだ咲きそろはないで赤つぽい花がぽつちり巾を白くみせてゐましたばかりでした。

學校のかへりに電車を下りてこゝまで歩いて來るとくつたりした顔をもたげて二三間先の所で背のびして見るのが樂しみになりました。石垣が高くてさうしなくては見えないのです。

きのふもさうして石垣に沿うて歸ってきました、夜お湯に入ってじつと目をつぶつてゐますと沈丁花の事を思ひ出しました。領事館は海に近くたてられてあるのでした。沈丁花、あの風のある日は青く〳〵静な日には長く半島の見える海の香と響をきゝなれて私の知らない時からあそこに咲いてゐるのでせうか。私はその時からこの花が好きになつたのでした、赤いのと白いのとがいつぱいに開くとはげしいかをりは灰色の石垣をもれてみちばたに匂ふのでした（地貧）

（評）觀照の力が優れてゐる、未だ自覺してゐないだけ末たのもしい。

雪の日

羽後　その子

冬が來た。又今年も隨分雪は多い。お藏の屋根も小屋のも眞白、あれ、まあ可愛らしい鳥がたつた一羽、眞黒な首を一寸かしげて……何を考へてるの？聞いてもやりたい樣の繁子は両手にかはる〴〵息をかけながら、手水鉢の上に、こんもり積った雪をせつせとたゝいてゐる。火鉢にすつぽり束髪をうづめてだまッてゐたら、荷の様なつらゝを澤山取ったつて、けたゝましい繁子の聲が裏の方にきこえた。おゝつらゝ！なつかしい名よ。幼い時のいろんな記憶は皆ズンズン私の心から離れてゆくその中に、此のつららの記憶のみは、何故か、鮮明に心に印されてる。なつかしいその頃よ！その頃裏には、茶室があつたのだ。茶室の軒は底いので、雑作なくつらゝを取る事が出來たつけ。本屋からコッソリ砂糖を取つてくるのは私の役目で、兄さんと姉さんはなるべく長いのを三本取って待つてゐた。内裏雛の模樣付いた、沈具の鍋に、澤山入れたお砂糖を前掛の下からそーッと出すと、兄さんも姉さんもそして私も、ひそ〳〵と小さく笑った。やがて兄さん達はいゝ音をたてゝ、たべる私も、姉さんが割つてくれた小さなかけらに、砂糖をつけてこつんとかんだはいゝがさあ大變前の蟲齒にいやと云ふ程しみこんで腹の

底までも痛かつたので口を開いたぎり、とちようともしないで泣いてしまつた。姉さんが儉しく私の肩をさすりながら、「ね、いゝ子だからおとめおとめ」を繰り返しながら、自分は矢張りおいしまうにかちつて……こゝまで記憶をたどつた時、自分の瞳には緋鹿の子かけた、大丸髷はんのり白い衿足をうつむけて、赤ちやんの着物に餘念ない姉さんの姿が寫つたり、どうかもすると、ズン〳〵流れる雲を眺めて、ぼんやりしてる事の多くなつた、落付かない自分の此頃を思ふて見たりどうしてもなつかしい〳〵と思つた一つの記憶をまつすぐにたどつてゆく事が出來なかつた。(地賞)

(評)好い感じが出てゐる。

小鳥

茨城 美花子

砂地をちよこ〳〵と飛んであたりをきよろきよろと見る可愛い鳥よ、お前は何處から來たの、白い花散る北の國からか、生れるから死ぬる迄着て居る其の衣、うつり變りのないかざり氣ない其の衣に、あきないで居る幸の小鳥よいつはりのない愛らしい其の瞳、其の聲、此の廣い海も此の高い山も、其の羽根一つで越えて行く身、何のそくばくも受けない身、さぞ樂しい事だらうね、深山幽谷で唱ふ事もあるだらう、ちりでよごれて居る都の高い空でいつわりの人間の樣を見て笑ふ時もあるだらう。あれあれ、どこへ行く小さい鳥よ、花無い此の濱にあきたのかへ、もうしばし可愛い姿、美しい聲を聞かせてほしい、うるさい世を離れて此の浦に來てお前等とお友達にならうと思ふのに……(人賞)

(評)散文詩を讀むやうで、何處となく人を引きつける力がある。

四月になれば

岩手 齋藤やす子

こんないやな日が何日迄續くんだらう。

かう言つて銀子さんは、限り無く連つてる白雪の山々を、恨めしさうに眺めました。黑い海と灰色の空と、そして雪に包まれた山々としか望み得られぬ小さい港を心から情なく思つては蜜柑鈴なる南の國をなつかしみ乍らも、いざとなれば或る淡い執着にかられて、やはり旅へ出る氣にはどうしてもなれませんでした、暖かい日に照らされて、仙人峠の雪もとける四月がくれば、小川の岸には根芹も萌え樣し、堤の上には菫も咲かう、やがてつばめの巣をくふ頃は、海の水も藍色になつて、白くぬられたあの鯨船が、幾艘も〳〵も入つて來やうものを……ノルウエーの少女達は冬になると白い山を眺め乍ら、『私の望だつて夏になれば歌になる』かう言つてゐると、何日か從兄の手紙に書いてあつたつけ、丁度私もその樣な氣で桃の花咲く四月を待ちませう、と銀子さんは嬉しさうに微笑み乍ら、暗い空から降つて來る雪にハアと一つ大きい白い息を吹きかけました。

(評)終の一句で全篇生きる。

海上

大島 渚の女

沖の方は暗かつた、浪打際には音をして寄せてゐる、測量船の灰色の船體が沈んで靜寂のシンボルの如に横たはつてゐる。どんよりとした太陽が薄墨色の雲の中にさまよつて丘の緑が黄ばんで照り返つた。國府津行きの第一下田行きの第二、小さな蒸汽が行くべき航路にへさきを向けて陰氣な煤煙を立てる、雨と波とに洗はれた黑砂は艀舟へ人の足跡、運搬車のわだち、新らしい旅へ出る人の心にふみにじられ、かき亂されて不整な跡をつける。と、それが直ぐ、白泡かんだ波に洗はれてしまふ、穩かな雨は、其の傍の小屋に降りそゝぎ、海と旅とを思ふ群集の憂はしげな胸にふりそゝぐ。私は茫然積荷に身を支へてゐた、濕つた黑地には一羽の海鳥が何處からか飛び來り白い翼をヒラ〳〵させて赤い目をキヨロつかせては又何處へか飛び去つてしまふ。其の白い翼と赤い目——無性に侘しい思ひになる、又陸に引きあげられた多數の漁船には白と赤の旗が高く低く舞ふ。遠からぬ海上に浮ぶ初島が暗くなつたり明るくなつたりする度に雨の勢が變つて來る。

艀舟はなか〳〵出なかつた。沖の方はおだやかな、波の面も岸近くなるにしたがつて、浪は白

混かんで恐ろしい音をたてゝ打ち寄せる。其の度に荷物を積んだ艀舟は、倒立になつた。小さな汽船待合所の中には不安に滿ちた人々が、一様に、沖の方を眺めておる。海上は暗く艀舟はまだなかなか出さうにもないのである——。

（評）細かくは描いてあるが、今少し女性らしい柔かい感じが欲しい

終りの驛へ

みね子

擴げて居る手の平に觸れた糸の端を引いて、手繰りよせて居る手を右から左にもちかへる機みに、いつの間にか閉ぢて居た、瞼は開いた。

二つ燈された洋燈が長い栗茶色の天井を、滑にすべつて冷い樣に明るいが、下の方は人の息に汚れたのか、ぼんのりと黄味を帶んで何んだか煙りつぽく澱んだ中に、矢つ張り動く形も輝く瞳もなかつた。もて餘した時のいくらかは過ぎたであらうけれども……。

灯の淋しい町の續かない寒驛の二つ三つは、ドアの開け閉ても聞えぬ程靜に心忙しく過ぎて、今宵汽車は崩れかかり相な眞黒い山に添ふて走つて居る。沈默は久しく續いた。

夜は餘り深くはないが小さな室の動かない色にのみ注がるゝ光は、直ぐ白ちやけた濁りになつて物に染み込む侘しさの、こゝに落ち合ふた十に足らぬ旅人の瞳に入ると、いつとはなしに物言はれなくなつた樣に、懷しげな誇りの淺るゝ口を噤み目を閉ぢて、光彩のない生物の姿は寂しう私の前に壞れて居る。單りと謂ふ最も近い計りの中に居るのが不思議に思はれてならない。ふと。——私が、もし美しい妖艶な顔容をもつた女であつたら、こんな時にはきつと、覺えずにぐつたりなつた其體のそばへ寄つて刻んだ樣な花奢な手で首や腕を抱へて、右に左に上に下に自由に操つて、呆氣にとられた人の顔を眞面目に見た時、嬉しい融ける樣な笑を洩して、そして男の後に燃ゆる怒りも憎しみも美しい笑みの中に捲きこめて、靜に器用に動いた手を離すであらう。靜に。——此麼、幻想の浮んで來たのを驚いて、餘り大膽に動く若い女の想ひを靄むる樣に押へた、それでも又、弄ぶ樣な目で凝つと疲れた人の集りを見た。

汽車は眞暗い中を、細い道を探して終りの驛へと走つて居る。何時、山の裾を拔けたのか外は暗い乍ら打ひらいて、横の硝子窓に注ぎ込む樣に青い星が一つ光つて居る。

（評）官能的な描寫が一しほ熱して來た。



（天賞）ぬけ毛　下谷　山田いまり子

橋の上にて

深川　矢澤榮子

はてしも無い大空に、白金の樣な星がせはしくまたゝいて、其の形すら明にみとめ得ぬくらゐ、ピカリ……ピカリ……と輝いて居る。

物足りなさにで廻されて、怎うかすると胸苦しい樣に人戀しさを覺え乍ら、夕暮の町を急ぐ人形箱の樣な、張りのない罪のない通りを見ると妙に、笑はせられる氣分にもなつて、此麼男

隅田川から、かすかな音を立てながら、黒い水があわたゞしく流れ込んで、夜宿りの舟で焚く赤い火が、まるで赤蛇がのたくつてでも居るかの樣に、ゆらくくと黒い水の面に長くうつつて波の動く樣にまかせてふらりくくとして居るのがたまらなく美しい。

橋の近くに、新しく建てられた家の窓から、青白いガスの灯がもれ出て、それが川を照して居るので橋近くの水は青黒く見える、ガワくくと音がして橋の下のくひに當つた水が、凄い樣にうづまいては暗い闇夜の橋の下へと消えてしまふ。

青黒いうづまきの凄さ……私はいつでも斯んな時には氣が變になつてしまつて、此まゝザブン……と彼のうづまきの中へ入つてしまつたら苦しくは無いだらうと、つまらない心を起す事がよく有る、ヒステリカルな……と笑ふ人は笑へ……私は水がなつかしい、波、音が大好だ。

フツト我れに歸つて橫を見ると、寒い霜の氷り付きさうな色をした銀色のレールが、長 長く……先の方は見えないけれども、次の橋の上までもかすかな線が絲の如くに私の瞳にうつつた、と、其の絲の上を電車がたゞ輕くスベル樣に走つて來る、針金の太さと同じくらゐに見える厩橋町で電車はヒタと止つてしまつた、間もなくけたゝましいベルの音を立て、私の居る橋の上を、さながら惡鬼のうなる樣にグワ……と走り過ぎてしまつた。

更けて行く冬の夜は淋しい、橋の上に立つて居る自分を、通る人は皆不思議さうな瞳を持つて眺めつゝ行き過る、あゝもう舟の灯も見えないでたゞうづまきばかり見える。

（評）感受したいと云ふ興味は持て居るが薄つぺらなのが惜しい。

硝戸窓にて

麹町　櫻木雪江

五時が鳴つた。

茶の間で母との話しもつきて、無意識に懷手したまゝ二階に上る。窓の前に立つて硝子越しに外を眺める。夕方の薄い光りを眞ともに浴びて女子商業學校の洋館が眼に入る。少し鼠がゝつた高い窓の純白なカーテンが絞られて、學生が覗いて居るのが小さく見える。眼も口も凡てが茫乎として、何んに結んで居るか髮も解りにくい、束髮　日本髮　明瞭な斷定は下されない。如何しても見極めない中に承知が出來ないので熟と瞳を張つて見る、解らない、白い呼吸がかゝつてしまふ、尙解らない、頭が苦茶くくして來る、漸く溫めた手を胸から出して、硝子を拭ふけれどはつきりしない、自烈體くつてとうくく障子を力任せに開けて首を長く伸す、でも茫乎としてる、其中だんくく明瞭になつて、日本髮と定めた。

勝負に勝つて優勝旗でも得たかのやうに、嬉しくて嬉しくて、胸をズツと撫で下す、其の代に眼が疲れて痛みを覺える。

「靜かだね」つて母も一人であきたと見えてよつて來られる、得々として今の話しを持出したらいやな人だ、何んて劣け嫌ひでせうつて笑はれてしまつた。

翌日の夕方、空が橙色に染められて、餘り美しかつたので門へ出たら、昨日窓で苦心して日本髮と見定めた其の當人らしい格構の人が、門から出て來た。あゝやつぱりこの人、日本髮であつたので思はず微笑んだ。

（評）題材が餘りつまらない。

春まつ心

伊藤夕陽子

「何人も無斷で出入を禁ず」と筆ぶとに書いた三木の果樹園。古風な黒ぬりの押せばきいとひらく、小門をくゞる時。何者にか打勝つたやうな一瞬の胸のきらめきを感じる、それと同時に慾の深い持主のおぢいさんが又今日も來てはゐまいかとも思はせる。

岩と岩とのつなぎ目を立切つてこしらへたやうな一寸暗い赤土道をのぼると、櫻や梅桃が林のやうに立並べて植つてゐる。その艷陽のころのポカくくと暖かい陽のさす櫻樹のもと、ひらきかゝつた花びらに強い接吻をして心の限りを夢見た。

彼の時の印象が一年たつた今立派に殘つてゐる、醉ふるやうな想を此園内に運んで佇みくくと繪卷物でも繰ひろげる氣で一人で興がつた。

歩むともなく果樹の林を拔けると、一寸小高い丘に平屋造りの別莊がある。私の大好きな家である。廣い庭には見事に曲りくねつた松を背景に赤白の岩つゝじが美しう、櫻は壁のやうに家の周圍を取りまいてゐる。「來たの今日頃はのぼるだらうと思つてゐたさあ上つて」思ひ切つて

高い鼻、何處かに血の色の失せた長面口元と目もとに愛嬌を含んだなれ安い風姿、丈は私よりもずつと低い、青春の頃はさぞと思はれるけれど早四十上の奥さんです。

子のない人の数には洩れず、ポスと云ふ白の毛の行く〳〵尾をふつてジヤレつく小犬が生れてすぐからマリ子と云ふ猫がよい年のお婆さんになつたのと置いてあります。

四十の人になぜ私は親しむのだらう、友達かなんぞのやうに、よく心が合ふと云ふ人もある。

だけれど私は親ゆやうに隔なく奥さん〳〵となづくつまり可愛がる人と云ふなつかしみより外に人も来む眺望にとんだ、此果樹園を跋渉し心のまゝに慰むをゆるす、此丘此野邊が私が此處へ來る唯一の目的と云つてよい。

松の梢から厳原の灘は一目にみえる。久田村に續く砂濱、鑛石をつむ船、異國の旗印かゞ、玄海を通ふ船にみる事の出來ぬ大きい船體が遺憾なく現はれる。波立ぬ浦曲に清い水の面暖かさに眠る鴎の群は平和をうたつておる。

町と云へば町、塵も埃もなけれど一歩踏み出して此處へ來ると、我家のせゝこましい周圍に見ることの出來ぬ趣きがある、後の畑でにやら唄ふ農夫の聲も長閑な午後になるとお茶がはひつたときまつてお呼びなさる。



（地蔵）呂昇の聲　横濱　はま路

用水路

徳島　蔦紅

一坂登つて四方の晴れた野に出た。赤土の香のし相な淡赤い用水路が、ずうつと向まで見渡される。夕風に浴衣にしみた汗が身に沁んで冷や〳〵する。

セメントで固めた水路に微かな音を立て少し濁つた水が滔々と流れて居る。狭い水面に小波をたてゝは草の少し延びたほとりに消え消えして居る。

雨を渇望して居るに係らず此所は、廣い田一面生々として土の色生々しい新田去年洪水に沼した黒い土の田には水が溢るゝ限りに流れ込んで居る。今年の秋が何様と微笑まれる。

水路に添つた堤を友と二人浴衣に風をうけて徐々に歩を移した。日は何時か没して居た。ふと見ると水面に煌々と月の影が流れて居る。仰げば十日許の月が淡い瑠璃色の空に輝いて居た平和な心で二人は語り乍何所かの庭園でゝも散歩すら曲り曲つた水路を、る様に思つて居た。

水路を修繕でもしたと云ふ様な二人の男に逢つたが両方に不思議な色を見せなかつた。

田がきれると松林や櫟ばかりの山が片方に續いた。

宿直の夜

沈丁花

小使室には、小使爺と私とでランプの光が搖れる程笑つた。あんな片目の若い子があの宿直の老先生の代理をするのかと思ふと可笑しい。何だつてあんなに笑つただらう。人間の心なんてものは火の樣なものだ。燃えさかつてる時ば一寸のものでも燃える。一寸した事でもをかしいもの。斯うして一人になると、可笑しくも何ともないぢやないか。寧ろあんなに笑つた事が莫迦らしくなつてくる。日記もかいて仕舞つた何を書いたか知らんが兎に角、西洋紙四つ折綴一頁をうづめた。元より讀み返す限りでない。書き溜めさへすればいゝんだもの殆んど義務的になつて仕舞つて、恐らく〱、四角でも三角でも何でも白くない樣インクさへ塗つて置けば好いのだらう。夜の室は靜かだ。ランプの光でも動かないし、鳴かない。ランプがジャーと鳴いたとかは靜かな夜と云ふ時の白の樣に成つてるのに、して見ると、今迄そんな事を書いた人は嘘かも知れぬ。掛けた羽織も、白いカアテンもゆらともいはない、いつまで見ておいても……ア丶目が疲れた。音を聞き度い!!!。動く物を見たい餘り靜ふたから。なれと心臓の鼓動など聞えやしない。ドキツ〱と手に取る樣だなどいふ事も云ふがあてにはならぬ。然しもつと靜かな夜があるのか知ら?……何か音がする!何でも女運動場の方だ。何の音だらう。外はこれでも風があるのか?。戸が動くのぢやあるまいか。アレ又なつた。一種のリズムをなしておる何といふんだらう。パサ〱でもガパ〱でもない。サラ〱でも尙ない。何といふんだらう?全神經が聽神經の方へ加勢に行つても聞きとれない。いや、とれるけれど、分らないのだ。聞き分けても、何の音といふ意識とどういふ字で表白せば好いかを數へる事が出來んのだ。神經巾幅では何をしておるのだらう、何の音だらう。何の字で書けばあの音になるだらう。餘ゝ字を知らないぢやないか。いや、字は知つてる。片假名を五十も知つてる。足らねば平假名にでもかくがどれとどれを組み合せれば、あの音になるのだらう。……アアじれつたい。アレ又聞える。リズムカルな不可解の音!夜が明けたら一つ見てやらう。もう何時だらう?九時に此處へきたのだから。どれ位だつたか知らん……一時間か。餘り短かい、二時間……もつと長いかも知れない。火がもう無くなつたもの。背中が冷え〱となつて來た、十時、——十一時 —さう〱十一時すぎ位に憶えておよう。

ア丶もう六時間でこの靜かな夜が無くなるんだ、惜しいなア……いつまでもおきてランプをつけて、机につかまつて居ようかしら……でも夜は錠をかけた戸からでも逃げて行くだらう。明日教室へ出ないのだといつまでも逃げない樣捕へてるけれど……。明日又いろんな音をきくのだらう又いろんな顏を見せられるだらう……。

お針のひまに

近江 堤螢草

溫かな日の光と、パッと明るいガラス障子雪降のあしたと云ふ言葉をなるほどゝ、うなづかせる午後である。私は其溫かいポッと上せさうな障子ぎはに陣取つて賴まれたお光さんの羽織を縫つて居る。飛々に絣の入つたはでな大島に白やつはしの裏意氣なあの人にはきつてよく似合ふだらう。やう〱行の方のふりをくけ上げてホッとした目に、見るともなう庭を見た。四角いガラスを通して見た庭はなぜか美しい。拭込んだ向ふの緣にサッと白い影がうつつてある。朝からのお照りにさしも積つた雪も大方解けて一番計りよい燈籠の上で三寸計り。白衣かついだ楓もざくろも元の樣に見苦しい肌をあらはしかけた。そばの鉢植の萬年青の實がいくつも抱き合つて黑い程青い葉の下から鮮なカラーを見せて居る、丁度珊瑚の根がけを見る樣な?又には精力家だつたシノブも全然意氣地なく盛られた土に弱々しうしがみ付いて居る、何と云つてもこゝでは椿が王樣であらう。こは〲しい葉の梢はまぶしい程丈高に庭の凡てを見下した偉姿……あのポトリ〱と落付て思切りよく落花する樣も王樣でいゝと思ふ。雄々しい異性によそはへて私は懷しい。さつきからピチャ〱やかましく滴して居た雪解が、いつの間にかこまかい砂を分けて少さな水溜に成つて居る、ジッと見てると、後から後からおつかける樣に落ちて來る、そこにはたえず波紋がゆれる折々風の都合でひよいつと仲間を離れて平らな砂地に飛

出す、けれども大抵はうまい事落ちて、そして其無形の一員?としてたえず小さく活動する、さすがに飛っちりの距離は短い。すぐ傍の伏見のお山で記念にとて根つこぎして來て、生え付くいや生付かんを爭った何とか云ふ草——丸い葉の直形二寸許りで蓮に似たそして白い花が立派に咲く——がビチョ〳〵にぬれて行くだけ——針さしにもたれて顔をつき出して居たでか、透明なガラスがボウと曇って何だかぼんやりして來た。左の人さし指でくる〳〵〇を書いて見て小さい時よくこゝで榮ちやん達と、痛い程に顔を押付て白く成つた赤く成つたと遊んだ事を思出してふと笑ひかけた。

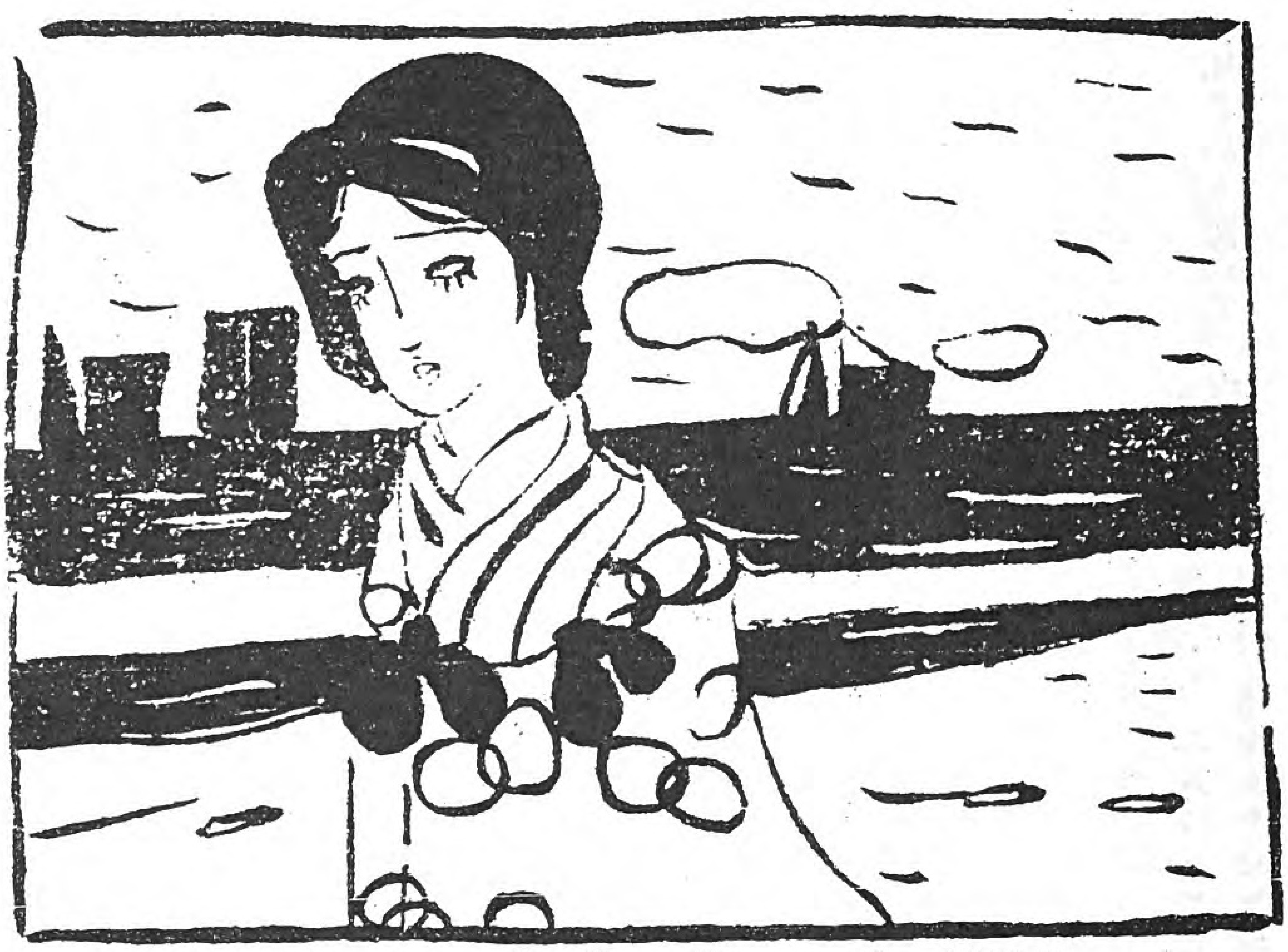
行くところまで

信濃　世良田優子

え、行く處迄行つてしまふのです「此頃の私の心を表はすには此言葉以外に適當な語を見出す事は出來ません、眼の前に投げ出された二つの道、その道の中央に立たせられた私は、どう解決してよいのやら唯血の滲み出る樣な苦しい切ない思ひばかりされてゐるのです。

いつそ、かうして悶えてゐる中に心臟の血が皆なく〳〵したゝり落ちてしまつたならばかうした不安から逃れ去る事ができませうに。周圍の事情は柔かい情緒を攪き亂そう〳〵と迫つて來るではございませんか、多く物言ふを好まぬ私は唯「あゝさうであつたか」といふ此短かい言葉と一所に閉ぢた眼からは止め度なく涙が落つるのでした、そして此「さうであつたか」といふ言葉が重なる度に溫い涙は落ちて、落ち盡して冷たい石の樣な心に醒めてしまふので御ざいませう。

柳は綠り花は紅を誇った處女の十八の時、それは私の友の上に降り掛った出來事なのでした美くしい覆を通して見る樣な憧憬的な心を——突如として掻き破つて血まみれに掻き亂した恐漢の毒手——その上にその血まみれの痛々しい有樣をジッと上から見下してカラ〳〵と冷笑してゐる其態度——あゝかうして幾多の處女の心を踏み散らされてしまふものは恐しい毒手ではございませんか。はつと氣の付いた時にはもう友の心は血がにぢみ出してゐたのでした、其痛々しい胸に友は私の手をギユッと抱きしめて「優さん私はね、此心を全かり告白して死——死んでしまひたい——」。「世は一人で行くべき處」といふ事が頑固いく凝りとなつて心にわだかまつてしまつたのです、私の心を表はすには灰色が徹底した色なのです、けれども——けれども——まだ若いのですもの、眞紅の帶上もつけます　あゝ私は矛盾してゐるでせうか? だから苦しいのです悶ゆるのです、も一度私の悟りを深くして灰色に徹底してしまひたうございます、そしたならば心の不安も無くなるでせう、自己を考へずに運ばれてゆく女は幸福なのです「優さんたとへ貴女は醒めたとて冷たい人にはなつて下さいますなよ」って友は泣くのでございます醒めたとて冷たくはなりませぬ——醒めたとて冷たくはなりませぬ——苦しい胸を抱きしめて私は行く處迄走るのだ——走つてしまふのだと叫ぶより外には仕方ないのです、いゝえ走つてしまひます——走つてしまひます——そんなに泣いては下さいますなよ、そんなに泣いては私の頬もかうして涙に朽てしまふのでせう。(終)



（入賞）春の海　豐前　みどり



○姑

月草女

或る夜、ひそかに二人は野の家に歸つて來た。

其處には男の爲には、たつた獨りの老いたる母親が待つて居た。

勿論母親は兩手を擧げて、喜んで二人を迎へた。

「ほんとに淋しかつたんだよ、お前」かう云つて　皺のよつた手をもみながら、死んだ妹娘に線香を上げつゝ、女の方を振返つて、

「花さん、あんたも此處へ來て、御禮を云ふがいゝ、二人がさうなつたと云ふのも皆、死んだみさ子ちやんのお蔭なんだからね」云はれて女は神妙に佛壇の前へ坐つて手を合せた。

自分の友達はこゝに居る……、そして自分はもういつの間にか、大好きだつた友達の母さんの子になつて終つた………

實母に早く別れた女は、始めて「母」と云ふものを持つ嬉しさと、誇りと、そして、不思議な淋しさとが、溶け合つたやうな思ひが込み上げて來て、思はず凝然と涙ぐんだ。男はちらと見たけれど、何にも云はなかつた、流石、我家へ歸つて見れば、萎びた母親の顏も、吹き込まれた長火鉢も、何一つとして懷しからぬものはなかつた。

始め、二人は二人きりの生活を願つて、許されぬ戀見てから逃れて、遠く、海の邊へ走つたのであつた。

朝は、夜の明け切らぬまへから、跣足のまゝ、砂路をサク〳〵と踏んで、砂山を越えて、大きな浪の前に立ち、夜は薄暗く人の顏をボンヤリと見分けらるゝ頃から、コツソリと宿を出て潮の香を嗅ぎに行く。

人目を忍んで晝は淋しく書を漁り、歌を唄ひつして過した。

何時の間にか二人は單調に倦んで終つて、激しい甘い接吻もだらけて來れば、女が男の胸に顏を押しあてゝさめ〴〵と泣く事すら稀になつて來た。そんな事はもう男にもうるさかつた。

「あゝ、矢張り母さんでも居る方が宜いね」這麼事を云ひ出した。

そして、到頭月のない夜、暗い畑道をてく〳〵と歩いて、其儘又故の家に引返して來たのである。

始めて女と知つてから此方、自分の方に許り夢中になつて、まるで親の事なぞは忘れつくして居たのが、男にはしよんぼりした母親が急にいぢらしくなつて來た。

「あゝ俺もやつと落付いた、お母さん、もう心配はさせないよ」いつになく染々と優しく云つた。母親は小さな丸髷の根本をゴシ〳〵掻き乍ら苦笑ひをした。

「民次、戯談ぢやない今度ばかりは隨分苦勞をさせられたよ、それにさ此間は花さんの家に呼ばれて、「貴女が逃がしたのだらう」とか何とか手ひどい事を云はれちやつた。全く口惜しくて成らなかつたけれども、何もお前がした事だし」と遣瀬なさゝうに間を置いて、「默つて歸つて來たが……　……あゝ………」と仰山想に深いため息をした。

「もう〳〵好い身内から嫁なんか探すもんぢやない」

お花はハツとした。そして心配相にオヅ〳〵と男の顏を見上げてまたすぐ疊に眼をおとした。もうまつ毛の長い眼はうるんで居た。男はチヨツと舌打した。

「何も今更、そんな事を云はなくてもいゝぢやないか、母さんを安心させようと思へばこそ、かうやつて二人で歸つて來たんぢやないか」

その夜、二人はいつになく默つて寢た。わけても女は何も云はなかつた。只、時々其やせた肩を顫はせて欷をのむ事があつた。

「父樣、許して下さい」胸の中で云つて捨てゝ來た、たつたひとりの父親を思ひ出した。

翌る朝、お花は暗い内から起きて、物慣れぬかぼそい手に米をといだ

り、水を汲みに井戸端までお百度通ひをしたりした。

そして洗ひ物を濟せて勝手口から這入ろうとすると奥の方で疳高い母親の聲がしたのでハッとして立止つた。

「そりや、さうだらうともさ、お前にはもう立派な教へ手が、いゝえ先生が付いてらつしやるんだもの、遠慮もうろ／＼婆になんか用はなからうともさ」

「馬鹿な事を云ふもんぢやない、いつ二人が母さんを邪魔にしたい?、そんな、ヒネクレた事許り云はないでちつとは順禮にでも出ようなんて心掛があると僕も母さんを大事にするぜ」

「何だつて? 私を順禮に、此としよりを順禮に出す氣かえ?」

「見つともない、止して下さい、そんな大きな聲をしなくともわかつてる、只話しぢやないか」

「ヘンいゝだらう、それより二人で法界やにでもなつておあるき」お花は戸袋にもたれてしく／＼泣いて居た。彼女は自分の想像のすつかりはづれたのに驚かされた。



見物人　茨城縣　稲田としこ

少くとも、美佐子さんの居る時分の母様はあんな人ぢやなかつた。それはく／＼眼に入れたい程友達を可愛がつて居た、勿論自分も彼麼に可愛がられるものだと思つて居た。あゝ、娘と嫁……

噫自分は親を、獨りの親を捨てたのだつた。何故甘い戀の香なぞに欺されて來ただらう。

「父さま、許して下さい」思はず云ひかけて聲を呑む後にはいつか冷たいうすら笑みを持つた娘が、ぢつと立つて見下して居た。(天賞)

弱き心

神戸　秋花

今日も一日を有耶無耶の裡に過して了つた。男の心と、女の心とは斯うも相違のあるものだらうか社會に出て活動する男と、終日家庭に在る女とだもの、其處に懸隔はあらうけれど、たつた一筆、出した手紙に對する返事を書く閑もないとは、何しても受け取れぬ。

あんまり私が熱し過ぎるのかも知れないけれど、彼の人も冷淡なと思ふ。生活の爲に朝から夜遲く迄間斷なく執筆する人にして見れば、他の用事には筆執る事も物憂いであらうけれど、陰で待つ女の心はさうした事を考へては居られない。忙はしないと云ひながらも、粹な格子戸潜ぐる閑もあれば女を相手に馬鹿騷ぎの徹夜する時もあるではないか、やつぱり男の心は冷かなのだ、そして一人の女を思うては居られないものなのだ。一日の間に四五囘も女の聲で電話がかゝつたり、机上には藝妓の寫眞を並べたてゝ浮つ調子な話をしながら事務がとれて行ける職業だもの考へて見れば私一人よい子になつて熱し切つて居るのが哀れなやうにも思はれる。

まさか私といふ女の事が腦裡にないと云ふ譯でもあるまいけれど、さう一心に女の事を思ひつめて居るやうな甘い男ではないのだらう、星や菫に憧れて居る書生や女の境遇がつくづく淡ましいやうにもある、けれど、今若し彼の人が星や菫に憧れるやうな男だつたら私は厭だ、もうさうした甘い戀を味ふ年でもあるまいし、やつぱり辛くとも、苦しくとも何處迄も氣強い男を焦れて居るのが私の性に合つて居るのかも知れない

此間十時頃に來て、

『まあ、早いのね』つて云ふと、

『早いだらう、昨夜は家に歸らなかつた』

『何うなすつて？』

『編輯の濟んだのが今朝の二時だもの、夫から呑みに行つたんさ』

『そして其まゝお泊んなすつたの？何處？』

『社の近くで……、親切に云つて泊めて呉れる家があるからな』

別に何ともなかつたけれど、それでも好い心地はしない、彼の人は平氣でさうした言を私に向つて云ふ。

二人は別に戀して居る仲ではない、心では戀しておるかも知れないけれど、また語りあつた事はないのだもの、あからさまに妬く事も出來ぬ他處々々しい間柄併し心では充分戀して居る、時には切ない胸の裡を打ち割つて彼の人の腕に縋つても見たい氣がするけれど、戀の花も咲かせて了つては直に散つてしまふ、咲せぬ間が美しいのだ、手折つて家のものとして了つては直に飽きもするだらう、斯う思つては縋りたい腕にも縋り得ず、甘い戀も嗅がずに強い事ばつかり云ひ合つて居る。白いアークの光に二人の長い影を地上に曳いた時、行き摺りの人は二人を何と思つて見るだらう？善く見て夫婦者か、惡く見れば野合者、怪しく見れば明るい街を厭ふ嬉しい戀仲位が落だらうと思つた。

『斯うして歩いて居ると甚麼な氣持がする？』

と尋ねられて、

『さうね、別に何の氣もしないけれど、まさか惡い氣持もしませんわ』

と答へた、夫でも矢張り暗い街の方が歩きよい、アークの下は何とな氣が引けるやうで厭だつた。

彼の人が以前非常に放蕩したと云ふ事を私に話して聞かせた、夫が今に私の腦裡深く刻みつけられて忘られない、そして冷かな男の態度を見る毎に夫を連想する、社を出るのが遲かつた等と云つたつて當にはなりはしない、屹度又何處かへ這入り込んで、美しい女を相手に遊んで居るのだらうと思ふ、さう思ふと耐らなく情ない氣がしてつくづく自分と云ふ者を憐まずには居られなくなる、生れて初めて男といふ者を腦裡に刻みつけた最初から、斯うした事に惱まされなければならぬ自分がかはいさうにもある。戀といふものを知つて、斯うした辛苦を味ふよりも、一層奇麗に男の事が忘れて了ひたい、知らぬ以前に還り度いと幾度か我心を叱つても見るけれど、心深く喰ひ込んだ戀の根を斷ち切ることが出來ない。

殊更に都合上かは知らないけれど冷淡な男に對して耻しい迄に、手紙に電話に其人の樣子を知らうとする私の心が情ない、弱い心がうとましくもある。私は戀に囚はれて理性を沒却しようとして居る。

此調子で募つて行つたら甚麼結果になるだらう？身も心も滅されて了つて殘るは魂のぬけた肉體のみ……。

斯う思ふと我と吾心が耐らなく淺間しいものに見える。消しても〱燃えかゝる情の火の手を、理性の水で消そう〱と焦つて見るのだけれど、到底私の弱い心丈では消し止め得ない。一層、男の毒舌で美事此戀の根を止めて欲しい、再び芽を出させぬ迄に枯らして欲しい。なまじ

口先丈で培はれるのが又なく辛い、厭ひの種だ。二度と男……彼の人の顔を見るのも厭だ！といふ程愛想づかしが云つて欲しい。

たま〳〵逢つて愚痴を云ふと、

『女なんて云ふものは要するに意志が薄弱なんだ。其處へ持つて來ると僕の方が理性はまだ上だなあ』

這麼事を言つて弱い私の心を嘲笑ふ。

熱情を心の奥に包んで冷淡と云ふ二字に表面を繕ふ男の心は、感情を披瀝して泣いたり笑つたりする事の出來る女よりは幾倍かの苦痛を感ずるものだ。彼の人はかういつて私の心をたしなめようとする事もある。

私は私の弱い心の處分に困つて居る。

（地寓）

幻影

堺市　茅草

私は何か知ら「ハッ」と眼がさめた、體はビッショリと冷汗で寢卷がべと〳〵してゐる、眼をこすつてから、パッチリ開いた瞳で……何一つ動ぜぬ冷たい夜の空氣の中で獨り燦として、青白う流れて居る瓦斯の光を見た、ジッと眺て居る内に眼はだるく淡い痛を感じてきた、強い光は只青白く、此の室の何物かを呪ふ樣にひろがつて居る、私の神經は靑く刺戟されて、段々、光が恐ろしくなつてきた。さう、消してしまふ、消さないまでも何處かへやりたい、さうして强烈な光から逃れ度い……けれど、起て仕樣とも思はない「其内に誰か來るだらう」こんな漠とした考で又、眼を閉ぢた、さうして私は昨夜からの事を思ひ起して見た——

昨日の夕方、私は常より夕飯の早く終た臺所の、何處からともなしにせまつて來る夕暮の寂しい遣瀨ない灰色の空を、天窓のガラス越に眺め乍ら、ボーッと逆せた頭にKさんの事を思つて居たのだ。默て東京へ行つた其の人が羨しく、取り殘された樣な氣がして、輕い腹立しさも感じる、氣ばかりあせつて、初めて逢た時の事等思ひ出すと、底がゆいいらいらした氣持がして取止も無い空想をゑがいたり、あれこれとつまらぬ想像に心を、漏らしたりしても、どゝのつまりが氣ばかりあせつて、何んだか斯うじつとして居られない樣で、私の全身を流れて居た血が一時に、歩を變へて頭の方へ〳〵と上て來ては、出逢た血液が、ひどい力で、ぶつかつては上へ〳〵とゆくので、私はたまらない程苦しくなつてきて、側の障子から、階棚、おへつついまで、くる〳〵廻り出して、頭がふら〳〵、妙に足許までヒヨロついて、いつしか私は冷たい板の間に、倒れたのでした。日頃少し變つた事にでも逢ふと、すぐ興奮するくせのある私は、とう〳〵眩暈をしたのでした、それから私は、どうしたのか只、此室へ運ばれたのが夢の樣でした——ふつと眼覺た時、急に頭の重さを感じました頭にはぬれた手ぬぐひがのせられてありました。「おゝ眼がさめて」といつてじつと見下したのは、お母さんでした、私は默てまじ〳〵とお母さんの顔を見つめました。瓦斯の光を眞正に受けた、細面の青白な寒さ、肩を落した後が靑く骨立て見える、最う五十歳だものと思ふと、胸から込上るやうな悲しさをおぼえるのでした。——

ゆふべの光景がハッキリ浮いてきた、あゝすまない私はすまないお母さまに、父さまが亡くなられてから、末子の私を眼の中へ入れても、痛くないといふ程可愛いがつて、一寸した事でも氣にして、ヤイ〳〵さわいでくれる母さまに御心配かけて、母樣すみません、許して頂戴妙はく



まゝごと　澁谷　眞木富士江

はつまらぬ男の事等思つて遂に、此の仕末、おゝすまないく\と思ふところの輕からぬ、罪のために身も燒きただされる樣な苦しさが起りました、然し私の胸も段々柔になつて、始め罪に對した悔も一分一分立つに從つて散じて、思ひは罪の片割のKさんの上に走りました…あの、にこりと笑むと白玉の樣な並びの美い歯が見える、その齒だけがちらく\浮てきた、私は手でつかんで見たいやうな氣がして段々、私は熱してきた、さうしてさうく\私の血汐は足の先から押上てくる、それでも私は、夢中になつてその白いポカく\浮んで居るものを取らうとあせつて居ると、又、すらりと背の高い飛白を着た男の姿が浮く、ずると又、私はその姿に引きづられく\てゆきながら、ふつと氣がついた、Kさんは東京に居るのだ、泣いてもわめいても聞えないのだつた、東京、東京と思てる内に又、ピユーと風にあふられた砂がもうく\と上る中を、てくく\歩いてる男の姿だ、今度はじつと影を見ようとしても下手な活動寫眞の樣にふらく\して居るや

　私はこんなに男の事を想つて居のるか知ら?

　男の強い幻影に悲しい懐しい恐しさをおぼえて、身は絶え間なしにブルく\とふるふ、男の爲に病氣になつたのだふとこの叫びが聞こえた、男の爲にだなんて、おゝ私はどうしよう、どうすればくいゝのかと思ふと身も心に一しよくたになつて苛立てゝ、ふつと男といふ字が大きく頭に浮たので、ハツとすると背中からパアと冷水でも、かけられた樣な氣持がして、私はすつかりと夜具を被つた。（入賞）

下宿屋の窓

東京　寄木靜香

　靜枝の今度移つた家の裏の方には下宿屋があつた。

二間半ばかりの庭を隔てゝ一丈ばかりの石垣がつまれ其上に椿や八つ手等の木があつて又一間ばかり石垣かつまれその上に下宿屋の窓がづらりと此方をむいて並んで居た「御前たちはよほど行儀をよくしないと上から見下ろされるよ」と母親は頻りに注意して居た靜枝もあの窓には注意深い目をそゝいで居たその頃は丁度九月の初め――

　母親が乾物をする外はめつたにその庭に妹のお光も出なかつた夕方等靜枝がなに氣なく雨戸をしめてふつと見上た目に下宿屋の窓際にジツと腰かけて此方を眺めて居る學生等を見た時には殊更すまして戸をしめ終りの戸を力づよくピシヤリとしめてほゝ笑んだ、日曜だつた朝から下宿屋の窓は騒々しい面白さうな笑聲等もしきりに起つて居た、ジツと解物をして居た靜枝の耳に「僕なんかく\」といふ優しい若い男の聲がしきりに耳についた。

　あらさうぢやないわよ」突然蓮葉な高聲がふつと聞えたので無意識にふと立て障子の蔭から見上げた、八つ手の葉かげに青磁に大柄な竹の形のいゝお太鼓と少しうつむき加減の白い頸筋とがきはだつて見えた少しも動かない畫の樣だ――と「まあいゝぢやないか」男の聲がして女は坐つたんだらう姿が見えなくなつた靜枝も元の所に歸つて坐つたけれ共好奇な瞳を輝し耳をそば立て心をしづめて彼等の物語りを聞かうと務めたけれ共意味のなさないとぎれく\の言語よりは耳に入らないが女と男との睦しさうな、音律は流れて來た「自由だと」第一靜枝は思つた私にはいつあんなに自由に若い男と話をする時が來るだらう――いつあんなに大膽に下宿屋に男をたづねて行く樣な心になるだらうキユーと赤い絹絲をポツンく\と切つては考へた、いつまで立つてもく\――、いつしか赤いモミの布はすべて解かれて膝の上におちつきのない樣にからんで置かれてあつた其上に白いふくやかな手が遣瀬ない樣におかれてある――

　それから靜枝は十月の初めから十二月の中頃まで伯母の家に行かねばならなかつた十二月に入つてから久し振りで家に歸つて雨戸を開けた時下宿屋の窓からは田舎なまりの太い聲で小言をいふのが聞えたそして今迄お徳さんく\といふ女中を呼ぶ聲がおせいく\と變つて居た靜枝は午後學校から歸つて來た妹に下宿屋で女中が變つた樣ねえこん度はおせいつて云ふんぢやないのといつた。

　さうねあのそりや姉樣の居ない時いろんな物を窓から落すのよ本だの座布團だのそして雨戸まで落したのよ。

　さうしてどうして、靜枝は面白さうに聞えた。



詩

春の雨

栃木　小森惠津子

しめやかに音なく／＼──
細い雨が降つて居る
やさしい雨
あつたかい雨
夢の樣な雨
土が柔かい、なにかよい香がする樣だ
──蛇の目傘をさして若い女が行く。
その柔かい土の上を。──柔かい足どりで。
其の袖は細い雨にぬれて。例へば海棠の蜜の樣な雨にうなだれた如く──重くて地に落ちさう。
あつたかいまわたでつゝまれた樣な朝
氣持のよい朝
心のゆるぶ朝
とろするとだるさうになる朝だ。（人賞）

（評）氣分詩としては上乘のものだが、別に新しくないのは惜しい。

眼

茨城　丘はう

愛人よ汝が目は愛し、
悲眼めつゝ静かざれば
汝が目はうし。
ふと悲しき日の──夜のうちに蘇きて見し
その再びはえざる種の如く、求むれど──
また涙の腕をよせて
汝がまみをあげしめんと求むるも
求むるも、せんなや。（人賞）

（評）潜在せる才氣は未だ充分に發露しない。

人形と緋の長襦袢

濵松　りう子

──町はづれ──
すしやのゝれんの灰色のしみ。
其奥のいつもお客のないちやぶ臺の上に
うつむきたふれた片手のない人形よ、
てふ／＼髷の緋のかの子はむしりとられて
亂れた髮の其首筋の青い細さよ。
みだらな戀に、ふみにじられた、
破れた心とくさつた肉體
お前はかうして、夜と日を、
泣いて／＼泣きかしても
言葉をかける男もないだろ。
みだらな酒のゑひのむくいに
からだと心がなへはてゝ、
泣いた姿の其まゝに、冷たく息が、
とまつた時。すしやのあるじは
あさの葉の色さめはてた、其腰帶を、
むずとつかんでおきへのつめたいむくろは
どこの野原にすてられやう──。

○

長い一夜があけそめて──
あかつきの白い息が、
そろ／＼足ぬき女の寢室に忍んできた時、
さよならと、疲れつくした電燈の
ゆるんだ聲で！　漸れる光。
ひとり！　切なげに宵の歡樂に執ねくも
白い眺の女のね息を、なつかしげに
そつと吸ふておる──おめしのきものよ、
しまお召。緋ぢりめんの長襦袢。
夜具を通してヌク／＼と、
つたはるぬくみにひつたりと、
からだのまゝによりそふた、
むつちりと高い肩のあたり腰のあたり。
縮のお召は波うつて──。
×の快樂も忘れかね、
なやましげなるものおもひ──。

（評）人形の方は詩らしい形が出來て居らぬ、後の長襦袢の方は詩らしい氣分が漂つておて好い、チヤーミングな作だ。

木瓜

上毛　雲路

春ともならば
丘に咲く木瓜の花ぞいとわびし
血か
ほのほか
わがもの、唇の色か
うれたさよ
木瓜の花の紅に踊らば
うれしくも又やるせなく、

わたしの心がすゝり泣く
心の泣きも疲れて
花ひとつ摘みくちづくれば
甘き香のうちふるふ

小曲

わが魂にくひついてゐる色なき影
朝に夕にしのび出でわたしの心を なやます色なき影
鐘の「刹那」の音のごとく
色なき影の泣き笑ひ

（評）小曲の方が好し。

桃色の幻

長崎 町田とし子

×

赤くトロ〳〵と燃えて居た
私の若い魂が……
灰色の闇をかすめて
一筋にズウ〳〵逃げて行く
桃色の細い線を引いて……

×

追ふても〳〵
ひた走りに逃げて行く
若い日の幻よ!!

×

もう私はお前に執着すまい
すみやかに逃げて行け
若い日の幻よ!
もう追ふまい……追ふまい
桃色の線を引いで逃げて行け

×

現在に執着し
お前を呪ふた歌唄ひ
桃色の一筋を
指先きでつまぐり、切斷して
私は遠い青白の彼の美しい!!
原始に立ち歸るのだ
さらばすみやかに私に背を向けよ!!

（評）象徵派めいた歌ひぶりだが、未だ能く了知されてゐないだけ、あぶなつかしい。

忘られし姿

信濃 八重樫美草

灰色に吸はれゆく光
暗黒色の枯木の幹の半面をうす紅く
彩どれる光
蒼白き晝の如く
暮れし夕の跡をそこゝにたゞよふ
光の色素
見つむれどより所もなし
さても繁き我悲しみよ
遠く走する心にうち見やれどもすぐ
に折り返へさるゝ果近き目路
蒼白くそゝり立つ山波のうねりの長さよ
求むれど得られぬ寂しさにかへり來る瞳よ
灰色絹のうすら冷きに
かさ〳〵と力なき音につゝまれて
千桑つりたる壁ぎはに
忘られし者の如くとり殘されし我姿。

ゆるみし肌のつかれ

氣まぐれ者のたわぶれか
火に解けゆく鉛の如き心地
じめ〳〵となま暖かき水に漬りゆく如くにて
なげ出したき此の心地
冷たきになれし肌のゆるみしつかれ哉
氷をふくむ大氣の鋭さ
幾日を降り積りふり注ぎ
物皆の默せしを
たわれ心
二十女の氣まぐれにもて遊ぶ人形が
積りし雪の上を
音なく降り注ぐ雨の日
なまぬるき風のなやましき哉。

（評）二篇とも好い感じはあるが、今少し詩の約束を重んじて欲しかつた。

斷片

倭香

女つてつまらないものだわ
そりやさうさ昔から弱いものときまつてるんだもの
誰がきめたんでせう?
さうしてだれが強いんでせう!?
くどい女だなあ。そんなこと知るもんかい。
あゝわるかつた男よ〳〵妾の嫌ひな男よ 憎らしい男よ。
あゝあれださるで狂者だ。
氣違ひ?エ、どうせ妾は狂者よ
あゝ口惜しい!
けど。どうして女は弱いんだらう?

嬉いものは何故女なんだらう？
実にやきつぱりわからないわ。何故？
何故つてあなた
薔薇の瀧を見たつて――。
浮間の畑を見たつて――。
あゝわからない。

○

嫌ひな奴のおいてつた手巾にまで
コツソリ香水をかけて　おくほど此
頃は妙に人なつかしいんですよ
何故つてきかなくつてもいゝぢやあり
ませんか
現在さうなんだもの。

かうじつとしてると妙に淋しい様な死
んじまひたい様な氣になるんですよ
變だわねヒステリックでもない妾が。
そしてね平常は馬鹿氣てると思つて半
狂人なんて詩が垂上に嬉しいのよ。
本當に變だわね――。

赤い花

深川　矢澤榮子

紅色の椿の花が
みどり葉の間……間……に
さゞめき合ひ
ひそめき合ひ
明るく輝る冬の太陽をあびて……
自分ばかりクインの様に
咲きほこつた赤い花

花瓣の肌におびへつゝ
遣瀬なくも花はなげく
泪ぐむ様な顔しながら
何者かを恐れる如く
それでもおど〳〵と咲きほこつて居る。

二月の夕

苦蝶子

淡々しい薄明の漂よひ
遠くに聞ゆる笛の音
二月の空の靜けさ
なつかしい夕ぐれの紫のくもの棚引くとき

笠森寺の鐘の音が哀愁を帶びて
我さとに、我村にひゞきくるとき
やるせなきかなしみぞわく
見よ、瑠璃色の空に漂よふ白いくも
おゝあのくもが私を追つてくる様
恐ろしい、恐ろしい
ジリ、ジリ、ジリと
夕ぐれの哀愁の色
おゝ
やるせなき思ひ出に泣く
二月の空の冷たさと、寂しさ
薄く突つた私の神經が
いら〳〵と
やるせなき悲哀の色。



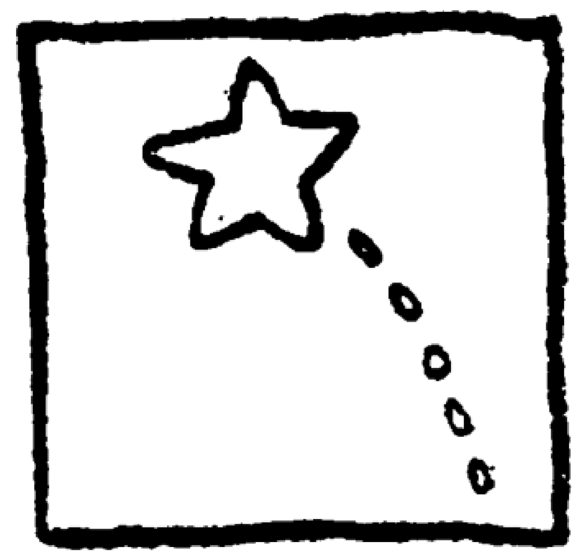
病床のひま　北見常磐子

一燧火

姫路　九十子

蜒涙をみつめてあれば
音なくハラ〳〵と
少女子の咲ける面もち

しづかにも更し夜に
たゞ一人みつめてあれば
やさ呼吸に、そのゝきふるへ



群星

**

播磨　うすみどり

▲一月の增刊で日蔭草さんのお作を拜見して一寸一言申上げ度うございますの、日蔭草さんは脊が高いために外に出るのも氣張なってお仰るけれど、私なんかどうしませう、五尺三寸もあるんですよ、着物でも二丈八尺物では出來ませんの、まあ困り者ですわねえ。けど私ちつとも氣張なんかしませんわ、大道も大手をふつてあるきますの、大きくなり度いと云つたつてなりたいつたつて人の力ぢや出來ない自然の力ですもの。私かつて大きくなれよと願つた者でありません。そりやねメツポーとか脊高とか云ふ人はありますが、そんな方に限りて小さいのでせう。そんな方を見る度に、聞く每に、私が大きいんぢやない御自分が小ぽけなんだわと一人微笑まれて、かへつてお氣の毒でなりません。男で五尺二三寸と云へば普通でせう、女は男より小さいつてきめは私まだ聞きません。島田に結ひたければ島田にも結ひますの、けど度々鴨居でまげを打つにはあひそがつきてよ、お兄樣つてば「美いちやん上に稅金がいらないと言つていくら高るの、家も特別高いのを建てなくちや」ですつて、まあ私は別あつらへよつてすまして居ますわ。此間も面白くつてよ、活動寫眞見にいつたの、そしたら後に小さい方が居なさるぢやありませんか、お氣の毒だと思つてね前へ〳〵と退つて上げましたら、すーッと頸すぢから冷たい風が吹き込むんでせう、變だと思つてふり返ると、驚いちまつてよ、一番後へなつて居るんですもの、馬鹿に親切氣を出したものですねえ、けどよく見られましたわ、こんな時には大へん便利ね。

日かげ草さんのやうに御自分からさう日蔭の草におなりなさらず、ずつと氣を大きくお持ちなさいませな。

**

伯耆　新田文子

▲大正二年の我が親愛な、女子文壇の第一增刊を手にした私は、高い想像をもつて一頁〳〵繰つて行きました。

▲なのりそ樣の「現代婦人に與ふ」——極く常識的に、而して一々眞理にあつて、殊に自殺婦人の例など最も適中したものと思ひ、うれしかつた又、無理な女性觀でも、男性觀でもないのがうれしく讀まれた。

▲菊子樣の自己に對する愛——重い調子で、御自分の重い胸を吐露なすつたのが、何より私の心を引いた。そして一種の尊さを感じた。

▲山田邦子樣の[illegible]——數首の和歌のうちに母らしい妻らしい氣分が充分現はれて居ると思つて、何より邦子樣の其やさしいお心根を偲ばせた。

▲巖谷小波先生の新らしき女とは何ぞや——あまり讀む前の期待が過ぎたのか、新らしい女の解決としては、感心出來なかつた。殊に女の欠點のみが見てある樣に思へた。

▲水野先生の若き婦人に送る手紙——成る程といふ感じが、胸に殘つたけれども、明確に如何なることであつたといふ想が浮ばないのが、物たらない心地がした。

▲日かげ草樣の短草怨——題が一寸目を引いたけれども其の內容の幼稚な事、女子文壇の記事として、何となくふさはしからぬ心地がした。

▲澤村先生の二階の朝——こまやかな藝術的な觀察がうれしく思はれた。

▲前田先生の歌謠と東海道——面白く讀まれた

▲水香樣の有髮の尼——實に悲しい痛ましい文字の綴りされども讀者には、それに對する强い感じを與へない。

▲初奉公の日記——正直にかけてゐる。

▲町より村より——いづれ劣らぬ藤、あやめ、と私は言つて置きたい。殊に、神戶の奧の村よりと、渡島の漁村よりとが、一番胸に深く殘つた。

▲笹本夕美子樣の武藏野の戰ひ——大演習の有樣が實によく描出してある。さながら、活動寫眞を見る樣な心地がした、末段の、快活な東京辨で演習談をしやべり出した。「何しろ、今日で三日三晩、ぽつちりとも寢ないんだからねえ………張合のない空彈を浴びて、所定めぬ野營なんていふのはなんぼ日本健兒でも、少々はこたへるよ」のあたりは、實に面白く感じた。

まだ申分位しか申して居ませんが、あまり長く

なりますから此の次ぎに。悪口を言つて叱られるかも知れませんが、いくら叱られても、かまひません。（妄評多罪）

＊＊
＊

長　崎　と　し　子

△人生はすべて藝術である。

△其道に依つて得たる作品を尊重すると共に堕落をさけねばならない其作品の堕落は自己の堕落である、作品は自己であり自己は作品である作品は自己の表白であり發表である。

△自己の作品乃ち自己を公然表現したくない、と云ふ人は一生を日影に生ひ久に自己を止むることを知らない不幸者だ、自己は永遠に滅ぶるものではない、身體其者は死亡しても自己は歌集となり、詩集となり、畫集となつて後世に止まる、文藝や繪畫は玩具ではない!!、

△私等現代の女は本來の男に對して反抗しつゝ一直に進んで居る、やつと女の頭の上る時機を社會が今日になつて吾々にあたへた。

△在來の女性が束縛されたゝめに現代女性私等は其人等のため亦自己のために反抗しなくてはならない、自己のためは他人のためであり他人のためは自己のためである。

△反省は吾々に第一位に置く可きことである、女性に反省發醒をうながす現代の男性は、其前一應自身を認めて後行ふ可きである。女性が異性に反抗する如になつた理を解して頂き度い。女の男に反抗することは無意識ではない對手の何物なるかを意識しての反抗であり時代社會が要求したことである、其要求に應じての反抗！眞にこれ徹底したる反抗ではあるまいか。

△道徳や宗教を貶す人程其人は愚昧だと云はねばならない、現代文藝家には隨分彼の樣な人が多い如だ、倫理書の一行でも宗教書の半頁も目を通さないと云ふ人は不幸者だ、やゝもすると宗教や倫理教育を無價値なものにしてしまつてそれで自分は大きな氣で居る文藝家等が少くはあるまい、こんなことで如何して健全な自己の發表や美しい作品を生むことが出來やう!!現代女性吾々は舊道德宗教の破壞者であり開拓者でなければならぬことは言ふ迄もなく現社會の要求であるものだ、社會はこれを吾々に任じて居る、吾々の任業に亦大いなるかなだ……。

＊＊
＊

廣島縣　中村しづ子

▲私はゆふべ三時頃まで、讀み耽つた女子文壇の記事について考へる事が多かつた。佛國の結婚難！文明と生活難との必然的影響？……といふからは我邦の前途が思はれる。女といふ事も益々考へられる。新渡戸博士の『哀樂の向上』！先生のお說は、何によらず、皮相な空論でないので、ヒタと、觸れて確に感覺するものがある。人世の悲哀！最も深き悲哀、最大なる悲哀に接觸したる人は幸福なる哉。斯くて其の悲哀の裡より曠大にして不朽なる光明を見出して、救はるゝ人は最も幸福である。そは偉大なる宗教の信仰であると思ふ。自己の發展！さうだ自己を發展しなければならない。自己を知りて之を信じ之を奉じて何事も爲し遂げなければならない。私は自己を知らむことに一意努めつゝある。自分――今迄の自分は思想の人にして實行の人でなかつた。私は須く實行の人とならなければならない。私の急務は深く己を知り、もつと\もつと博く勉強しなければならぬ。而して言行の一致の外にない。』私の日記のページは殆ど精神的生活の日記で埋められて行きます。右に擧げましたのも日記の一節です。肉體的には極めて、平凡な單調な生活の中に居る私は精神上だけになりと、超越した理想のライフを營みたいのですわ。而して、自ら勵まし自ら押し行く私の心の、例へ寸尺づゝでも、我が畢生の大なる標的に近づき行くことを希ひこれを悦ぶ者です。私は、女と生れて、妻たり、母たる前に於て先づ眞面目なる人間であらねばなりません。女としての人間。人間としての女。何うしても私は深く考へます。そして確たる或る物を捕捉したくあります。否捕捉しなければなりませぬ。終りに一言私は、男性の內省を願ひ度うございます。

和歌

○（天　賞）

泣きたさに燈火けせと泣けずしてさびしくも又燈火つけぬ　上毛　阿久津雲路

○（地　賞）

數知らぬ心の音のつらなりの細きよりして君を見るかな　福岡　林　まつゑ

○（人　賞）　下谷　山脇もと子

のこされてひとりとなりしさびしさに春のひかりはしみ〴〵としむ

○

小鳥々々我此の胸も汝の如少しの音にもおびゆる哀れさ　豊後　すゑ子

○

冬の空低くおほへる下にわが戀ひ悲しみつ死ぬ命かも　山形　白藤智惠子

○

くろ髮の長きが故にかほどなる事にも一人悲しみてある　東京　靜香

○

冬の海死せるが如く靜かなり淋しく午後の日はたゞよへる　但馬　井上久子

○

病院の窓にもたれて悲しげに鏡を見ては涙こぼしぬ　備中　坪井幽美子

○

わが面に母の面影しのぶてふ悲しきくせはいつつきにけん　小石川　北昌經子

○

捨てゝきし人のよろしさ今更に偲びては泣くあさましさ哉　芝　津田なか子

○

春の朝を獨り木かげにすねりては若葉の香に死なんとぞ思ふ　美作　わか葉

○

手まりつく稚子輪の姫の昔の耕房にかゝる春の雪かな　東京　濱千鳥

○

灰白の花のちりくる心地して空めづらしく大雪の降る　弘前市　きさ子

○

川べりの枯れはてにける葭の如君の心の冷えにける哉　群馬　優梨

○

枝のみの大木にさきし花の如く空にかゞやく無數の星よ　函館　和歌子

○

いかなればかゝる悲しき日輪の東より出で西にかくるゝ　伊豆　渚の女

○

安らかに身を横たへて夢となるうつし心を追ふ春の宵　陸前　小岩柳

○

毛深かる女の襟にのこりたる白粉見れば悲しくなりぬ　麹町　櫻木雪江

○

春雨の降るがいとよし病床に物思ひつゝ夜の更けゆきて　大阪　酒井春子

○

晝となく夜となく海は霧降りて笛は悲しくなりわたるかな　神戸市　若松仙子

○

拒かへす杉葉が原の赤土の一かたまりにすみれ花咲く　大阪　横田金子

○

そちこちに祕すこと多き恥かしさ笑みて生くるもうら若き日よ　伯耆　田村美子

○

四とせをば男の子等とあり歌よむをいさめる老いし我母と住む　金澤　美子

○

春の野邊君を待つ間のすべなさにつみてあつめしたんぽゝの花　石井明子

○

はからずも梅の小徑にふとあひぬむかしつれなき君なりしかど　浮舟女

○

かたらひは南の國の椰子のかげ渡る小鳥に雲を戀ひけり　名古屋　波之花

○

トンネルの闇より出でしひとみには海の蒼きがいとゞうれしき　東京　鶴子

○　伊東花蝶子

あゝ切に切に願へど君は早われさめたりとかくれ行くはや
栃木縣　みどり子

○

若ければこのあたゝかき古里を悲しと云ひて泣く子なるかな
北海道　松城せい子

○

春の風君とならびて島通ふ白帆かぞへし日の如くふく
大分縣　孔雀

○

からくりのうごくがごとくたゞうごくわれは寂しきあはれひとづま
城南　すゞ江

○

ゆあみゐるわが柔肌に月させばはづかしきかな君に逢ふ如
茨城　小林りつ

○

江を越えてうつる灯影をみるごとに戀しき君をしのびぬるかな
青山　武林朝子

○

春くれば物のなつかし故郷の若草山の蕨おもほゆ
京都　勝岡とし子

○

くろみゆく海のかなたにけむりふく島ありときく島のゆかしさ
肥前　町田はし子

○

すごくと桃咲く家を逃れ行く若き日の影泣かま欲しかり
霧多布港　大野波萬子

○

海の面白く凍りて波の音もきこえずなりぬ寒國の冬
佐賀　おちば



不動様へ　深川　矢澤榮子

春風は野面をなでゝ衣裁つはが窓きはにかろく吹き入る
堺市　白さぎ

○

うき事もはた楽しきも少女てふ聡き言葉に生くるわが身よ
深川　矢澤菊子

○

あはれなり島の少女も雨の日を椿の花のしづく見るかな
對馬　伊藤夕陽子

○

影ならず幻ならずうつし世の我世の春の花にねむらん
神奈川　浮草

○

逝く處女と生るゝ人妻とつきあたる日を思ひ見る時のはかなき
埼玉縣　紅星子

○

故もなく若き人らにうちまじり語りてあればやゝなぐさみぬ
羽後　その子

○

人おもへば暗くなりゆくみづからの心に母の瞳ほゝゑむ
遠州　宮下みよ子

○

疲れたる身をなげふして此日日に心すさめる我を悲しむ
金澤　畔の花

○

青白き瓦斯の光に暮れて行く春の夕を淡雪の降る
渡島　濱の女

○

朝より淡き思出は裁板の前に坐りて夕まで縫ふ
三次町　増田幾子

打てど打てど日毎にまさる我が胸は君戀しさに物思ひぬる
○　姫路　九十子

盲目びと夢に生くてふ美しささもあらばあれわれも眠らん
○　近江　瑠璃香

誰れか來て我が心をば抱けかし僅に殘る望のために
○　仙臺　妙香

櫻散る淋しき夕べに手をとりてかたり行きけりおぼろ月夜に
○　伏見　溪の女

いつしかにながむるものとなりにけり君があたりの夕暮の空
○　函館　川添美津

おぼろ夜はおぼろにものゝかげつくるその物かげに戀は生れし
◎　仙臺　橋本秋草

とやかくと思ひあまりて人知れず泣きあかしたる春の夜の月
○　宮城　長谷川紫葉

君われを小鳥の如く愛と云ふ黄金の籠に飼へるものかな
○　西多摩　笹本夕美子

君故にわが一生をあやまつと尊き犠牲に身を顯はせぬ
○　伊賀國　操子

はもにかを靜かにふける御君をかりそめに見し夕まぐれかな
○　大阪　きぬ子

橋詰の自働電話のそのあたりわれまつ人を思ひつゝゆく
○　米澤　藻の花

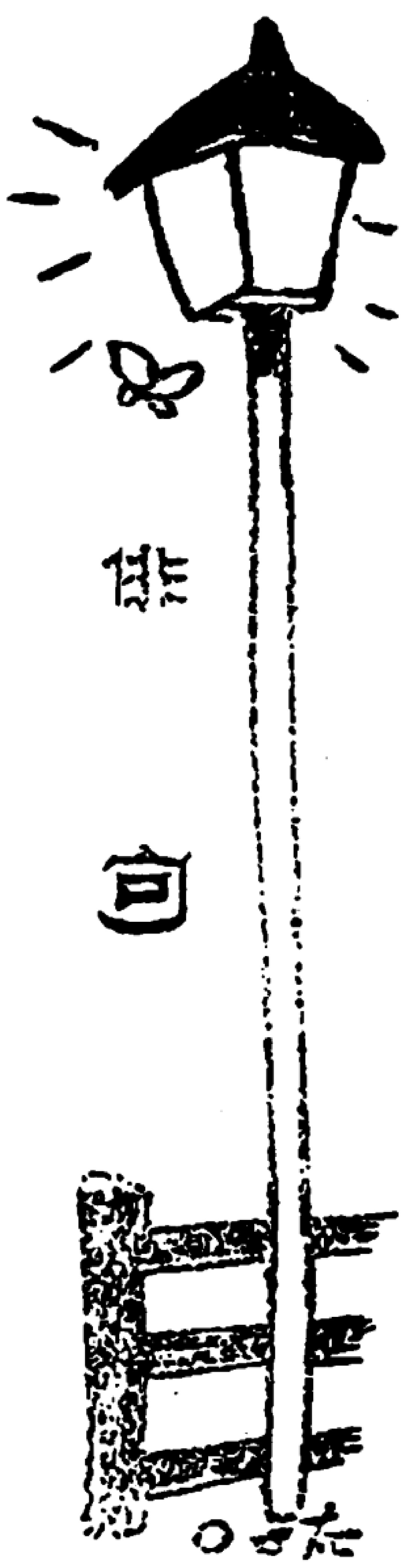
つゝましう胸に消ゆべき戀なるや三とせを祕めし君が面影
○　渡島　白百合

今日また空しく過し落日をみる日も寂し若き日の春
○　米子町　糸井衣子

赤き毛の小犬もらひてよろこびし稚きわれのなつかしきかな
○　廣島市　村上清子

此の頃の身のはかなさに袖しぼる濱の千鳥にあらね共我
○　信濃　峰の嵐

歎しつゝかたみの思ひ果敢なけれ二人が受けし性のよわさよ



○（天賞）
餌をひろふ鷄美しき春の風　伊賀　操子

○（地賞）
春の月御堂の殿の榮華かな　青森縣　上野霞子

○（人賞）
雪の朝よごれし足袋の恥かしき　兵庫縣　英佐江

象に乘る王者の傘や春の風　牛込　畑中まさ子
色々の花咲く庭を石鹸玉　肥後　那須くま子
草の芽にいた〱しくも春の雪　秋田縣　藤木高子
庭番の爺と婆あり春日和　大和　乾やよひ
梅咲くやほゝえみながら着物縫ふ　三國山下　都香
まだ頸に小鈴つけたり猫の戀　函館　川添美津
二人居て語らぬ程の冬ごもり　周防　美女子
氷する硯の海の寒さ哉　廣島　宮垣はつ代
金譜の跡さびしさや丸火鉢　備中　馬越ます子
大漁の聲する舟や丘かすむ　淡路　清水花子
花緒切れて裸足になるや春の雨　佐賀　おちば
古沼も鏡の如し厚氷　播磨　龜岡みつゑ
雪の日や赤き編みて暮しけり　岩見澤　清川ゆき子
雜木山いさゝか青み春深し　茨城　黑田綠葉子
古寺に古しのぶ梅見哉　廣島市　村上清子
春の風絲取る子等を吹きにけり　堺市　白さぎ
池淺し鯉に落花のふりかゝる　山城　木の花
寒月や草野分けゆく斥候兵　城南　蘇江



今年の櫻

今年は春寒の時期が永く、漸く三月の末になつて梅の花の噂を聞くやうになつた、櫻は何うしても四月十日前後であらう、向島の櫻は年々枯木となるのが多いので、今年は更に新しく植ゑつけた所もある、幾許か向島の花は賑はしくなるだらうと云ふことである。荒川の方は電車が延長したので見に行くのに便利になつた、満開は四月中旬後であらう。

火事の都

神田の大火以來、東京には恐ろしく頻々と火事沙汰があつた、神田大火のあつた日から僅か二十日間に市内に六十ケ所の出火があり、多い時は一夜に十ケ所もあつた、市民は殆ど安眠するとが出來なかつた、毎夜二ケ所なり三ケ所なり燃え上らない處はないのだから實際風の吹く晩などは、おち〳〵と眠れないのである、日暮里の如きは二三百戸を全焼した大火が一月以來四五度もある、小火は何十回とあつた、而かも殆ど放火だから驚かざるを得ない、前月七日には横濱にも大火があつて全焼二百餘戸、同日深川にも大火があつて三百餘戸を焼いた、其他二三戸の焼失は無數にあつた。

婦人記者募集

今同本社編輯部に於て、婦人記者一名を要す志望の方は履歴書携帯の上、本人自ら本社に來談あるべし、但し時間は午前十時より午後五時までの間に限る。

編輯部

地方の火事

祝融氏は獨り都會ばかりでなく、地方にも荒廻つた、三月に入つて先づ三日には沼津町に大火が起つた、焼失千二百戸以上殆ど沼津全町の滅亡と云つて宜い、町民の困厄察すべしである。七日には静岡市に五十餘戸を焼いた、六日には常陸の山林に山火事があつて、東西二里南北一里を赭山にした。十一日には名古屋目貫の場所に十戸程焼失せしめた火事があつた、十五日には福島縣に六七十戸を焼いた、十三日から十五日に渉つて紀伊の山林に山火事があつて數百町歩を焼いた、又十二日には内地を飛んで三宅島に火災起り、船二

十三艘と家屋百戸とを燒いた。

○孫夫人の奇禍。孫逸仙の夫人は他の婦人二名と共に、微行して東京見物中、十六日午後其乘れる自働車が丸の内で電柱に衝突し、三人の婦人は負傷した、旅行中に氣の毒なことをしたものである。

○森律子の洋行。帝劇女優森律子は今回愈々洋行することゝなり、前月二十二日出發した。

○四條大橋成る。豫て改築中の京都四條大橋は愈々落成して、三月二十一日盛んなる開橋式が行はれた。

○婦人雄辯會。新眞婦人會では前月十六日和強樂堂に演説會を開き、宮崎光子、木村駒子などいふ婦人が演説をした。

○一萬六千圓の指環。本郷の佐藤貞子と云ふ一婦人が此間或る紳士から讓つて貰つたダイヤモンドの指環は價格金一萬六千圓だ、之を一個の婦人の指に穿めて置くとは勿體ない。

●新●刊

○眼鏡　島崎藤村著

實業之日本社では『愛子叢書』といふ叢書の出版を初めた、愛する子女の爲に父母や兄姉が買つて讀せるには最も恰好の本である、殊に此叢書に筆を執る人は、凡て文壇第一流の大家ばかりだから、責任を持つて書いてある、書生上りの人が面白半分に書いた少年少女小説とは位が違ふ試みに第一篇の『眼鏡』を讀んでみても其事が分る、全文四號活字で讀み易く出來てゐる、第二篇は花袋氏の小さな鳩。（定價四十錢、實業之日本社）

○お鯉の方　富小路春洋著

愛妾お鯉の方と云ふ名は、口さがなき京童に唄はれてゐる、此小説はそれから思ひ着いたものであらう。（定價金五十錢、日本橋本石町明文館）

○逗子物語　湘南生著

逗子物語は小説『不如歸』を背景とした一篇の哀史である、と著者自らも云つて居る。如何にも然うらしい（定價金五十錢、京橋區南傳馬町紅葉堂）

▲靑鞜社研究會　愈よ四月七日より晝夜交代に開く、阿部、生田、安倍の諸文學士、岩野、馬場、玉井、高村諸氏の講演がある、語學研究もやる會費は一ケ月金一圓、場所は神田の青年會館會員は婦人に限る。別に五月からは此研究會の講義錄も發行するさうだ。

▲自由講座開かる　豫記の如く自由講座は前月から開かれた、場所は本郷壹岐坂の本郷敎會。

▲現代詩文の發行　服部嘉香氏主任の個人通信敎授は追々發展して、五月からは機關雜誌『現代詩文』を發行するさうだ。

▲翁ちゞみ　銀座尾張町の井上商店では追々夏向になるので、防汗用翁ちゞみで作った改良裾よけ、襦袢、シヤツなどを賣出した。

▲女子文壇社代理部特賣品

本社へ御申込になれば便利で確實にして安い物が買はれます。此の外廣告欄にある品物は何でも御取次致しますからドシ／＼此機關を御利用下さい

產科婦人科專門山本、高橋兩醫學士證明

●新案特許 冷え知らず（一名子宮保溫器）

▲特價金五拾錢　送料四錢

此を御用ひになれば、家に居つても溫泉に入浴も同樣にして、子宮を溫め婦人諸病を根本から治する効能あり、使用法も亦簡便にして何の面倒もありません。

●東京流行 德用蛇の目傘

▲特價（●女持七十錢、九十錢、一圓二十錢 ●男持八十五錢、一圓、一圓三十錢 ●學校用小供持三十錢、各送料八錢）

いろ／＼種類がありますから御注文の折は男女の別又は年齡を御申越下されば色合等は見計ひ送品致します、御好品も調製致し升。

藤川藥學士先生發明

●新案特許 安全帶

▲特價（安全帶●甲一圓二十錢●乙八十錢●並五十錢●各一本で四五年使へ升●安全衣一打金四十錢●内地送料一組（帶衣共金八錢餘））

歐米婦人の用ふる月經帶の長を取り短を補ひたる物ですから起居動作にも便利なり、如何なる月經の多き方にも之を使用せば過失の憂なし。

藥劑師間中綱彥先生發明

●新ふけ取香水 レゾール

▲特價（大瓶金九十錢 小瓶金五十五錢 各送料八錢）

如何なるぬけ毛、ふけをとめ髮のくせを直すこと妙なり。

●新案特許 ハイカラたすき

▲一組箱入定價金八錢
▲五組箱入定價金三十五錢　送料二錢

●特許竹中式 小町はり箱

▲特價（本黑塗製金一圓二十錢、特製金六十五錢 上製金五十錢△送料小包八錢海外三十錢）

本品は學生諸嬢が通學に携帶し易く家庭用としても便利且實用向にて取扱も亦自由なり

●特許竹中式 絲掛附くけ臺

▲特價（朱塗箱入金七十錢　各送料十二錢 黑塗箱入金六十錢　同特製金三十錢 同上製金二十五錢　同並製金二十錢）

針仕事に絎絲を絲卷にまき取る時一々人手を煩はさず其上絲の亂れ、ヨゴレ等の心配なく、使用後は折疊み輕便にて針差、尺度を自由にシマイ得る三德兼備の重寶あり

●特許竹中式 庖丁掛附兩面用 俎板

▲特價（大金三十二錢　中金二十八錢 小金二十二錢　各送料十六錢）

本器は兩面何れへも回轉し至極便利にして從來の俎の如く水氣のため足より腐朽する心配なく何年使用するも破損の憂ひなく德用の珍品なり

文藝欄 投稿規定

▲文藝欄の投稿は女子に限る ▲原稿は自今振りがなを要せず ▲二十一字詰小品文は三十行乃至五十行以内 ▲小說は二十四字詰百行以内 ▲詩は長短隨意 ▲群星欄も長短隨意二十一字詰 ▲和歌俳句は一人一首限り ▲圖畫は必ず方二寸以內 ▲投稿は每月十五日、嚴に締切る。

▲贈賞 ▲小說は天賞金二圓、地賞金一圓、人賞金五十錢 ▲小品文は天賞金二圓、地賞金一圓、人賞金五十錢、▲詩は天賞金一圓、地賞金七十錢、人賞金三十錢 ▲和歌は天賞金一圓、地賞金五十錢、人賞金三十錢 ▲俳句は天賞女子文壇叢書一冊、地、人賞は本誌一部宛 ▲圖畫は天賞金七十錢、地賞金五十錢、人賞金三十錢 ▲群星欄は平素優秀なる投稿を送る人に三箇月每に金一圓の特賞を呈す ▲以上贈賞は金一圓以上は物品一圓以下は圖書切符にて贈るものとす。

改正 定價表（每月一回一日）定期號外年四回增刊）增刊號同額

△一冊分（送料とも）	前金拾九錢五厘
△三月分（增刊共四冊）	前金七拾參錢
△半年分（同八冊）	前金壹圓四拾錢
△壹年分（同十六冊）	前金貳圓七拾錢

◁申込注意▷

注文は總て前金のこと◎振替貯金（口座東京一七二九番です）にて拂込の時は必ず雜誌代金の外に登記料金壹錢增しのこと（用紙は最寄郵便局にて無料にて吳れます）◎郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと◎郵券代用は必ず壹割增のこと（收入印紙は絕謝）◎最寄書店にて品切の時は直接發行元へ御注文を乞ふ本社への照會は返信料添付なければ回答せず

◉廣告締切期限……每月十五日の事

廣告掲載料金は御照會次第御報す

取扱所 博報堂、電報通信社、各報社、文明廣告社

大正二年三月二十五日印刷納本
大正二年四月一日第九年第五號發行

編輯兼發行人 野口竹次郎
印刷人 松本魁
印刷所 東京國文社

發行所 東京市京橋區大鋸町十一番地 女子文壇社
電話京橋六〇七番
振替東京壹七貳九番

特約販賣 東京堂、北隆館、上田屋、至誠堂
東海堂、良明堂、大阪盛文館

大正二年三月廿五日印刷納本

女子文壇

第九年第五號（毎月一回一日）四月一日發行

●姙娠中の養生

多年連れ添うて子供が無く、醫者にかゝり、薬も飲んで、やう〳〵姙娠し、あゝ目出たや、嬉しやと、盡させぬ夫婦の寢物語、心の中もさこそと察せらるゝが、偶姙娠中の養生を怠つた爲、流産して掌中の珠を奪はれたり、御産が重くて家人の膽を潰したり、幸ひ無事に御産が濟んでも、生れた子供が非常に弱くて、行末が案じらるゝ様な始末、前の喜びも却つて身の仇となる場合が往々にある誰もいふ如く、御産は婦人の大厄で、動もすれば、生命にも危險のある事であるから、姙婦殊に初めて經驗する人などは一層注意が肝要であるで此等の人の爲に姙娠中の養生を左に説明致しますから一讀を願ひたい

▲第一保溫

姙婦に限らず身體を冷やすといふ事は、婦人に取つて甚だよろしくない、一體胎兒といふものは、子宮内の溫かい液の中に泳いで居るもので、御腹が冷えるに隨つて子宮内の液も冷え勝になるのであるから、胎兒に障ることゝなる、それで身體を冷やして、感冒などに罹つて難産や流産の厄に遇つた例は、いくらもある、故に四季の衣服は其季節に應じて、常に溫かにする樣心掛け、一方保溫に特效ある中將湯を服用するなどは極よろしいそれから、我國の習慣として、姙娠五ケ月目から岩田帶を用ひるが、これは胎兒を正しい位置に保ち、御腹が餘り膨れ過ぎない樣にする効能があるが、併し身體を餘り堅く締ると、血行を妨げて、母體に障りが出來、胎兒の發育を害するから注意が必要である

▲第二清潔

姙娠中は、局部の分泌物が多くなり、陰門炎や膣加答兒に冒され易いものであるから、隔日位に入浴し、（あまり熱いのはいけない）局部を清潔にして置くがよろしいけれども、冷水浴、海水浴等膣内の冷水の這入る機會を避ける様注意せねばならぬ、そして若し陰門炎や膣加答兒に罹つた時は、宮比散の溶液でよく局部を洗ひ淸め、夜分休む時中將球を膣内に挿入するがよい

▲第三運動

昔上流の奥方で運動する機會の無いものは、御座敷に豆を撒いてそれを拾つたといふ話がある位で、運動は新陳代謝を促し、姙娠に起り易い便秘を防ぎ消化不良、不眠等を癒し御産を輕くする效能があるから、是非勤めたいさりとて重いものを持つたり、高い處に手を擧げたり、急な坂に上つたり、凸凹ある道を歩いたり、其他砂利の上に車を走らせ、長途汽車旅行をするなどは極惡い方で、兎もすると、胎盤を剝離せしめて流産早産を起す事がある、それから運動といふもつまりは、血行を盛んにするといふことに歸するのであるが中將湯は血行を促進する作用を有つて居るから運動を補ふ一つの方法にもなる

▲第四惡阻

姙娠してから一ケ月目乃至四ケ月目に、食事の前後に嘔吐又は惡心を催はす事をいふので、食物を取れない爲めに營養不足し、身體瘦せ衰へ遂には食物を取らずして吐き、極く重いのになると、遂に死に至る事があるから、決して其療治を怠つてはいけません、さて其療法は、第一安靜に臥さしめ、食物を強ひず精神を樂ましめ中將湯を服用するがよい

以上は姙娠中の養生法であるが、右の數ケ條を嚴守すれば、安々と御産が出來、生れた子供も丈夫で、あゝ目出たい〳〵と一家中歡樂に滿つるに相違ない、其他産後の養生やら、子宮病血の道等婦人病に關する事は、「婦人衞生手引」に詳しく載せてあるから一讀するがよろしい、同書を希望の人はハガキにて東京市日本橋區通四丁目津村順天堂へ申込めば早速無代で送つてくれます